
バラエティギフト

青葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バラエティギフト

【Zコード】

Z3204V

【作者名】

青葉

【あらすじ】

名探偵コナン短編集です。思いつくままに気まぐれ更新します。
CPは「蘭、新蘭、高佐に…」いろいろあると思います。
恋愛以外も多いかと思います。

さみの笑顔がみたい（前書き）

短編集書いてみることにしました。

…「雨の午後は…」もいれればよかつたかも、とか思っています。

第一段は蘭田線です！

では、お楽しみいただければ幸いです。

きみの笑顔がみたい

コナン君はいつもどこか無理しているみたいに見える。

買い物から帰ると、コナン君は居間の窓辺に座つて外を眺めていた。ドアを開けて「ただいま」とこつ間のほんの一瞬の間に見えたコナン君はどこか物憂げで、

何か考え込んでいるようだつた。

あんな瞳をして、何を考えているのだろう…
何かツライことでもあつたのだろうか…

なのに、

「あ、おかえり。蘭ねえちゃん」

コナン君は私をみると一ヶココと笑つて言つた。

まるで、無邪氣な子供のよつよ。ツライことなど、何もないかのよつよ。

いつだつてそつだ。

彼は自分の弱みを私に、いや、他人に見せることはないで笑つてゐる。

その笑顔の裏に本当の顔を隠して…

ねえ、何がつらいの?
何を抱えているの?
どうしてそんな表情をしているの?
教えてよ、コナン君。

でも、そんな事をきいてもコナン君はまた

「なんでもないよ。蘭ねえちゃん。心配しないで？」

といつもの様に笑うのだろう。

いつもの笑顔をつくつて…

きっとコナン君は理由を教えてくれるつもりはないんだろう

それならせめて、

この優しい子が作りものなんかじゃない自然な笑顔になるように頑張つてみよう。

「今日の晩ごはんはコナン君の大好きなハンバーグよー！」

「ホント？ わーい！ うれしいな！」

出来る」とはわずかしかないけれど…

「ほら、コナン君の大好きな仮面ライバーチョコ、買つてきたからね！」

「あ。う、うん… ありがと！」

なんだか笑顔がひきつついるよつたな氣もあるけど…

君の笑顔がみたいから…

私は出来るだけのことをしてみせる。

恋する人（前書き）

2個目です。

今回はWISH02様からのリクエストで新×蘭で！
リクエスト、ありがとうございました＼（^o^）／
ご期待にそえるかわかりませんが、どうぞ！

またもや蘭日線です。

組織壊滅後、二人はまだつきあつてない設定。

恋する人

はあつはあつ、

私は一人で夕暮れの道を走っていた。

しばらくすると息が切れでどこかの家の塀に手をつき、息を整える。

「…ばつかみたい」

そのつぶやきがだれに対し向けられたものなのか、走り出す直前、あの言葉をいつた彼に対してなのか、それとも勢いに任せて思つてもいいことを彼に言つた自分自身になのか

「ばつかみたい、ばつかみたい！」

そう、それは今から少し前のこと、学校の教室での出来事だった。

部活を終えた蘭は急いで教室に向かった。

新一が待ってる

教室の前につき、ドアを開けようと手を伸ばしたとき声が聞こえてきた。

「おー工藤、こんな時間まで教室にいるひとは
最愛の奥さんでもまつてんのか～？」

「工藤はホントに毛利のことア・イ・シ・ヒ・るもんな～？」

中道君と余沢君の声だ…

つて私のこと話してる！？

…新一はなんて答えるんだろう？

「バーロ、そんなんじゃねーよ。」とか言つのかな？

でも、でも…

もしも「ああ、そうだよ」だなん言われたら…私は

だけど、聞こえてきた新一の声はそのどちらでもなかつた。

「バーロ、俺の蘭への気持ちは愛なんかじやねーよ」

うわ、そんな…

新一は私のことが好きなんじゃなかつたの！？

だからあの時ロンドンで告白してくれたんじゃないの！？

バンッ！

「ひ、蘭…」

新一が驚いたようにひきりを見る。

「わ、私だつて！私だつて新一のことなんか別に好きでもなんでも

なーしー。

わざわざ待つててくれなくたって1人で帰れるわよーー！」

そう言い捨てると私は身を翻し、その場からかけだした。

「あれ？蘭ちゃん、ビーツたの？」

「おばやね…」

よつやく荒い呼吸が落ち着いた。「私は新一のお母さんと声をかけられた。

隣に大きなスースースがあるから、帰ってきたといふなのだね。

「おばやね、ビーツてこんなとこいじー？」

「あら蘭ちゃん、こんなとこいふとは失礼ねえ。
私が自分の家にきむやいけないかしら？」

「えつ？」

本当に、今まで私が手を付いていたのは新一の家の壇だった。

・・・・・この間に「」まできたのだろうか

私はいつも、ツライ」とがあると新一の家にくるんだ

「んで？ 蘭ちゃんが今そんな泣きそつた顔をしてこるのはウチの懸念が原因かしら？」

「え、いや。あつあの…」

「ホラ、何があったのか言つてみて？」

「し、新一が、新は私のこと愛してなにつて…」

あの新一の言葉、今思つ出してもズキッとする

「新一のヤツ、本当に元気なこと言つたの？」

「はい。『俺の蘭への気持ちは愛なんかじゃない』って…だから、新一は私のこと好きじゃなかつたんだなあつて」

ああ、自分で言つてて涙がこぼれてきた

ふわつ

いいにおいがしたと思つたら、おばあまがハンカチで涙をふいてくれていた。

「あのね、蘭ちゃん。新ちゃんは蘭ちゃんへの気持ちが
”愛情なんて言葉で表せるものではない”って言つたかったのよ
「…愛情つて言葉じゃ表せない？」

「やつよ」

「じゃあ何なんですかー? 新一の私への気持ちってー?」

そつ吐ねるとおぼれまはふわつと笑つて答えた。

「恋、よ。愛情はね、包み込むことで満足できるナビ、恋はその人の全てを得てもまだ全然足りないの。だって形のない物だから、ずっともどかしくて、せつないの。新一はね、きっととずっと蘭ちゃんに恋し続けるのよ。永遠に、ね…」

「そうなのだらうか? 新一は永遠に私に恋をし続ける…? ドキドキした。

わいつ走つた時よりもずっとずっと…

と、そのとき。

ギュッと、後ろから誰かに抱きしめられた。振り返らなくてもわかる。

私を抱きしめているこの腕は

「新… ー……」

「蘭、ゴメン。誤解させたかったわけじゃないんだ。ただ俺は蘭が、蘭のこと…」

「もひ、いいよ。言わなくとも」

私は新一の腕からするつとぬけて振り返り、新一の口に指を当てる。

「私だって、嘘をついたからゴメンはお互い様だしね」

「嘘？」

聞き返してくる新一に、私は出来るだけぎりぎりの笑顔にして言ひ。

「私、新一が大好きだよ！」

私も、ずっと恋してるからね、新一に…」

「ら、ん…」

「あれ？ 新一、顔赤いよ？」

「な、何いつてんだ！ 夕日のせいだ！
それにお前だつて赤いじゃねーか！」

「私だつて夕日のせいよ…」

と、いつてから気がついた。

もひすでに日は暮れて、街灯がついてること。

それから私たちはふつと笑いあい、どちらかともなくキスをした…
はじめてのキスを…

それから新一は

「俺だつてずっとお前に恋してるからな…」

と言つと私を抱きしめた。

・・・とその時

「や～やつとひついたわね…お一人さん」

その声の奥の方をむくと、おばたまがビデオカメラを「ひかひに」向け
ていた…

「ぬわん…」「おばたま…」

それからひと悶着あったのは、いつまでもない。

私たちは恋をする
お互いに、永遠に

恋する人（後書き）

なんか、思ったよりも遅くなっちゃったみたいでした^_^：
いかがでしたか？

やつぱりラブランってかくの難しいな……

では、次回もどうぞお楽しみください。

13

a n i n s e n s i t i v e m a n (前編)

すみません。

「ナン×歩美、まだ思いつきました。」

もひひ々お待ひトセニハミ（――）ミハ

今度は新一+志保です。（ナニ×ではあつません）

志保田線で

FBIやCIAの協力もあって組織は壊滅した。

もちろんあの凶悪な組織相手に無傷でいられるはずもなく、多くの人が大怪我をしたし、私と工藤君とて例外ではなく2か月も入院してしまった。

そして、退院してから約3ヶ月後、よつやくAPT-X4869の解毒剤ができ、私たちには無事に元の姿に戻ることができた。

私は2つの決心をしていた。

1つは帝丹高校に通い、普通の高校生活を送ること。

そしてもうひとつは

「ねえ、工藤君」

「ん? どうした、宮野?」

元の姿に戻った直後、博士の家で体に異常がないか確かめている時。

私は宣言した・・・

「私、負けないから

明日から帝丹高校に通つて
蘭さんと正々堂々と勝負してみせるわ　　」

そう、これがもうひとつの方心・・・
蘭さんには敵いつこないつてわかつてゐるけど、
それでも、工藤君をあきらめない。

「・・・・・」

工藤君は手を丸くして黙つていた。
当然よね、イキナリこんなこと言いだしたのだもの・・・

だ・け・ど・・・・

現実はそんなモノじやなかつた。

数秒の沈黙の後、工藤君が言った言葉は、

「なんだ富野？おまえも空手するのか？」

あいた口がふさがらなかつた

そうだ、彼はこうこう男だった

なんて、

ドンカンな男！

a n i n s e n s i t i v e m a n (後書き)

タイトルは英語で「鈍感な男」
(のせず。英語に自信のない作者) です。
志保ちゃんはきっとこんなこと言わないだろ? な
とか思いつつも、
きっと、新一はこんな風にかえすにちがいない!
と勝手に想像しました。

次こそ「ナン×歩美!」(書けたらいいなあ……)

萌芽（前書き）

今回は「ナン×歩美です。
シン「様、リクエストありがとうございました&お待たせしました。
・・・ちゃんと×になってるかな?

「いや！絶対に行く、コナン君についてくもん！」

「歩美・・・」

コナンは困ったように歩美を見た。

コナンの前に立っている少女　歩美は大きな瞳をつりあげ、手を腰に当て肩で息をしていた。

それはいつもの様に、少年探偵団皆で出かけ、これまたいつもの様に事件に遭遇したときのことだった。違う事と言えば、珍しく阿笠博士がいなく、子供だけだったということだけだ。

コナンはすぐに事件真相を見抜いたが、危険性が高いということじで

元太・光彦・歩美をうまく丸めこんで、

灰原にまかせて犯人の元へむかう自分から遠ざけたのだがなぜか歩美はカンづき灰原のすきを突いてコナンの所へ戻つてきのだ。

コナンはふうっとため息をついた。

歩美は先ほどから自分を睨みつけた状態で一步も動こうとしない。

「なあ歩美・・・」

「……！」

・・・また何も言へてなしんたけど

「… も、せいかん君は、あふねーからお前は帰れ』 」 て言ひてしょ

その他の文書

だから、お前、危ない、てねが、てるんなら、

一絶え二対にい・せ！」

先ほどからこんな調子話が進まない。

・・・このままでは、ヤバイ。

犯人にまんまと逃げられてしまふ。
証拠も消されてしまふ。

コナンの顔にだんだんと焦りが見えてくる。それを知つてか、歩美はさらに言う。

「ねえ、コナン君、早く行こうよ。犯人に逃げられちゃうよー!? それでもいいのー!?」

「よくねーけど、お前、ついてくるつもりなんだろ?」

うん。とつなずく歩美に対し、

「危ないんだぞ！？怪我するかもしれないし、それでもいいのか！？」

とコナンがかえすと

「危険なことをこわがってたら探偵なんてやつてらんないもん！それに、危ないのはコナン君だつて同じでしょ！」

「だから俺はお前に危ない目にあつて欲しくなくて・・・」

「仲間を一人で危ない所にいかせるなんて少年探偵団じやない。ながま」

「コナン君はいつも一人でいつちやうじやない！」

「コナン君だつて、歩美だつて少年探偵団のメンバーなんだよー。」

それに、と歩美は付け加える。

「歩美、いつもコナン君に守つてもらつてばかりだけどそれじゃだめなんだよ。ちやんと成長しなきゃ・・・」

そつ言い切つた少女を前にコナンはしづかし沈黙し告げた。

「わかつた。ただし、俺のそばから離れるなよ。危なくなつたら俺が歩美を守るからわ・・・」

「うんーじゃあ、コナン君が危なくなつたら歩美が守つてあげるー。」

満面の笑顔とともにそういった少女はコナンの腕をつかみ、

「ほら、コナン君、犯人はどこなの？
早く行ってとつちめてやろうよー！」

その愛らしい外見を裏切るようなセリフをはきながら、かけだした。

自分自身の成長のために・・・

萌芽（後書き）

コナン×歩美、事件もので、というリクエストだったのですが
全く事件の内容が書かれてない＆あんま×になつてませんね・・・
すみません。事件、思いつきませんでした^ ^ (――) m <
タイトルの意味はまあ、今まで守られてばかりだった歩美の成長の
はじまり、
といつたところでしようか？

次回はこの間の新×蘭の続きを書くつかと思います。
ただ、明日は多分更新できません。

次回もよろしくおねがいします！

お姫様に祝福を（前書き）

「恋する人」の2日後の話です。
晴れて恋人となつた二人は、デートに出かけます。

またもや蘭日線（

お姫様に祝福を

2日前、新一と告白しあい、
その様子をビデオにおさめたおばやまにわんざんからかわれた。

そして、今日は新一とのデートの日。
新一があの後

「明後日ロロピカルランドにいひ

つて言つたんだ。

新一と二人で出かけるなんてすごい久し振りで、うれしくて早く目
が覚めた。

だけど、服はどれがいいかなんて何度も着たり脱いだりしている間に
あつという間に時間は経ち気がついたら約束の時間に間に合ひそう
にもなかつた・・・

「「、「ごめんね新一。遅れちゃつて！」

約束の時間に30分も遅れて現れた私に対し新一は、

「俺は今まで蘭のことずっと待たせてたからな。

30分くらいなんともないわ。ただ・・・

そこでいつたん口を閉じると新一は私を抱きしめ耳元でささやいた

「やつぱり来てくれないんじゃないかって不安になつた・・・」

あの新一が不安に? それは私だから、つてうぬぼれていいのかな?

「私はいくよ。新一が待つてるならどこのだつて、いつだつて。だから・・・」

不安にならなくとも大丈夫だよつて笑つてみせる。

「行こ、新一!」

私は新一の手をとりトロピカルランドにむかった。
そのときは自分で嬉しきの他にもう一つ別の感情があるなんて
気がつかなかつた。

～トロピカルランド～

休日のトロピカルランドはすごい人だつたけど、

新一が上手く時間を計算してくれたおかげであまり並ばずすんだ。

「せひ、 のど渴いたる？」

「ありがとう！」

のどが渴いたな、と思つたら新一が飲み物を買つてくれた。
私のことわかつてゐるんだな、とか大切にしてくれてゐるんだとか思う
とすごい嬉しかつた。

そして夕方

「俺、ちょっとトイレに行つてくるから
そこまでつてくれ！」

そう言つと新一はその場から走り出していくてしまった。

「あ・・・」

その時私の脳裏には一つの光景がよみがえった。

すぐおいつくからよー！

前に新一とトロピカルランドに来たときの、光景
ぼろり、と涙が零れ落ちた。

どうしてだろう。新一はただトイレに行つただけなのに・・・
今日はあやしい人なんて見なかつたのに・・・

不安なんだ

また、新一がいなくなつちゃうんじゃないかつて。
このまま帰つてこないんじゃないかつて。

そう、不安^{コレ}が私の中にあつたもう一つの感情だつた。

ヒック、ヒック・・・

大丈夫、新一は絶対帰つてくる。だから泣くな、自分。
そう思つても一度出てきた涙^{フアン}は止まらなくて、
そのまま泣いていふと。

「蘭・・・？」

新一が戻つてきた。

「蘭、どうしたんだ？誰かに何かされたのか？どうか痛いか？」

心配そうにたずねてくる新一を前に、安心した私は新一に抱きついだ。

「じょ、うわあ～。ひっく 新一～！」

「お、おこ蘭ー…？」

あわてる新一の声が聞こえてきた。

その声と、抱きしめているこの感覚が新一が幻なんかじゃないって証だった。

「あ、あのね・・・ヒック」

「う、うん？」

「不安、だったの。新一がまた、帰つてこないんじゃなかつて」

「蘭・・・」

「でも大丈夫だよー新一、」うつして戻つてくれたもんー。」

心配せないよううに涙をぬぐつたりこりと笑う

新一はそんな私を見ていつそう強く私を抱きしめるといった。

「蘭、『ゴメンな。不安こさせるつもりじやなかつたんだ。
それと、俺はもう一度とお前から離れるつもつはないから

「新一・・・・・・」

新一と二人、見つめあう。と

「あ、やべー蘭、急ぐぞー！」

新一は時計を見ると急にあわてだし、私の手をひき走り出した。

ちよつとムードが台無しなんだけど。

「はあー、間に合つたー！ほらついたぞー！」

到着した場所はトロピカルランドのお城の一番上の階、私たち以外誰もいない。

「ねえ、ちょっと。ここ、入つて大丈夫なの？」

「ああ、大丈夫さ。特別に許可もらつたんだ」

そつこえぱこじこへる途中でクルーになんか見せてた・・・

「なつ、特別に許可つてどうやつたのよ！？」

まさかあやしい手でもつかつたんじゃ・・・と疑いの眼をむけてると
「別に大したことはしてないさ。・・・前にここで起きた殺人事件
解決しだろ？」
そのお礼つてわけさ！」

と、そこで新一は人差し指を口の前にだし、シーツのポーズをとつた
まさか口止めか・と思つたらそつではないらし。・
新一が窓の外を眺めます。

ピュー・・・・・・ドオ――――

「う、わあ～キレイ・・・」

花火が上がつていた。

いつもと違う位置でみてるからか、ものすゞく綺麗だつた。

「ここで、蘭と花火を見たかつたんだ

「すゞい・・・キレイだよ。ありがと新一！」

そして花火も終わる頃、新一が私の方を見ていった。

「蘭、聞いてくれ。眞面目な話があるんだ」

そう言つた新一の顔は夜空に咲く花よりも赤かつた。

「何？」

私は新一の方をむいた。一人はまた向き合つ。

「・・・蘭つ。俺はお前が好きだ。この地球上の誰よりも。
だから、そつその一俺と結婚してくれ！！」

そう叫んだ新一が出したのは箱。

中にはシルバーのシンプルだけどとてもきれいな指輪がはいつて。
・

「私で・・・いいの・・・？」

ためらう私に新一はきつぱりと告げる。

「俺はお前しかいらない」

そして私は決める
答えなんて最初から一つしかなかつた。

「はい。喜んで！」

嬉しい・・・今までの人生の中で一番幸せ・・・・・・

そう言うと新一は、これからもつともつと幸せにする。って言つて
指輪をはめてくれた。

そして私の頬に手を添えると

「好きです・・・俺の、お姫さま」

口づけしあう二人を祝福するように、
最後の花火が一際キレイに咲いた。
今の二人をみているのは、花火だけだった

お姫様に祝福を（後書き）

フツーの「手帳」がいつのまにか
プロポーズ話になつてた・・・
優作さんと同じ場所でさせよつと思つてたんですけどね・・・
なんか変わっちゃいました。

ではまた次回もよろしくです！

あわせやわら（前書き）

いじばらんせー

今日せバイトが思つたよつ早く終わつたので更新でもつた

今回せ恋愛色セロですか。

「まったく、蘭のヤツ。子供扱いしゃがつて・・・」

コナンは毛利家の居間でひとりぼやいた。

もちろん、台所にいる蘭には聞こえないようこ

今、コナンの目の前にあるのは子供用のパジャマ
そのおなかにでかでかと書かれているのは青がベースの服を着て
額には黄色のY、首には赤いスカーフ。
そう、仮面ライバーだ。

「コナン君、新しいパジャマ買つてきたよ！
じゃーん、何と仮面ライバーなのだあーー！」

とこう明るいセリフとともに蘭び渡されたのが、コレだ。

なんで高校生にもなつて仮面ライバーなんだよ・・・
などと言えるハズもなく、コナンは笑顔でそれを受け取った。

・・・蘭ときたら、いつもこうなのだ。
何かにつけ、コナンが新しい物がいる、となると
こうやってヤイバーグッズを買ってくる。
・・・もしや蘭が仮面ライバーが好きなんじゃいか、と思ひまどひ。

お箸にお弁当箱、歯ブラシ、文具に下着、etc・・・
数えだしたらきりがないほどだ。

そして、今日のパジャマだ。

「(1)飯よ~

蘭の呼びかけとともに、夕食がはじまる。

今日のメニューはぶりの照り焼きにほうれん草のおひたし
それに根菜の煮物だ。

「おこし~? ロナン君?」

「うふ。 とってもおいしいよ~」

さすが蘭ねえちゃんだよね、おじわん~」

「ああ、英理のヤツとは大違いだ。

蘭の料理の腕がアイツに似なくてよかつたぜ~」

「うふっとお父さん~お父さんがそんなことばかり言つから
お母さんがでてつちやたんじやない~」

「おおかな夕食が進む中、ロナンはお茶碗を落としきつくなる。
先日、蘭がロナンのお茶碗をわってから
ロナンは来客用の薄緑色のお茶碗を使つているのだが、

子供の手には大きいく、やや持がづらうのだ。

「あ、コナン君大丈夫？やつぱりそれじや持ちにくいやね？
今度新しいの買つてきてあげるからそれまで我慢してね！」

「フンー居候のガキの為にわざわざ新しいの買つ必要なんざないが。
・
落して割られたら迷惑だからなー」

「もー、お父さんたらすりすりとう言い方するんだからー。
「ナン君、これでもお父さんはコナン君の事心配してくれてるのよ」

「別に俺は」んなガキ・・・」

「はいはい」

そんな会話がされた数日後、蘭が買つてきたのは

「はい、コナン君。新しいお茶碗買つてきたからねー。」

満面の笑みとともに渡されたのは、

案の『定仮面ヤイバー』のお茶碗だった・・・

「はあ～」

コナンは蘭に気づかれないように何度かのため息をついたのだった。

ねねやねこ（後書き）

蘭つて口ナヘのじと子供扱にするの好きだな
と思い、書きました。

割れたお茶碗つてのは「漆黒の追跡者」からです。

至福の日（前書き）

こんばんは。

今回は新蘭結婚式

お姫様に祝福をの3年後。

例によつて蘭目線

・・・でも結婚式つて出たことないからよくわかりません^ ^ ;

ある、よく晴れた春の日。

今日は桜が満開に咲いている。

今日は、結婚式。

私と新一の、結婚式

「蘭、ついたぞ」

お父さんが車のドアを開けてくれた。

「あつがとう、お父さん」

3年前、新一が私にプロポーズした後、新一は私のお父さんとお母さんに結婚の許しをもとめた。

お母さんは「結婚は20歳になつてからね」といつてすぐに許してくれた。

だけどお父さんはなかなか許してくれなくて、

だけど新一はお父さんの許しが出るまで毎日私の家にきた。そしてそんな日が半年も続いたある日、突然

「絶対に蘭を幸せにして」

そんな言葉と共にお父さんの許しが出た。

その前日まで絶対にダメだと誓っていたのに、急に許した事が気になって

その日の夜お父さんに聞いたら、

「新一^{アイチ}はお前をさんざん待たせたから許すつもりはなかつたが、お前が待つた分だけ毎日來たからアイチの気持ちを認めたんだ」

やつまつと優しい目をして私の頭をくしゃり、となると

「よかつたな、蘭。幸せになるんだぞ」

と微笑んだ。

・・・いよいよ式が始まる。

お父さんに手をとられてバージンロードをゆくくつと歩く。

その先には、誰よりも愛しい人。

新一が待っている。

そして私は新一のもとにたどり着いた。

「工藤新一、あなたはこの者、毛利蘭を妻とし、
その健やかなときも、病めるときも、喜びの時も、悲しみの時も、
富めるときも、
貧しきときも、妻を愛し、妻を敬い、妻を慰め、妻を助け、そのい
のちのかぎり、
堅く節操を守ることを神聖なる婚姻のもとに誓いますか」

神父さんの前での誓この言葉。

「はい。誓います」

新一のきつぱりとした声。

そして神父さんが次に私にたずねようとした時、
再び新一の声が聞こえた。

「そして、この命が無くなり魂のみとなつても、
蘭一人を愛し抜くことも重ねて誓います」

「なつ、新一！」

式場がざわめいた。神父さんも驚いていた。

当たり前だろう。今まできつとこんなことを言つ人はいなかつただろ
うから。

オホン、と咳ばらいをして神父さんは式を元に戻す。

「毛利蘭、あなたはこの者、工藤新一を夫とし、

その健やかなときも、病めるときも、喜びの時も、悲しみの時も、

富めるときも、

貧しきときも、夫を愛し、夫を敬い、夫を慰め、夫を助け、そのいのちのかぎり、

堅く節操を守ることを神聖なる婚姻のもとに誓いますか」

「はい。誓います」

そして、と心の中で付け加える。

私も、魂だけとなつても、新一だけを愛し抜きます。と。だつて今まで口に出したらまた騒がしくなつちやうもんね！ここでふと参列の方に田をやるとお父さんが号泣しているのが見えた。

お母さんも涙ぐんでいる。

お父さん、お母さん・・・

今まで一人に育てられてきた。

そのことを思うと私も涙が出てそつになる。

だけど必死で涙をこらえる。

晴れの日に花嫁の顔が雨だつたらヘンだから・・・
でも、やっぱりほんの少しだけ涙がこぼれてしまつたと思つ。

最後にブーケトスの時がやつてきた。
ブーケの花は園子が選んでくれた。

赤いアネモネの綺麗なブーケ。

園子つたらブーケの花を決めるのを手伝つて欲しつて言つたら

「アネモネよ、アネモネ！ それも赤いやつ！

花言葉が『君を愛す』ですつて！ あんた達にぴつたり！
あ、でも胡蝶蘭もいいかもしないわね。『変わらぬ愛』ですつて。
あ～でもやっぱコレも・・・」

なんて言つてなかなか決まらなかつた。

あれもいい、これもいいなんてなかなか決まらず、
結局一周めぐつてアネモネになつた。

「でもね、この花つて本当にあんた達にぴつたりだと思つよ・・・
赤い花だと花言葉は『君を愛す』なんだけど、
白は『眞実』・・・新一君にぴつたりでしょ？
そして紫は『あなたを信じて待つ』。

新一君をずっと信じてた蘭にぴつたりよね！」

「ちょっと、園子！ 私はもう新一のこと待たないんだからね！」

「『めんじめん。でもさ、そんなこと言つても

蘭は待ちそつだよね、新一君のこと。

例え新一君に何があつても・・・」

「もつ！ 不吉なこと言わないでよ！」

そんな会話をしながら決めたのが、このブーケだった。

そして私はこのブーケを大切な親友の方へと投げる。

園子が京極さんにまだプロポーズされてないってへ口んでたから、
すぐに園子にも幸せがくるように・・・

見事キヤッチした園子は嬉しそうに笑つて

「うあーん！おめでとう、幸せになりなさいよー！
新一くん！蘭のこと幸せにしなかつたら承知しないわよー。
もう一度でも蘭のこと待たせてみなさいー！？
この鈴木園子様がアンタに鉄拳制裁をくれてやるわー。
あと、誓いの言葉、イケてたわよー！」

なんて拳を振り上げてる。

「おめでとー」

「蘭ちゃん、おめでとー！幸せになつてなー？」

「おー！藤！よーやつたなあー。」

「探偵ボウズ、蘭を泣かせたらただじやおかねーぞー。」

「！藤君、蘭さん、おめでとー。」

みんなの祝福の言葉が降りそそぐ中、
私は隣に立つ大好きな人を見上げる。

目が合うと、自然に笑顔があふれる。

「なあ、蘭」

「何？新一」

そんな中、ふと新一が口を開く。

「お願いがあるんだけど・・・」

そう言つと新一は私の耳元に口をよせて“お願い”を言つ。なら、と私も新一に“お願い”を言つ。

「いいか、せーので言ひや?」

「うんー」

私たちは呼吸をあわせて「せーの」と言つ、

「ずつとずつと、大好きだよ「おまえ」「あなた」」

「おまえ」と「あなた」、なれない呼び方でお互いを呼んだ一人は、園子の持つてるブーケの花よりも赤くなつた。

う～ん、新蘭の結婚式、ラブラブで、と言いつつクエストだったので
すが、

新蘭ラブラブ要素が少なすぎるような・・・
ところでアネモネってブーケにするのありなんですかね？

適当に花言葉調べてきめたんですけど・・・
おまけに結婚式つてどういう風に進行するのかわからん。

WISHO様、期待はずれで申し訳ないです^ ^m(ーー) m^<

次は・・・の一人の新婚生活つてのもあります
しばらくは他のネタでいきます。
明日は更新できるかな～

本庁刑事の求婚物語（前書き）

こんにちは。

昨日は体力値がゼロとなつたため更新できませんでした。
今回は高佐です。

ちょっとだけ「お姫様に祝福を」とつながっています。

・・・にしても、タイトルが思いつかないへへ

本庁刑事の求婚物語

工藤君が蘭さんにプロポーズをしたらしへ……
しかもトロピカルランドのお城で。

彼もやることがデカイな、と感心しつつ高木涉は一つの決心をした。

佐藤さんに、求婚しよう。

高校生だつてやつたんだ、僕だつて頑張らなければ、と。

「や～今日は楽しかったわ。高木君、ありがとうね」

「あ、いえ……」

高木の決意の次の非番の日、いつもの様な他の刑事たちの田を盗んでのデート。

その終わりも近付いてきた時、一人は米花町を一望できる眺めのいい場所にいた。

いつも彼らが守っている米花町は夕日で鮮やかに染まっている。

「今日の高木君なんかいつもより無口じやない?
体調でも悪かつたりする?」

「いえ！大丈夫です。元気です！」

「どれ、と自分の額に手を伸ばしてきた佐藤に、高木は慌てて否定する。

あらそう？と手を下した佐藤はそれとも、と続ける。

「私とのデートが嫌だつたとか？」

そう言うと佐藤は犯人を取り調べる時の様な、刑事の目になる。慌てたのは高木だ。

「あああああつ、いや！そんなことはありません！」

「ホントに？？」

なおも疑いの眼を向ける佐藤に対し、

「本当です！桜の代紋に誓つて！佐藤さんとの、デートが嫌だなんて、例え天と地がひっくり返つてもあり得ません！…」

必死で否定する高木の姿がおかしかつたのか、佐藤はふつとふきだす。

大げさね、と笑いながら夕日に染まつた米花町に視線を戻す。その横顔を見ながら高木は改めて思う。やっぱりキレイだ、と。

そして彼女がキレイなのはその外見の美しさだけではなく、どんな時にも揺るがないその強い信念からも来ているのだ、と。

数分後、

深呼吸を一つした高木は決意を実行に移す。

「あ、ああのーさ、佐藤しゃん！」

「（しゃん？）どうしたの、高木君？」

緊張のしそぎで囁みまくった高木をいぶかしみながらも佐藤が返事をする。

「（わあ～何やつてんだ俺！落ち着け、落ち着くんだ！）
ぼ、僕は佐藤さんが好きです！だから、あの、そのつ、
僕と結婚してくださいっ！…！」

つつかえながらも何とか田畠の言葉を言つた高木を驚いたように見
つめながら、
佐藤は再びふきだした。

「高木君、舌かみすぎ・・・」

「あ、す、すみません！その・・・」

慌てて謝罪はじめた高木を制し、でも、と佐藤が続ける。

「でも、そんな高木君だから傍にいたいと思つのよね
だから・・・」

貴方のプロポーズ、受けるわ。と言つた佐藤に高木は赤くなりながら

「ほ、本当にいいんですか？」

「もうりん、女に『言はないわ』」

そう言い切つた佐藤の口は強い決意が浮かんでいた。
これを疑うなんてとんでもない、と高木は思つ。

「あ、そつだ。指輪！」

高木はバッグを『じや』と漁り田畠のモノをだすと佐藤に向かい合ひ。

「佐藤さん、左手を出してくださー」

「え？ええ。いいわよ？」

きょとんとしながらも佐藤が出した左手、その薬指に指輪をはめる。
それを見た佐藤は

「ねえ、高木君、左手の薬指ってなにか意味があるの？」

「ええええー？佐藤さんー？」

「何よー？」

「それはですね・・・」

まだ“左手の薬指”の意味がわかつていなかつた佐藤に驚きながらも説明する。

「へえ～、そんな意味があつたのね」

知らなかつたわ、とつぶやくと佐藤はその手を胸に抱く。まるで、今しがたはめられた指輪とそれをはめた後輩刑事の想いを抱くよつて

「ありがとう。高木君」

佐藤はふわり、と微笑むと高木の手を見て言つ。

「あつと幸せにするからね！」

力強く言い切られたその言葉に高木は思わずつっこむ。男のセリフ、とられた

やれやれ、と頭を搔くと、高木は言つ。

「じゃあ僕は、その100倍は幸せになります」

そして後日、

佐藤は由美にからかわれ、

高木は他の刑事達から尋問を受けたのは、言つまでもない

朝の挨拶（前書き）

WISHO2様のリクエストより
「至福の日」の続きで新蘭新婚生活です。
新一君、キャラ崩壊・・・
さて、ちゃんとラブラブになるでしょうか？

「も～、新一～！いつまで寝てんの！？」
早く起きなさい～！」

田曜日の朝、10時すぎ、元気のよい声が工藤邸に響き渡る。

米花町2丁目21番地にじつしりと構える工藤邸。
今現在そこに住んでいるのは先日幼馴染の関係からめでたく「ホール
イン、
結婚した年若い夫婦である。

工藤新一
工藤蘭（旧姓：毛利）

この二人は今日もにぎやかに朝を迎える。

新妻、蘭は夫、新一の寝室の扉をバーンと勢いよく開け、
ずかずかとベッドのところまで歩く。

「ちょっと新一～！珍しく依頼がないからつていつまで寝てんの！？」
まったく、しょーがないんだから～！」

「ん～あともうちょっとだけ・・・」

耳元で怒鳴つても起きる気配のない新一に蘭は額に青筋をたてて、

「ふ～ん、そう。起きないのね？」

新一はせっかくの休日でも私と過（）すより寝（）ることを選（）ぶんだ……
じゃあ、昨日焼いたレモンパイ、全部一人で食べ（）べちゃ（）お～」

そう言（）つと、くるりと背（）を向（）けると部屋（）を出（）て行（）こ（）とす（）る蘭（）に新（）

一は慌（）て

「わあーまでまでー蘭（）まつてー今起きるからー

だから俺（）にもレモンパイ（）

そのあまりの慌（）てつぱりに一瞬（）、蘭（）は吹き出（）しそう（）になるが、
おもしろくなつてもう少し夫（）をからか（）こととする。

「・・・・へー、新一は私が何回起（）じた（）とも起きなかつたのに
レモンパイで起きるんだ・・・。

ふ～ん、そう。新一は私よりもレモンパイの方が好きなんだ～？」

そういじける（もちろんぱり）蘭（）に新一はあわてる。

「おい、蘭（）！なんで考えがそーなるんだー！？

そんなことない！絶対ない！」

「じゃあ、レモンパイ、私が全部食べててもいいのね？」

「・・・・・・・・

「ほひ、即答（）できないじゃない！

新一の私への気持ち（）てしませんそんなものなのね・・・・

「セーじゅなこつつのー。」

「じゃあ、ここの？』

「・・・～、あ。いいよ。」

「田が泳いでるよ。探偵さん？」

「泳いでねえ。」

完全に蘭に遊ばれているのだが、新一はその事実に気がつかないようだ、
彼にしては珍しく焦っている。

そしてとつとつ堪えられなくなつた新一は蘭を強引に抱きあわせる。

「ちゅう、何！？新一！？」

「お前とレモンパイ、じつちがいかな？そんなんの決まつてんだ
ろ？」

俺が一番好きなのはお前なんだから・・・
信じられないなら、証明してやるつか？

「えつと、あ・・・」

「ひつよひ、からかつてたつもつなのここの間にか
新一が本気になつてゐる・・・

と、蘭がざきなをしつこると、

「へへ、おはせははー。」

新一が笑いだした。

そこで蘭はよりやく気付く。

「からかつたわねー?」

からかう側とからかわれる側、いつの間にか立場が逆転していたのだ。

んもつ、と頬を膨らます蘭に対し新一は囁く

「いめんじめん、蘭があんまり可愛いからつー···」

その言葉に蘭はゆでダムになる。

「わへ、新一つてばー

目が覚めてるないうちから起きたやつだよー···

「はよこしてよー」

「ああ。でもその前に···」

「ハーハーと新一は囁く。

「蘭、『おはよー』のキスして?」

なつ、と再び真っ赤になつた蘭は、

「わへ『おやゆい』でしょ？」

と言つと、夫の感び自分のそれを重ねた。

「「おせよい」」

朝の挨拶（後書き）

はい、新一、激しくキャラ崩壊した気がします。
新一ファンの皆様、ごめんなさい。ま（—）まく

次は真×園子か「萌芽」の続きを書きます。（たぶん）

今はまだ遠い、背中（前書き）

シンゴ様のリクエストよつ

「萌芽」の続きです。

江戸川氏負傷。

はい。一回書いたのに全部消えんとこいつ悪夢がおいつきました。

ああ、死にそう・・・

今はまだ遠い、背中

「コナン君、コナン君！」

「っ・・・・・！」

コナンは左腕の付け根をおさえ、歯を食いしばり痛みをこらえる。そこにはひと振りのナイフが深々と刺さっていた。

それは、いつもの様に探偵団でかけ、これまたいつもの様に事件に遭遇した時のこと。

犯人を見抜いたコナンは子供たちを遠ざけ、一人で犯人の元へ向かおうとしたが、それに気付いた歩美がコナンについてきた。

それから証拠を消される前に犯人の元へ行き、コナンが推理を披露。

犯人が犯行を認めたとこへタイミングを見計らって歩美が呼んだ警察が登場。あとは逮捕、連行するだけだった。ここまで順調だったのだ。

しかし土壇場になつて犯人がいきなり隠し持つていたナイフを出し、

近くにいた歩美に襲いかかろうとしたのだ。

「歩美ー。」

「きやー。」

とつさにコナンが歩美を突き飛ばし、歩美は無傷ですんだのだが、

「ぐうひ・・・・・！」

「コナン君ー。」

コナンは左腕の痛みを抑え、何とか犯人に麻酔銃を撃ち込む。バタン、と倒れた犯人を警察が連行し、救急車を呼んでいる間歩美はコナンの元へと駆け寄る。

「歩美ちゃん、大丈夫だから・・・心配しないで？」

「大丈夫なわけないよ！
だつてこんなつ、ナイフが・・・・！」

ああ、そうだ。ナイフを抜かなきや。と震える手でナイフを抜こうとすると、コナンの手がそれを制する。

「だ、いじょうぶ。・・・抜かないで？」

「でもつ、こんなに刺さつてるのにー。」

「い、今、抜い・・・ちまつた、ら
血、がと、止まら・・ない、から・・・・・」

ときれときれの言葉。その間にもナイフの下からじめるとなく
血が流れている。

どんどんと蒼白になつていくコナンの顔をみながら
涙目になつた歩美は思う。

びつじて、自分は何も知らないんだろう?
どうして、自分は何もできないんだろう?
早く来て、救急車さん。

数分後、ようやく救急車が到着した時には
もうすでにコナンの意識はほとんどなかつた。
そしてそのままコナンの体は米花総合病院へと運ばれた。

コナンの傷は思ったよりも酷く、
左腕の付け根から斜めに刺さつたナイフの切つ先は
心臓のちかくまで到達していた。

病院の手術室前の廊下で歩美が佐藤刑事に付き添われながら震えていると

元太達がやつてきた。

探偵団バッジで連絡をしたのだ。

普段なら抜けかけがどーのこーのと文句を言つ元太・光彦もコナンが心配なのか何も言わない。

灰原は手術室の扉をチラリ、と心配そうに見ると歩美に声をかける。

「吉田さん、大丈夫？」

「へ、哀ちゃんあああ～ん！」

とつとう我慢できなくなつた歩美は灰原に抱きつくる。

「つ、どうしよう？ コナン君が、コナン君が～！
歩美のせいだ…どうしよう！？ もし…・・・
ヒック、こ、コナン君が死んじゃつたら…・・・！」

灰原は泣きじやぐる少女を抱きしめながら言つ。

「大丈夫よ、江戸川君はこんなに泣いている貴女を残して死なない
わ・・・

それより、彼が助かることを祈りましょ？」

「ヒック、う、うん」

2時間後

手術中のランプが消え、中からストレッチャーに乗せられたコナンが運ばれてくる。

コナンの顔は蒼白く、酸素マスクを当たらわれている。

「あ、あのー、コナン君はっ、コナン君はどうなんですか？大丈夫なのー？」

手術室からでてきた医者に必死にすがりつき聞く歩美に対し、医者は

「もう大丈夫です。命に別状はありません。心配しなくても大丈夫だよ」

そのまま呆けたように座り込む歩美に灰原が手を差し伸べ、歩美は

立ち上がる。

「じゃあ、彼の病室にこきましょっか？」

「うんー。」

小さなうめき声と共にコナンが田代めた時、
病室にいるのは歩美だけだった。

灰原は眠気覚ましにコーヒーを飲みに、
元太は「腹へった」と光彦をつれどこかへ行き、
小五郎と蘭はまだ来ていなかった。

「う……」

「コナン君！ 気がついたの！？
どうか痛いところない？ お医者さん呼んでくるねー。」

やつ言いかけだそとした歩美の手をコナンの右手が引き留める。

「コナン君？ ビビったの？」

「歩美、泣いてただろ？」めんな
『守る』って言つたのに、泣かせちまつて……」

その言葉で歩美は気づく。

コナンの言つた「守る」には身体だけじゃない、心もふくまれてい
たのだと。

「ちがうよ、コナン君はちゃんと歩美のことが
守ってくれたんだよ……」

歩美なんて『守る』つていつたくせに何にも出来なくて……」

それに、と歩美は続ける。

「歩美、なんにもわかつてなかつた。

『危険なこと怖がつてたら探偵なんてやつてられない』とかいゝな

がら

本当に怖いのは何かわかつてなかつた。
ホントに、本当に怖いのは・・・」

自分が傷つくことじやない

他人が、大切な人が傷つくこと

そんなこともわかつてなかつたなんて、探偵失格だ

うつむいて涙をこらえる歩美の頭にポン、と優しく手が置かれる。

歩美が顔をあげると、コナンが優しい手をしてこちらを見ていた。

「それでいいんだよ」

「えつ・・・・・?」

「知らないことがあるのは悪いことじやない。

知らないことはこれから知つていけばいいんだ・・・

大丈夫、歩美ならできるよ」

「ホントに? できるかな?」

「ああ。歩美が『知りたい、わかりたい』って思うなら。

大丈夫。歩美はまだ小学1年生なんだから、時間はいっぱいあるよ」

「なんか、その言い方、コナン君小学生じやないみたい」

「え、いや、そんなことないよー」

ふと歩美は「やめでの辛さがなくなっている事に気がついた。

やつぱり、コナン君はすこい。と歩美は改めて想つ。

事件だけじゃなく、歩美の歯みまで解決にかけようんだもん。

そうだ。

知らないことはこれから知つていけばいい。

知らないことがあるのは悪いことじゃないんだ。

そうやって、色々なことを学べばいい。

それで、いっぱい知つたら、コナン君みたいになれるかな？
ううん。なれなくてもいい。

だって歩美は歩美だから。

でも、そしたらいつかコナン君の隣に立つんだ。
今はまだその背中を見ているだけだけど、
いつか、きっと「私もコナン君と同じ探偵です」って
胸を張つて言えるようになるんだ！

「よーしー。」

その後、歩美は閉館間際の図書館にかけこみ、
本を数冊借りた。

まずは、色々なことを知るんだ。

その夜

歩美が借りた本をみた歩美の両親はひっくり返つたとか返らなかつたとか

- 「よくわかる応急処置」
- 「毒物・劇物の効果と管理法」
- 「世界の凶器」
- 「人体の仕組み」
- 「銃器と刃物、その殺傷能力」

今はまだ遠い、背中（後書き）

あ～焦りました。マジで。

だって全部消えたんだもん。

あ、最後のヤツは歩美が借りた本のタイトルです。

テキトーにつけました。

では次回もよろしくです！

幸せの音（前書き）

こんにちは

WISH02様のリクエストより、

新蘭で蘭妊娠話。

妊婦蘭ちゃんと過保護な夫新一君でお送りします。
また新一のキャラ壊れるかも・・・

基本蘭目線。後半からはちょっと変わります。

朝、なんだかイイ匂いがある、と思つたら新一が私の部屋のドアを開けた。

「おはよう、蘭! 今田はよく寝むれたか?」

「新一、おはよう。この匂いは何? 朝? はん?」

「ホットケーキなんだけど、食えるか?」

「うん!」

私の妊娠がわかつてから、新一はすく変わった。

まず、朝は私よりも早く起きるようになつた。

そして、コレが一番驚きなんだけど・・・料理をするようになつた。以前は包丁を持たせたら切つたものが全部つながつていた新一が! そりやあ、まあ最初は酷かった。否、酷いなんてものじやなかつた。

つわり中の私の為に作ってくれたお粥は、

黒こげでとても食べられるものじやなかつたし、

パスタを茹でれば茹で過ぎでドロドロになるか、逆に芯が残りすぎ

る。

果物を切らうとすれば何をざりやつたのか

切らうとした果物が吹っ飛んで壁にぶつかり半分つぶれる・・・

困ったような顔で、潰れかけたメロンを持ってきた時のことは今まで

もよく覚えてる。

でも、新一は元々器用だからか、
1か月もするとまともなモノが作れるようになった。

他にも掃除をしたり、色々な家事をこなすようになった。

あと、もう一つ。

何と言つか、まあ、過保護なのだ。
それも、超がつくほどのはじめ

私が少し掃除をしようとする

「俺がやるから蘭はじつとしてる

とか、

ちよつとでも重い物を持とうとする

「蘭はそんな重い物、持つちやダメだー何かあつたらびつするー。」

とか、

果ては階段を上つてつるだけなのに

「転んだらたいへんだ

と必ず付き添つ。

嬉しいよひな、でもやつぱり過保護なよひな・・・
子供が生まれたらもつと大変だらうな、と思ひ。
あつひ、今以上の過保護つぶりを發揮するんだひつ・・・

今日の朝ひはんはホットケーキに蒸し鳥と生野菜のサラダ、
それにデザートのグレープフルーツだった。

料理が出来るよひになつたひは

得意げに卵焼き単品をドーンと食卓に出していた新一だが
それじや、栄養が偏ると氣づいたひへ、
今では色々とメニューを考え、工夫してこる。

「じゃあ、いつてくるなー

5時くらいこまでこは帰るかー。」

「うそ、やをつけてねー。」

「お前もなー何かあつたらすぐこ電話すんだぞーー?」

「はーいー。」

いつてりつしゃい、と軽くキスして送り出す。

今日は新一は、依頼人の家へ行つて調査をするつもりだ。

「さへと、と」

相変わらず新一が家事を全部やつてしまつてやることないし、園子とは昨日の午後中ずっとおしゃべりしたし、

今日は本でも読んでもうかな

もつ何回も読んだお気に入りの本を手にとり、家で一番すわり心地のいい椅子に座るつとした時、お腹に違和感を感じた。

「え・・・？」

工藤邸の主、新一が自宅に帰つたのは午後5時半だった。

「ただいま、蘭！」

しかし彼が呼びかけても家の中はシンと静まつ返つてゐる。

「蘭・・・？」

不審に思つた新一が家の中を探すと、蘭はよここる、口遁つてゐる。

部屋にいた。

夕闇のせまるる部屋の中、電気もつけずにはいる蘭の背中はかすかに震えている。

「蘭！」

驚いた新一がかけより、その顔をのぞき込むと、涙でぬれていった。

「おい、蘭ー…びついた！？なにがあつた！？まさか・・・・・」

お腹の赤ん坊に、なにがあつたのか、と責ざめる新一に震える声で蘭は告げる。

「あのね、お腹の赤ちゃんがね・・・」

「うん・・・・」

「動いたの！動いたんだよー！」

「・・・・・へ？」

赤ん坊に何か良くないこともあつたのか？と身構えていた新一は思わず間抜けな声を出す。

「う、動いた・・・・・？」

「うふ。やうなのー！今日、初めて動いたんだよー。」

「ほ、ホントか・・・・！？」

「ホントだよ・・・」

さわってみて?と蘭は自分のお腹に新一の手を当てる。
最初はなにも感じなかつたが、しばらく手を当てたままにしていると、

「あつ」

「ね?動いたでしょ?」

「ああ!動いた!動いたぞ!」

新一は驚き、また大いに喜んでいた。
子供が、動いてる

そんな新一の様子を見て、蘭も嬉しそうに笑う。
心の中で、お腹に宿る命に語りかける。

ねえ、聞こえますか?

私と新一のかわいい赤ちゃん。

私たちはあなたが大好きです。

私たちのところへ来てくれてありがとう。

あなたに会えるのをずっと楽しみにしているからね

新一と蘭が、この新しい命に会えるのかも、もつと先のこと

幸せの音（後書き）

はい、なんとか書きました。
なかなか話の展開が思いつかなくて・・・
新蘭妊娠話はこんな感じで！

で、こんど赤ちゃんの話も書きたいのですが、
新蘭の赤ちゃんの名前、募集します！
女の子にじょうかなって思つてますので、
どうぞよろしくお願ひします^__^ (ーー) ^__^
漢字には読み仮名をふつていただけるとありがとうございます。
よろしければ由来も・・・
由来がなかつた場合はこちらでなんか考えます。

冬物語（前書き）

今回は真×園で！

新蘭の続きをまた後ぼし・・・

それは12月の半ばのこと

園子は今しがた見た光景が信じられなかつた。
もしかしたら、自分の目がおかしくなつたのだはないか、と思つほどに・・・

その日、園子は米花町のショッピングモールに一人で買い物に来ていた。

セール中だつたこともあり、いつもより安く、いいモノが買った園子は満足していた。

満足したし、さあ帰ろう。と帰ろうとした瞬間、ソレを見た。

米花町ショッピングモール1階にあるジュエリーショップ「Bei ka」で、

園子が今現在交際中の恋人、京極真が他の少女と指輪をみているのを・・・

その少女はかわいらしかつた。

清楚な雰囲気を漂わせ、ゆるやかな天然パーマの黒髪は肩にかかる程度。

大きな瞳はキラキラと輝き、楽しそうに京極を見つめている。

そして対する京極はといふと、

どこか照れたような笑顔で色々な指輪を手にとり、少女に見せてい

る。

まるで、どれが一番少女に似合つか確かめているかのよつて

それ以上その光景を見ていられなくなつた園子はその場からかけだした。

かけだして、その店が見えなくなつた所でよつやく立ち止まると今見た光景を思い返す。

今のは、どう見ても

浮氣

そんな言葉が頭の中に浮かんでくる。

真さんは、そんなこと絶対にしないつて思つたのに・・・。
しょせん、彼はそういう男だつたのだろうか?

までよ・・・

そもそも自分は京極真の“彼女”になれていたのだろうか?
ふいに親友の言葉がよみがえる

『京極さんファンの子多いんだから・・・』

京極にとつては、自分は“ファンの子”だつたのだろうか?
いざれにしても、

「失恋、か・・・」

本当にやんなりちゃうな、とため息をつくと、園子は帰路につく。
さつきまで心を浮き立たせていた買い物袋が、
ものすりへ重く感じられた・・・。

それから約1週間後、

今日は帝丹高校の2学期の終業式だ。
皆が各自の成績表に一喜一憂している中、園子は深いため息をついた。

1週間前の光景が忘れようとも忘れられないのだ。
「一なつたらやめひとせーつ。

カラオケにでもこって憂や晴らしじゃるーかして忘れるんだ！

そう決めると園子は親友に声をかける。

「うあーん、今日は後カラオケいかない！？
あと、ケーキバイキングも！」

カラオケも、ケーキバイキングもどちらも蘭が好きなものだ。
断られるワケがない。と思つたら、

「「「め～ん、園子！今日は新一と映画なのー！」

そう謝る親友の顔はデーターが楽しみなのか嬉しそうで
とても邪魔できやしない。

「ああ、やうやー」とねー

うん。ならしようがないわね。じゃあ、また明日ー！」

明日から学校休みだよー」とこの声を耳にしながら園子は教室を後にす。

なんか、最近いー」となごし、今日はまつすぐ帰るか・・・・

その夜、

園子が一人さみしく部屋でテレビを見ていると携帯が鳴った。

（――）

この着メロは、

「真さん・・・・」

一瞬ためらった後、園子は思い切って通話ボタンを押す。

「・・・もしもし?」

「あ、そ・園子さんー」こんばんは。
えつと、京極です・・・」

電話の向ひから聞こえてきた声に園子は一瞬、おかしくなる。

登録してゐるんだから、名乗らなくても分かるのに・・・
いや、たとえ登録していなくても、声をきけばわかる。
彼の、声なら

「どうしたの？」

「え、あの、・・・お話したいことがあるのですが、
今から米花公園にきていただけませんか・・・？」

緊張したような声でピンときた。

別れ話だ。

そうか、私、ふられるんだ。

「わかった。すぐにに行くから、待つてて・・・」

電話をきくと園子は大急ぎで支度をする。
どうせふられるなら、ふったことを後悔するようないい女スタイル
でいってやる！

そう決意すると、園子はいつもよりも大人し目の、
大人っぽい服に着替える。

（米花公園）

園子が行くと、すでに京極は到着して、園子を待っていた。

「園子さん！急に呼び出してすみません。

あ、今日はいつもより大人っぽい格好をされてるんですね・・・
よくお似合いです」

「で、何？話したい」とつて？」

そんな言葉なんて聞きたくない。とばかりに園子は言つ。
きつと、やましいからこんなこと言つてるんだわ・・・

「あ、実はですね、園子さんに会わせたい人が・・・」

「会わせたい人お～？」

「あ、いえ。会わせたいというより、
園子さんに会いたがってる人でして・・・」

まさか、この間の彼女か？

そんなに人を馬鹿にしたいのか、と園子が憤つてると
公園の入り口の方から1人の少女が走つてくるのが見えた。

「ま～こ～と～く～ん！」

手を振りながら「コーコ」としゃつてくるのは、やはりこの間の少女だ。

「蓮！」

隣をみると、京極が少女に手を振つている。

何よ何よー田の前でいちゃついてみせて別れよつてのー？

我慢の限界に達した園子が怒鳴りついた時、少女が到達した。

少女は園子を見ると皿を輝かせて

「あなたが園子さんねー?」

「え、ええ」

少女、蓮と面づらしが、のキャラキラした皿にわれていうなづく。

「お兄ちゃんの彼女のー。」

「ええ、まあ。・・・つてお兄ちゃんー。」

誰がー?誰のー?と驚いてる園子に蓮はクスクス笑いながら叫びかる。

「はじめまして、園子さん。」

私は京極蓮。ここにいる京極真の妹です

ついでに皿のなら中3でーすーとか明るく皿の蓮を見て、園子は京極を見る。

「あ、あの。真さん・・・?」

「すみません、園子さん。蓮のヤシビヒしても園子さん会いたいつて」

「だつてすつこい興味あつたんだもん!」

真くんみたいなのが彼氏にするなんて奇麗な人だと思つて

「真くん・・・?」

「おい、蓮一家の外でその呼び方はやめなさいだろー。」

園子が京極を見るとかなり焦つてるのが見て取れた。

ちよつとおもしろいかも・・・

浮氣疑惑も自分が疑心暗鬼になつてただけだとわかった園子は蓮と一緒になつて京極をからかう。

「いいじゃん、真くん！」

「ほひ、園子さんだつてこいつるよ、真くん」

「な、だから・・・。」

ひとしきり騒いだ後、蓮が兄を見る。

「で?例のモノは渡したの?」

「例のモノ?」

首をかしげる園子に、京極は小さな包みを差し出す。

「園子さん、メリークリスマス!・・・です」

「あつー。」

忘れてた。そうだ、今日はクリスマスだから蘭は「テート」だつたんだ。

「あの、開けてみてください」

「へ、うん」

小さな包み紙をばがすと出てきたのは

「わあ・・・・・」

雪の結晶の指輪だった。

「」、「」、「」

「私が選んだんですよ」

驚いてる園子に蓮が告げる。

「お兄ちゃんたら『園子さんとクリスマスプレゼントの手筋』
って、
お陰で先週一日中連れまわされちゃって・・・」

では、先週のアレは、浮気なんかではなかつたのだ。

「園子さん、指輪、はめてもりますか?」

「ねえ、はめてもりえる?」

やつぱり京極たつぱる、園子は両手を差し出す。

真さんが、どの指を想像して買つたのか、知りたい。
そんな想いをこめて見つめると、京極は一瞬ためらつた後、
園子の右の薬指に指輪をはめる。
ぴつたりだ。だけど

「あれ～？お兄ちゃん、左手じゃなくていいの～？」

丁度園子が思つたことを、蓮が口にする。

「な、蓮！」

頬を赤くした京極は妹の名前を叫ぶと、園子の方を見て言つ。

「すみません、園子さん。
自分にはまだ、園子さんのその指に指輪をはめるだけの力がありません。
だけど、いつか必ずその指に指輪をはめてみせます！
それまで、待つていただけますか・・・？」
ちょっとまで、これつてもしかしながらも

プロポーズ！？

内心の動搖を押し隠した園子は、いつもの様に強気で言つ。

「早くしてくれないと待てなくなるからね！」

でも、

「待てなくなつたら、私が真さんの指に指輪をはめるわよーー?」

だから、覚悟しといてね?真さん!…と、園子はこの日一番の笑顔で笑つた。

冬物語（後書き）

ああ、予想外に長くなりました。

それにしても蓮ちゃん、最後空氣化・・・

京極の妹の名前は昔兄が空手を習つてた「鍊心館」つてどこから

鍊 蓮です。

兄に君づけするのは作者がそつだからです・・・

ではまた次回！

新一君のお料理修業（前書き）

今回は・・・うん。ギャグです。

またもやキャラ崩壊な工藤氏の話・・・

「幸せの音」で蘭が妊娠中、お料理を覚えた新一君。

その過程を書きたいと思います。

彼、工藤新一はガスコンロの前で呆然としていた。
その前にあるのはじこにでもあるような片手鍋。
だが、その鍋の中身は明らかに“じこにでもある”モノではなかつた。

鍋の中身は到底食べ物とは思えない、真っ黒な物体。
さらに鍋からは黒い煙がもくもくと噴き出て、
よく火災警報器がならないな。というほどである。

「~~~~~はあ」

新一は、田の前の惨状にただため息をついた。

そもそもの始まりは、彼の妻、工藤蘭の妊娠が分かつたことだ。
そして蘭はつわりに悩まされることとなつた。
それじゃあ、蘭に無理をさせられない、と思つた新一は
それまで、妻に任せっきりだった料理をしよう。と決意したのである。

じゃあまず、簡単な料理、お粥とかならできるだろ・・・
そんな風に軽く考えた新一は心配する妻を寝かせて、

自分は台所にたつたのだが・・・・・

その結果が現在鍋に入ってる黒い塊である。

誰にでもわかる。これは人間、いや、生き物の食べる物ではない、と。

結局、その日の夕食は、蘭がつくった。

そして翌日。

新一は再び台所に立つ。

大鍋に大量の湯を沸かし、スペゲッティを投入。そしてその結果はどうぞのスペゲッティだった。

「俺はちやんとこの袋のとおりに茹でたぞ！？」

などと主張しているが、実際のところはどうだか・・・・

さらにまた翌日。

今日は蘭が食欲がない、と言つてるので果物を買つてきた。

果物なんて切るだけだから、カンタンだら・・・

と余裕の表情でメロンをまな板にのせた新一は早速メロンを切つとする。

が・・・・・

「あれ？」

意外と切りづらい。
なかなか切れないもので、さて、どうしたものか。と思案顔の新一
は思いつく。

「そつか、スイカ割りと同じこすればいいんだ！」

スイカつてウォーターメロンつていうもんな！と
新一は包丁を高く振り上げメロンに向かって振り下ろす・・・・！

ドッシャーン！ガラガラ・・・・

そんな音に驚いた蘭が寝室から飛び出してみたものは、
ふつとんで壁にぶつかり潰れたメロンと、ふつとんだメロンが倒し
た調味料入れ。

そして、包丁を片手に呆然としている夫の姿だった。

それでも、新一はめげずに（懲りずことも言つ）

毎日料理に挑戦した。

後に彼は当時を振り返り、

「事件を解決するよりも、料理をする方が何倍も困難だった」

と述べる。

1月後、

新一はフライパンの前で感動にうち震えていた・・・
ようやく、焦がさずに、きれいな卵焼きを作ることに成功したのだ。
お米もいい感じに炊けてるし、今日は自分一人で全部ご飯つくった
ぞ〜

と、上機嫌な新一は食卓の準備を進め、妻を呼ぶ。

「蘭！今日は俺が全部一人でつくったぞ！」

どうだ、とドヤ顔でテーブルをさす夫に、蘭は一言。

「新一、ご飯と卵焼きだけで食事しろと・・・？」

新一君のお料理修行はまだまだ続く・・・

新一君のお料理修業（後書き）

はい。明らかにふざけてますね・・・
「メンなさい

つて、とかメロンの件、新一怖い！

ではまた次回もよろしくです！

新蘭出産話。
新蘭がおひじり始めた口（前書き）

わいわいつなじゆくわいわい

「…………」

工藤新一は先ほどから病院の廊下を行ったり来たりしていた。見かねた彼の母親、工藤有希子が口を開く。

「ねえ、ちよつと新ちゃん。落ち着いたら、まるで檻の中のクマよそれじや……」

「だつて母さん、蘭が

そう、彼が先ほどからひひひひひしてこの壁の向いひでひ、彼の妻、蘭がいて、そして

・
「大丈夫よ。蘭ちゃんは強い子だから、きっと丈夫な子を生むわ・・

蘭ちゃん自身にも問題ないわよー」

「でもなあー！」

気楽に構える母親に対し、これから父親となる息子は心配顔だ。

「まつたく、新ちゃんつたら、もうすぐお父さんになるとは思えな
いわねえ。

そんなんでこれからやつてけるのかしら?」

「なん」と呟つたつて、心配なもんは心配なんだよー。

「母さんのお気楽すぎるんだよ・・・」

「あら、あなたを生んだ母親の言葉が信じられないってこのの？私が気楽に見えるのは、蘭ちゃんを信じてるからよー。なのに夫である新ちゃんは信じてないのかしら？」

そうこわれると、新一はぐうの音もでない。

「そりゃ、信じるけどよ・・・」

そう呟くと、新一は扉を見つめる。
その扉のむこうは、彼の妻がいるはずだ

「はー、大きく息を吸つて
お母さん、頑張って下さー！」

扉の向こうでは、蘭がたたかっていた。

子供を生むのは大変だと聞いていたが、まさかこんなにだなんて

それでも蘭は必死でたたかつた。

なぜなら、彼女はまだ見ぬわが子をすでに愛していたから。

それから、じれぐらいが経つたか・・・
何時間も経つたようにも思えたし、数分と言わればそんな気がする。

そんな時、赤子の泣き声が部屋に響いた。

オギヤア オギヤア・・・

「はい、工藤さん、元気な女の子ですよ！」

そう言って、手渡された小さな命を、蘭は慎重に受け取る。

まだ目もつぶつって、泣いてるだけだけど、

「かわいい・・・」

この子は私たちの幸せだ。と蘭はわが子をそっと胸に抱く。

新一はガチガチに緊張していた。

彼の手には、生まれたばかりのわが子。
いつものどうどうと推理を披露している時の姿からは、
想像もできないほどの緊張っぷりだ。

そんな新一の姿を見て蘭はショックがないわね、と微笑み
新一の手から子どもを受け取る。

「あらあら、新ちゃんつたらショックがないわね
で、この子の名前はなんていうの？」

クスクス笑いながら訊く有希子に蘭が答える。

「りん、です。鈴^{すず}って書いてりん」

「あら～かわいい名前ね！…どうが決めたの？蘭ちゃん？」

「はい。新一つたらなかなか決められなくて、私が

「意味をきいてもいいかしら？」

「えっとですね、意味は・・・なんていうんでショック。
鈴^{すず}つて“鈴を転がすよつ”とか“鈴を張つたよつ”とかって
キレイなものを形容する時に使うでしょ？
だからこの子にもそんな風になつて欲しいなつて、この漢字にした
んです。

そしたら新一が・・・」

「鈴^{すず}つて名前にすると園子のヤツ想像しちまつから
りん、にしたんだ」

「つむわけです」

最後の新一の言葉を蘭が締めくくると有希子が笑う。

「素敵な名前ね。安心して！」

私の孫なんだから絶対キレイになるわよー。」

「母さんの孫だからじゃなく、蘭の子どもだからキレイになるんだー。」

「ちょっと新ー！」

「まあー、新ちゃんつたらー。母親の前でどうどうとへロケちゃつてえー！」

午後の優しい陽の差し込む病室に、幸せな笑い声がこだまする。

今日、

若い工藤夫妻に、新たな家族ができた日

書いてて戻づきました。

優作さん、不在・・・

まあ彼は亡しいつてことでー

子供の頃はMISHIMA様が考えて下さりました。
ありがとうございますー。

ワッペン（前書き）

「おぢや わん」の後日談。
「ナンが本当は仮面ライバーが好きではない、と気づいた蘭は・・・

コナンがはじめて假面ライバーが好きではないらしい……

蘭がそう気がついたのは、コナンに新しいおちゃわんを買ってやつてから1週間ほど後だった。

ある日の夕食前、コナンが自分の新しいおちゃわんを見て、ため息をついてるのを見た蘭は、ようやく気が付いた。

・・・もしかしたら、コナン君、假面ライバーが嫌なのかな？

そうかもしれない。

そういえば、あの少年は少年探偵団が
ヤイバーショーを嬉々として見ている時も
興味がなさそうにしていたし、
テレビで仮面ライバーをみていても、面白くなれそうだった・・・

今まで、ヤイバーグッズを買つてあげた時、嬉しそうにしていたのは演技だったのかもしれない。

あの聰く幼い少年は、『臣候』という立場を理解していく、それでわがままを言つてはいけない、と我慢しているのだ・・・
本当は好きでもないものを好きと言つて・・・

そして、どうしようつか。と蘭は思案する。

今まで買った物はしようがないにせよ、これからもあの子供に演技をさせ続けるわけにはいかない。

「ナン君の好きな物と言えば

考へている蘭の視界に、冊の本が入った。

シャーロック・ホームズ全集？

そうだ、あの子は自分の幼馴染のホームズ馬鹿に負けないホームズファンだった。と蘭は思い出す。

でも、ホームズグッズなんてそういうし・・・

もうすぐ衣がえで、秋用のパジャマを買ひやがりなよ、とは思つてゐるが

今度こそ、ちゃんと喜んでもらいたい。

どうしよう、と歎んだ蘭は家を出て、その足で手芸屋にむかつ。

それからインターネットで画像を検索し、何かを懸命に作り出す。

「できた！」

“何か”がやつとできた時にすでにすっかり日が暮れていたので蘭は慌てて夕飯の支度にとりかかる。

翌日、米花、パートに出かけた蘭は子供用の、無地のシンプルなパジャマを買い、

前日につくったモノをそれに縫い付ける。

「はい。コナン君。新しいパジャマだよー! あけてみて?」

その日の夜、蘭は居候の少年にパジャマを手渡す。

「あらがとう、蘭ねえちゃん」

受け取ったコナンは（どうせまた仮面ライバーだろ?）とか思いつつ包みを開ける。

と、でてきたのは

「・・・・・」

胸元に誰が見ても手作りと分かる、ホームズのワッペンをつけた無地のシンプルなパジャマ。

「どう? コナン君。気に入らなかつた?」

蘭が心配そうにたずねる。

「コレ、蘭ねえちゃんが・・・?」

「うん。コナン君、仮面ヤイバーあんまり好きじゃないみたいだから・・・」

それにホラ、コナン君ホームズ好きでしょ？あんまり上手くできなかつたんだけどどうかな・・・？」

無言のコナンに蘭がもしかしてきこいらなかつたのでは、と不安になつた時、コナンが顔をあげる。

「あつがとう、蘭ねえちゃん！すつじくへうれしー！」

その顔に浮かぶのは、演技ではない、満面の笑み。

「ホント？ 気に入つてくれた？」

「うん。大事に着るね！」

笑顔で言つた少年は「それに」と続ける。

「蘭ねえちゃんが、ボクのためにわざわざ作つてくれたことが一番うれしいんだー！」

ワッペン（後書き）

なんか、今日暑くてボーッとしてるので、変なトコがあるかもです。

けんか中のメッセージ（前書き）

夫婦平和です。

服部は大阪府警に勤めてます。

関西弁わからないので、変なところがあるかと・・・

けんか中のメッセージ

「アホオ・・・」

朝、台所で和葉がつぶやく。

「平次のあほ」

彼女は昨晩、夫である服部平次と喧嘩をしたのだ・・・

昨日、非番だった平次がどこかに連れてつてくれる。
という約束をしていたのだが、でかける直前、彼に電話がかかってきて、

「スマン、和葉。事件みたいや！」

と言い残すと和葉を置いて、家を飛び出でてしまった。

当然和葉はおもしろくなく、夜、帰ってきた夫に嫌味をいい、喧嘩になってしまったのだ。

「なんや、事件ばつかで・・・

それならアタシじゃなく事件と結婚すればとかつたんや・・・」

平次のお弁当を作りながら、昨日の出来事を思い出し、ムカムカしてきた和葉はある考えに行きついた。

弁当で復讐したるー

そう決意すると和葉は海苔とキッチンバサミを手に取ると、白ごはんの上に海苔で言葉を書く。

すげー
きらい
やーー！

ふん、平次のヤツ、弁当食べる時に皆に見られて恥かいてしまえー！

和葉は弁当を包むと平次の鞄にいれる。

そして、怒ってる態度をくずさず夫を仕事へ送り出す。

昼の1時頃

和葉の元に夫からメールがきた。

なんや、弁当の文句か？

職場の同僚に見られて恥でもかいたか？

と和葉がにんまりとメールを開くと・・・

あほ！いつまでも

いじけんな！

しゃーないやろ

とんでもない事件が起き
るのがわるいんやから！

なあ、平次。コレも縦に読んでええんやろか・・・？

すっかり機嫌のよくなつた和葉は、夫の好物をつくるため、近くのスーパーに買い物のためにでかけた・・・・・

けんか中のメッセージ（後書き）

ちゅうと強引すぎますね・・・。^_^;

彼の撮り写真（前書き）

「幸せがおひこちてきた日」 続編
WISHO2様よりのリクエスト
生後1か月というリクエストでしたが、すみません
10か月くらいことさせていただきます
ご了承下さい m(—)m

彼の撮る写真

新一と蘭の間に長女、鈴がうまれてから10か月、
今日も工藤家には幼子のあどけない笑い声が響く

「つ～ん～、鈴ちゃん。
こつちむこ～～！」

そんな甘い声で呼びかけるのは、若き父親、新一。

彼は立派な一眼レフのカメラをわが子に向けて「ゴーゴー」と叫ぶ。
新一はわざわざこのために、このカメラを買つたのだ。

一方、カメラを向けられている鈴と言えば、
母親である蘭に抱つこされで「機嫌で、満面の笑みを浮かべて、父
親に手を振つている。

「新一、写真とれた？」

娘を腕に抱いたまま、蘭がたずねると

「あー撮れた撮れた。あ～もづ、なんでこんなに可愛いんだろ？」

答える新一は「テレホンしてこる。

新一が出かけた後、ベビーべッドに鈴を寝かせた蘭はふとため息をつく。

「またぐもう、新一っぽい・・・」

新一は、鈴が生まれてからずっとこの調子なのだ。

蘭とて娘は可愛いし、本当に愛しく、大事に思つてゐる。しかし、ずっとこのままでは流石に面白くない。

「ホント」、新一つたらこの頃鈴ばつかで、
私の事はどうなのよ・・・・・

そりやあ、大切にされてるのはわかるし、

自分のことも想つてくれてるのは、わかる。だけど・・・

「もう、一番は私じゃないのかな・・・・」

ああ、子供に嫉妬するだなんて、私は重症かもしない・・・

蘭がそう落ち込んでいると、新一が帰ってきた。

鈴の写真を写真屋で現像してきたのだ。

「蘭、鈴。ただいま~」

「あ、おかえりなさい。今、鈴が寝たところ。
どうぞ、写真、うまく撮れてた？」

そうさきながら蘭が新一の持つてゐる袋に手を伸ばすと
何故かさつと背中に隠された。

「なによ、鈴の写真、私には見せたくないってワケ？」

「いや別にさうじゃなくて・・・」

「ならさうして隠すのよ？」

やつぱり、新一は鈴が一番大事なんだ、もう私はどうでもいいんだ
！？」

そう言い捨て、蘭がかけだすと新一が追つてきて腕をつかむ。

「おー、まてよ蘭！」

「いやーはなして！」

「騒くなつて、鈴が起きるだろー？」

「なーはなしてよー！」

2人でもみ合つてゐるうちに、新一の手を袋がはなれる。

パツサ！

床に落ちた袋はそのまま中身をばらまける。

「「あひー。」」

ぱらりまかれた写真は

鈴、鈴、蘭、鈴、蘭、蘭、蘭、鈴・・・・・

「なによコレー? 鈴の写真ばっか撮つてるかと思つたら・・・」

鈴と同じく、蘭の写真もある。

びつじて、と尋ねる蘭に、新一は頬を搔きながら答える。

「いや、だつて、鈴も可愛かつたけど。その・・・」

鈴を抱く蘭があんまり綺麗だから、と新一がつぶやく。

「なつ・・・・・・・・・・・

突然のことに蘭は真っ赤になる。
そんな蘭に新一はやり言ひ。

「あとひ、鈴には悪いけど、俺の一番は蘭だから」

「私も・・・」

「ん?」

「私も、鈴には悪いけど、新一が一番だから」

そう言つた蘭は鈴の寝てゐるベッドに近づき、その寝顔を見る。

「でも、これじゃあ鈴がかわいそうね・・・」

そう悲しげな顔をする蘭に、新一は言つ。

「大丈夫さ、きっと鈴にもいつか現れるさ、
鈴のこと、いつも一番に想つてくれるヤツが・・・」

「そう、ね。きっとさうよね！」

そう同調しながら蘭は思つ。

そんな人が現れたら、また新一が大変かもね・・・

あれ？ 10か月じゃなくともよかつたかも？
でも、やっぱ手を振るのってそれくらいだよね？

作者は週一で保育園でバイトしているのですが、
そこでみてる子が、だいたい10か月でバイバイしてたから
多分あります。はい。

次回もよろしくです！

豪雨（前書き）

リクエストの前に、コナン死ネタで・・・
苦手な方は back please !

「はあ、はあっ・・・・・」

コナンは地面に座り込んだ。

パシャリ、と音がする。下は水たまりだ。
でも、もうそんなこと、気にする必要のないくらい、
小さな体は濡れ、冷え切っていた

その腹部からは、止まることなく赤い、命の水が、あふれ出ていた

組織のアジトがわかつたのは、つい1週間前の事。

FBIの反対を押し切ったコナンは、組織壊滅の作戦に同行することとなつた。

コナンは蘭たちに「海外で両親と暮らすことになつた」とつげ、探偵事務所を後にし、そして今日、組織のアジトに向かつた。

激戦の中、コナンはジンと対することとなつた。

ジンは冷たい銃口を、まっすぐコナンにむける。

その姿には隙がなかつた。麻酔銃を撃てるような隙が・・・・・

コナンの手にも、FBIから持たされた拳銃があつた。

しかし、コナンにはどうしても、撃つことができなかつた。

例え、相手が何人も人を殺してきたような人間でも。

例え、自分の身を守るためだとしても。

拳銃は、人殺しの道具。

それを相手にむけて撃つた時点で、人殺しと同じになってしまつ。それが、相手を傷つけた時点で……

例外はある。

前にコナンが蘭を守るために蘭を撃つたような時。

しかし、今回は全く違う。このまま撃つたら、間違いなく殺人者と同じになつてしまつ。探偵として、人間として、それだけはできなかつた。だけどこのままではジンに撃たれる

その迷いがコナンを捕えている間に、ジンは容赦なく発砲してきた。その弾は狙いをそらすことなく、コナンの腹部に命中する。

「ぐつ」

うめき声をあげたコナンをジンは嘲笑い、背を向け立ち去つとした。

まるで、無力な子猫に背を向けても、何も問題ない、と言つかのようだ。

実際、今のコナンは無力だつた。

ジンの放つた弾はコナンの胃を貫通していた。

放つておいても、すぐに息絶える。

そんなものに何時までもかまつての必要はない、そう背を向けたジンに、

コナンは力を振り絞つて麻醉銃をつかこんだ。

バタリ、と倒れたジンを確認したコナンは最後の力をふりしほり、その場を後にする。

このままここにいたら、時期にFBIの誰かが気付いて自分を病院に運ぼうとするだらう。

だけど、この状況で1人でも抜けたら、それだけで戦況はひっくりかえる。

それに、とコナンは思う。

今から病院にむかっても、自分は助からないならば誰にも迷惑をかけない所にいこう。

そう思い、組織のアジトのビルから外に出る。

外は南国のスコールかと見まがつほどの、豪雨だった。激しく降る雨粒は、小さな体から体温を容赦なく奪う。足の力が抜け、コナンはその場に座り込む。

雨はますます強くなつていった。

腹部からどれほど量の血が流れたか、もうわからぬ。だんだんとかすむ視界のなか、コナンの脳裏には1人の少女の顔が、はっきりと浮かんでくる。

「蘭・・・・・」

彼女は今どうしているだろうか、笑っているだろうか？

そんな簡単なことすら、もう、考えられない。

「「めん、な・・・・・」

そんな小さな声と共に、コナンの体から力が抜ける

雨はただ、強くなるばかりだった

ねまじなー（前書き）

「んにちはー

週間ユニークアクセス見てびつべつします青葉ですー！

まさかあんなにいくとね・・・^v^；

みなさん、ありがとひげれこます^v^三（——）三^v

WISHO2様のリクより、口蘭でコナンが正体をばらします。

ねまじない

夕方の、毛利探偵事務所

事務所の主である小五郎は今、麻雀に出かけている。出かける時のあの様子では、夜遅くまで帰つてこないだらう。

西口がわす、事務所では、小五郎の娘、蘭と居候の江戸川コナンが向かい合つてゐる。

「どうしたの? コナン君。大事な話つて何?」

蘭が事務所で留守番をしてゐると、なにやら思いつめた様子のコナンが

「大事な話がある」と入ってきたのだ。

しばしうつむき、沈黙していたコナンは顔をあげ、口を開く

「あのや、蘭。聞いて欲しい事があるんだ」

「いぢりー。『蘭』じゃなくて『蘭ねえちゃん』でしょ!」

まったく、コナン君たら、年上を呼び捨てにしちゃダメよー。」

やつぱりと、コナンの額に軽く拳骨をぶつけた蘭に対し、コナンはなおも続ける。

「ちがうんだ、蘭！聞いてくれ！」

俺は、俺は江戸川コナンでも、小学1年生でもない！

俺は本当の俺の正体は・・・・・工藤新一なんだ！

お前の幼馴染の、高校2年生の工藤新一なんだよ！」

最後まで、一気にコナンが叫び、返ってきたのは沈黙だった。

「蘭・・・？」

やつぱ怒ってるよな、今まで散々騙してきたんだし・・・

そつコナン、いや、新一が白嘲せみに思つてると、蘭が動く気配がした。

新一が再び顔を上げ、蘭の方をみると、丁度、蘭が手を振り上げたところだった。

なぐられる！

覚悟はしていたものの、思わず新一が口を開じる。

ふわり

いつまでたつても衝撃が来ないので、新一がそつと口を開くと・・・

蘭の頭がすぐそばにあつた。

蘭は新一を抱きしめていたのだ。

「やつと・・・」

震える唇で、蘭が言葉をつむぐ。

「やつと、言つてくれたね。私、新一が言つてくれるの、ずっと待つてたんだよ？」

「蘭・・・・」

「ねえ、新一はどうしてこんなに小さくなっちゃったの？今まで、教えてくれなかつた事と関係あるんだよね？どうして、今教えてくれたの？」

立て続けにきた蘭の疑問に、新一は一つ一つ、答えていった。
あの日、トロピカルランドで毒薬を飲まされたこと、目が覚めたら、体が縮んでいたこと。

そして・・・・・

「蘭、俺はこれから組織ヤツラと決着をつけに行く。
だから行く前に、お前にだけは真実を話しておきたかったんだ・・・」

蘭の顔が、不安にくもる。

「それって危ないんじゃないの？
どうしてもいかなきやダメなの？」

「ああ。危険なのは承知の上さ。

それにこれは俺の事件だ。最後まで、解く。

あと、心配すんな！絶対に生きて帰つてくるから・・・！」

そうさうぱりと言つ切ると新一は蘭の瞳を真つすぐに見つめる。

その瞳をみた蘭は悟る。

「これは、引き留めても、無駄だ。彼は絶対に行く。と

そして蘭は、自分を見つめ続ける少年に顔を近づけていった。

蘭が唐突に顔を近づけてきたので焦った新一は、思わず目を閉じる。と

ちゅつ、と額に柔らかい感触。

「くつ？」

新一の額に口づけた蘭は、相手を見据えていつ。

「今のは、おまじないよ・・・

「おまじない？」

「そ、新一が、無事に帰つて来るよつこ、おまじない。
新一が、さつき期待したようなのは、帰つてきたら、する。
どう、何が何でも帰つて来る気になつたでしょ？」

「な、ちゅつ、期待つて・・・俺は別にそんな！」

動搖し、赤くなつた新一は、やがて觀念して口を開く。

「わかった。絶対、帰つてくれる。
だから、もう少しだけ待つてくれるか？」

「いやだよ。ホントは待ちたくない。

だけど、相手が新一なら待つてる。こつまでも待つてるから・・・

「

そんな蘭に、新一は感謝の笑みをうかべて

「ありがとう、蘭。じゃあ俺、行つてくれる。」

そして新一は探偵事務所を後にする。

「蘭！絶対帰つてくれるから！

だから、帰つてきたら“期待”、叶えてくれよな！」

その言葉と共に、新一は走り出す。

最後の決着をつけに・・・

おまじない（後書き）

なんかよくわからん文になつた気が・・・

あ～どうしよう。歩美ちゃんの話の続きが思い浮かばないへへ

まつめおこひのあこひつ（前書き）

暑いですね～（^__^）

今回はちび新蘭で最初の出来事。
短いです。

まつめおじいのあこせつ

その日、毛利蘭は母親に連れられて訪れた工藤邸で初めて同じ年頃の男の子に会った。

「まじめまして、むづきりんです。よろしくねー。」

「おれはねぐらじとこか。よろしくねー。」

子供2人があこせつをすませたのを見届けると、母親たちは

「じやあ、あとは2人でてきとーに遊んでねー」

「新一くん、蘭の」とよろしくね

と2人でおしゃべりを始めてしまった。

残された2人はそれじゃあ、と庭で遊び始める。

「ねえ、しんじちゃんはいつもなにしてあそんでるの?」

「たんべー」「」

「たんべー」「」

訊いてきた蘭に、新一は本を1冊見せて言つた。

「この本にかいてあるやうなじけんがおじつたとして、

そのじけんをたんてい役になつてとくんだ

「ふーん。おもしろいの？」

「あつたつまえだろ！？たんていはす」「いんだ！」

「じゃあ、わたしもやるー！」

その後2人は“たんてい”と称して、庭中を駆け回つた。

夕方、英理と有希子の長すぎるおしゃべりが終わり、

「蘭、かえるわよー！」

と英理の声がかかつた時、蘭は新一に言ひへ。

「今日はたのしかつたよーしんいすくん、ありがとー！」

「あ、ああ」

「ねえ、しんいすくんはわたしの」と今前でよんとくれないの？」

「いや、そんなことないぜ、らんー！」

新一の「」とばに蘭は首をかしげる

「らんー！」

「あ、いや・・・らん、ちゃん」

あわてて言い直した新一に蘭は首を振っこたえる。

「『ひん』でここよ！だからわたしも『しんこひ』ってよぶー。」

「ああ、わかつた。じゃあな、らん。」

「うそ、またねしんこちー。」

そう言つて母親の元へかけだそうとした蘭は

「あ、やつだ」

と振り返ると、新一の声で『ひまつ』とした。

「えー？ なにするんだよ、ひまつー。」

赤くなつてうたえる新一に蘭はひそり笑つて

「おともだちのじいじだよー！ だってわたことじんこひまつー、おともだちがじょー？」

そう叫ぶと、まだ赤こままの新一に

「じんこひまつー？ わたしのこじー、おともだちとおもつてくれてないの

？」

そつ懶しげな皿をむけるので、新一は頭をかきむつって

「あ～もう、んなわけないだろー？』

大声でしゃべりつと、ヨリヨリソラが赤くなりながら蘭のほうへ『ちゅつ』とかかる。

すると蘭はますます笑顔になつて新一に抱きつくる。

「しんいち、だ~いすき!」

彼女がその言葉の意味を、「好き」の意味をちゃんと理解するようになるのは
まだまだ先の事。

はじめましてのあこせつ（後書き）

なんだか大分はしょった気がする・・・

せじまつ（龍書き）

「おまじない」の続編。
新一が帰つて来ます。

～帝丹高校～

もつすぐら限日が始まるかといつ頃、園子は振り返り、後ろの席に座る親友に声をかける。

「ねえ、蘭、最近新一君と連絡とつてないの？」

「えつ？」

「『『えつ？』じやないわよ！新一君よーあんたたち、今ビビつくなつてんのよー！』」

大きな声で聞いてくる園子に、蘭は困ったように答える。

「どひ、つて、別に・・・」二カ用くらい連絡ないし・・・」

コナンが正体を明かし、組織を潰しにいつからもう二か用がたつている。

そしてその間、一度も連絡はない。

「はあ！？2か月も！？あんの馬鹿ナニやつてんのよー。もう蘭、あんな推理オタク、忘れちゃになさいよ。

ホラ、あんた昨日、こないだ転校してきた菊池くんに告白されてたじやない？」

カレと付き合つた方が幸せなんじやない！？」

「園子……私は別に……」

そう、蘭は昨日の放課後、1週間ほど前に転校してきた少年に告白されたのだ。
もちろん断つたのだが、相手はあきらめる素振りはない。
現に今も、

「あ、毛利さん！次の数学のプリント、やつてきた？
オレ、今日あたるんだよんね～」

そう蘭に話しかけながら隣の席
新一の席ながだが、に腰を
かける。

「あ、そこはダメー座らないでー新一の席なんだからーー」

いきなり声を上げた蘭に驚きながらも菊池は口を開く。

「新一、つて工藤新一だよね？ずっと休学してるつていい。
毛利さん、ソイツから2か月も連絡ないんでしょ？
そんな薄情なヤツの席なんかどうだつていいじやん」

「ちよつとアシタ一人の話、盗み聞きしてんじゃ……」

パンッ！！

園子が菊池に文句を言おうとした瞬間、鋭い音が教室に響いた。
蘭が菊池を平手打ちしたのだ。

「も、毛利さん？」

「新一のこと、そんな風に言わないで…新一の事何も知らないいくせに、

薄情者とか、そんなヤツとか言わないでよ…。」

蘭のあまりの剣幕に菊池が黙り込む。

教室中も、普段は温厚な蘭の変化にとまどっている。

「ちょ、蘭、落ち着きなよ…。」

園子が蘭をなだめ、荒い息をついた蘭が、ふ、と窓の外に目をやると、

「新一…？」

そう叫ぶと蘭は、教室をとび出して行った。

「工藤…？」

「え、ウソ？」

「工藤君…？」

驚いた2年B組の生徒たちが窓にはりつき外を確認すると、そこには確かに、彼らの級友、工藤新一が校門から歩いてくるのが見えた。

歩いてくる新一が丁度、校庭の真ん中あたりに来たとき、蘭が駆け寄つた。

「新一。」

「蘭！」

「夢じやないよね？ホントに、ホントに、新一なんだよねー。？」

「バー口ー、当たり前だろ？ただいま、蘭。おたせたな！」

「おかえり、新一！」

夢じやなかつた、と安心した蘭は新一に抱きつぐ。
新一も、蘭を抱き返す。と、その耳にせわせわ。

「帰つてきたら、俺の期待、叶えてくれるんだつたよな？」

「な・・・・ー。」

瞬時に赤くなつた蘭は、それでもうなづく。

「へ、ひん」

そしてそのまま田を開じると、新一の“期待”にこたえる。
重なつた唇を離すと、あらためて囁く。

「新一！お帰りなさい！」

「ただいま！蘭！」

と、2人が見つめあつていると・・・

「おついにひついたぞ、あの2人！」

「いやー、いいモンみたわあ」

「帝丹高校の名物夫婦、復活だな！」

「・・・・・・・・・・」

新一と蘭は黙つて顔を見合わせる。

忘れていたが、口々は校庭のど真ん中。つまり、2人のラブシーンは帝丹高校の生徒の皆様にしつかり、ばつちり、見られていたのだ。

校舎から降つてくる、冷やかしの嵐の中、園子がきつぱりと宣言する。

「・・・という訳で今日、ここで、帝丹高校の名物夫婦、あらたな始まりよー」

そして園子は振り返ると、頬に手形をつけたまま呆然としている菊

池少年に告げる。

「まあやつ詫びだから、蘭はあきらめのうとな。」

それを受けた菊池少年は

「そんなもん、アレ見りや嫌でもわかるつーの・・・」

ふて腐れた様につぶやいたのであった。

まじめつ（後書き）

この話は、続書きはありませんね。

多分、続きをいたら他のと同じになっちゃう・・・
にして、気の毒ですね～菊池少年。（お前のせいだう・・・）

次回はちび新蘭かな？

1等賞（前書き）

ちび新蘭で、運動会
びいわ～！

「う、ヒック・・ぐすん・・・」う～

人気のない、体育館脇に少女の泣き声がこだまする。耳を澄ませてみると、校庭の方からガヤガヤとにぎやかな声が聞こえてくる。

今日は、帝丹小学校の運動会だ。

そんな時に、なぜ少女
由は簡単である。
蘭が泣いているのかといつと、理

先ほど行われた「3年生女子100M走」にて、
スタート時はトップだった蘭は、半分ほど走ったところで転んでしまったのだ。
結果、1位は返上、ビリつけになってしまった。
ショックを受けた蘭はそのままコケタ時のケガと手当もせず、
その後に控えていた「3年生男子100M走」で走る幼馴染の様子
も見ずくに今、ここにいる。

じつじよう、1等の赤いリボン、もらえなかつた。

運動会の競技において、1位をとつた生徒に与えられる赤いリボンは子供たちにとって血癪すべきものだった。
もつとも、

去年もその前も、赤いリボンをお母さんにあげたの

に・・・

蘭は別に血縁の為にそのリボンが欲しかったわけではない。
1年生の頃、家を出つて行つてしまつた母親の誕生日に
そのリボンをプレゼントしたかったのだ。

「れじや あお母さん、喜んでくれないよ。

そしたらお母さんも当分帰つてこないかもしね、とますます蘭
が涙ぐんでいる

目の前に人の気配を感じた。

「・・・・・・・？」

今はまだ運動会中なのに誰がこんなところに来たんだ？
と不思議に思い顔をあげると、そこにいたのは・・・・

「まつたく、やつぱり泣いてたな・・・・」

「新一！」

そう、彼女の幼馴染の少年、工藤新一だつた。
彼の胸元には、1等賞の証である赤いリボンがついていた。

「新一、なんでこんなところに・・・・？」

「お前の姿がみえないから探しに来たんだよー。
どーせ、人気のない所で泣いてると思ったからよー。
そんなに1位じゃないのがいやだつたか？」

「ちがつもん…」

新一の言葉に蘭は猛然と反発する。

「ビリだつたのが嫌なんぢゃないもん…ただ、ただ…お母さんに赤いリボンプレゼントできなかつたから…」

「…・・・・・」

言つてゐる途中でまた悲しくなつてきて、涙をにじませた蘭を新一は黙つて見つめると、おもむろに自分の胸元のリボンを外しました。

「ちよ、新一…？」

〔惑つ蘭をよそに新一は自分のリボンを蘭の胸元に付け替えた。

「よし、これでオッケー！」

満足そうに手をパンパンとたたく新一に蘭はくいかかる。

「ねえ新一！何なのよコレ！私の事バカにしてんの…？そんな、新一のリボンなんて貰つたつてうれしくない！お母さんにだつて、あげられない！」

そう声を荒げる蘭に新一は言つ。

「べつにおめーの」とバカになんてしてねーよ…・・・

「じゃあなんなのよ！私はビリだつたんだから、

赤いリボンをもらえるわけないでしょー。」

「ソレは走った順位にあげたわけじゃない」

「えつ？」

「走った順位だつたら確かにお前はビリだぞ？
だけど、お前はこけても最後まで頑張つて走り切つただろ？
だからソレはその頑張りに対してつけたんだ」

「頑張り・・・？」

「ああ、お前は頑張りは一等賞だ！
だからそのリボンを貰う権利があるんだ」

「新一・・・ありがと、」

蘭はそつまつと新一に抱きつく。

「わ、なんだよーはなせつたらーほら、運動場に戻るぞー。」

「うんー。」

元気よくうなずいた蘭は新一と運動場にむかう。
そこへふと思いついた。

「ねえ、新一。私にリボンあげちゃつたら、新一のなくなつちゃう
けどよかつたの？」

そんな蘭の問いかけに、新一は何故か目をそらして答える。

「いいんだよ、別に。俺が欲しかったのは赤いリボンじゃないし……」

「え？ 何？ 最後のほう聞こえなかつた！」

「あ～もう、別になんも言つてねーよ……わざとでもどけるやー。」

そうかけだした新一を蘭は慌てて追つ。

「あー待つてよ、新一ー！」

その顔にさつきまでの涙はない。
それを見た新一は満足げに笑う。

「俺が欲しかったのは蘭の笑顔だよ……」

名前で呼んで? ～C&A～（前書き）

「ナン」と「哀」、2人がお互いを下の名前で呼びます。
でも「哀ではない、かな？」

名前で呼んで? ～C&A～

～とある朝、とある旅館の食堂で～

朝、目を覚ました哀は自分の部屋を出て、階段を降り、食堂に向かう。

今朝目を覚ましたのは、何時もの、

彼女が居候させてもらっている阿笠邸ではなく

×旅館、という小さな旅館だ。

昨日、たまには星でも見ようかという阿笠博士の提案で口口にきた。あまりにも急すぎたため少年探偵団の子供3人はおらず、今回は、阿笠博士、哀、そして江戸川口ナンだけの外出である。

哀が食堂に着くと、もう少しこはすでに、メガネの少年、江戸川口ナンが腰をかけていた。

哀は「口ナンの隣のイスをひき、腰かけると口を開く。

「おはよー。」、「口ナン」

「あ、ああ。おはよー。・・・・哀」

そんな挨拶を交わしあう2人はお互いの目を見ず、

とても下の名前で呼ぶ仲には見えない。

それもそのはず、普段はこの2人、「灰原」、「江戸川君」と言つた風に

互いを名字で呼び合つてゐるのだ。

そんな2人が今、下の名前で呼び合つてゐるのは一つの理由がある。

それは昨日、この旅館に着いた時までさかのぼる。

「1日前、旅館の受付で

「大人1名にお子様が2名ですね。
申し訳ありませんがただ今3人部屋が空きがありません。
どうなさいますか？」

受付の女性の言葉に阿笠博士は少し困ったように後ろをむく。
彼の視線の先には“見た目”小学1年生の男女が2人。
しかし彼らは“中身”17歳と18歳（自己申告）である。
彼らを2人部屋に入れて、自分が1人部屋。といつていいのだろう
か？

しかし、男2人、女1人になると今度はそれも心配だ。

“見た目”小学生の少女が1人部屋に泊まるのはやはり、いただけ
ない。
さて、どうしたものか？と博士が頭を抱えていると
問題の2人が話し始めた。

「おい、灰原、お前、どうする？」

「“どう”つて江戸川君。貴方私と同室になる気?」

「いや、別に・・・
ただおめーを1人部屋にするわけにもいかないだろ?」

と、この2人の会話を聞いた受付の女性従業員が口を開く。

「おやまあ、最近の子はずいぶん大人びてるんだねえ!
そんなに小さいのにお互いを名前じゃなくて名字で呼ぶのかい?
ちょっと子供っぽさが足りないんじゃないの?
ほら、下の名前で呼び合つて『ごらんよー』

「「・・・・・」

コナンと哀、2人は無言で互いの顔を見やる。
そうか? 常々「子供っぽいしぐさ」をそれなりに心掛けてはいたが、
足りなかつたのだろうか?

米花町ならば、いい。

皆慣れているから。

しかしここは米花町ではない。

ここではこのままだと「子供っぽくない子供」と思われてしまう。
米花町いはではそんな事気にも留めないけど、

他所では流石に少し気になる。

だから2人は「子供っぽさ」を出すために

「あ、哀」

「」・・・・・コナン」

この場ではお互^いを名前で呼ぶ」とある。

それを見た従業員の女性は満足そつそつと笑う。

「アリヤ、やつぱ子供はアリジヤなべくやー。」

結局、博士と哀が2人部屋、コナンが1人部屋を使つこととなつた。若干、その女性に不審がられたが・・・

「なあ、哀、博士は?」

「まだ高イビキよ、えど・・・」^{△△}コナン

互^いを下の名前で呼び始めてから、一晩経つがまだ慣れない。

しかし旅館ではソレを続けなければならぬ^{△△}。

「「はあ～～～」

博士が起きてきて、帰るまでコレが続くのか、と2人は盛大なため息をついた。

なれなこりひと、するむたじやなー。

名前で呼んで? ~C&A~ (後書き)

次はコレの高佐バージョンで!

名前で呼んで? ↴ W&M

由美の作戦(前書き)

名前で呼んで? の高佐版
長くなりそうなので、2つに分けます。

名前で呼んで? ～W&M～ 由美の作戦

～警視庁にて～

「佐藤さん、コレ、」の間の事件の資料です」

「ありがとう。助かるわ、高木君」

「いつもの、いつも通りの、上司と部下の何気ない会話。

「・・・・・」

そしてその会話を、扉の向こうで聞いている人影が2つ。

「まあ～ったく、美和子も高木君もいつまでたってもお互いを『高木君』

『佐藤さん』って名字+君・さんづけで呼んじやって、
いい加減名前で呼び合えって! ねえ? 千葉君?」

「ちよつと由美さん! なんで僕までこんな所で聞き耳を立てなきゃ
いけないんですか! ?」

「あら、丁度通りかかったんだからいいじゃない」

人影の1つは、交通課の宮本由美。

そしてもう1つは扉の向こうにいる高木・佐藤両刑事と同じ捜査1課の千葉刑事である。

由美に腕をつかまれたまま、千葉が抗議する。

「だいたいあの2人は一応上司と部下なんですよ！？」
“君”とか“さん”とかつけてもいいじゃないですか！」

だが由美は千葉の言葉には耳を貸さない。

「あまいわね、千葉君。あの2人はもつすでにキスまで済ませてるのよ？」

「いい加減、『涉？』『美和子？』とかつて呼び合つても何ら問題はないんじゃない？」

「・・・でも、今は仕事中ですし・・・」

「じゃあ、勤務時間以外にお互いをビビつ呼んでるが、確かめてみましょう！？」

「じゃああとでね、と自分の職場に戻つていった由美の背中に千葉が問いかける。

「ちょっと、『あとでね』って僕もいくんですか？由美さん！」

当然、由美は戻つてこなかつた。

（夜、警視庁の駐車場にて）

「今日も1日お疲れ様、高木君」

「あ、佐藤さんもお疲れ様です。あの、佐藤さん。

この間ウマいラーメン屋見つけたんですけど、一緒にこきませんか？」

「行く行く！ 高木君、案内して！」

と、仲良く会話する2人をコンクリートの柱の影から覗く人影が、またもやっつ。

「ほお～う～」覧なさい！ 千葉君、あの2人はやっぱり下の名前で呼び合ってないじやない！」

「はあ

元気いっぱいの由美に、その由美に無理やりひっぱられてこじつけた千葉がやる気なさげに相槌をつつ。

まったく、高木のヤツがちゃんとしないからこんな目にあつたじやないか

千葉がそう投げやりに考えていると、由美の声が届く。

「よおし！ こうなつたら『高木・佐藤の2人を名前で呼ばせ合おう作戦』の開始よ！」

「はあ～！？」

「もちろん、千葉君も協力するのよ？」

その言葉に千葉は警う。

もうなんでもいいから、速やかにあの2人に名前で呼び合つてもううつ～

そして自分の平和をとりもどすのだ！

そして翌日、2人は早速“作戦”にうつる。

と。

名前で呼んで? ～W&M～ 由美の作戦（後書き）

この続きは明日には投稿しようかと思います。

名前で呼んで? ～W&M～

千葉の作戦（前書き）

昨日の続きをです。

今日もあつかつたですね・・・

名前で呼んで? ～W&M～ 千葉の作戦

～翌日、昼～

由美と千葉は早速行動に移つた。

この2人の“作戦”は極めて単純だつた。

「他のヤツが名前で呼べば自分たちもそうするだろ」
といつう安易すぎる考えの下、この作戦は実行される。

「じゃあ、千葉君。高木君の方、ヨロシクね。
私は美和子のヤツんとこ行つてくるから!」

「はあ・・・」

なぜ自分がこんなことやらなきゃならんのだ、といつう不満を押し隠し、千葉は高木の元へむかう。

よつは佐藤刑事のことを「美和子さん(ちゃん)」とよんでることを聞かせればいいんだろ・・・

そんな刑事は警視庁に大勢いる。

何せ、佐藤刑事は警視庁のアイドルなのだから。

「おい、高木。昼飯食べに行こう

千葉がそう誘つと、高木刑事はすぐにきた。

「ああ。さつき由美さんが佐藤さんを連れてつたし、
今日は千葉お葉と食べるか・・・」

そんな高木刑事を連れて、千葉はすぐ近くのファミレスへむかう。
そこは、よく警視庁の刑事達が利用しているところだ。

昼食後、高木刑事は黙つたままで考え込んでいた。

千葉が連れていったファミレスには、やはり「佐藤美和子絶対防衛
さとうみわこぜつたいほうえいラ
線」の面々がいて、

佐藤刑事の話をしていた。

呼び方は「美和子ちゃん」

それを聞いた高木刑事は「自分も佐藤さんのこと、名前で呼んでいいか？」と
先ほどから考え込んでいるのである。

それを見た千葉は「後は高木じこが自分でどうにかするだらつ」と結論
付ける。

一方由美は

「大学の時の彼氏、裕也って言つんだけじゃね。『由美は賑やかで
退屈しない』
って言われたのよ！？ちょっとレディに対して失礼だと思わない！？
だいたいね、裕也のヤツはいつも・・・・・・・・」

昼食中、話したくもない元カレの話を佐藤相手に延々と話していた。

「さあ、美和子。ここまでやつたんだから、そろそろ高木君の事名前で呼びなさい！」

最後にそう念を送ると、自分の職場に戻つていった。

佐藤刑事もまた、なにか考え込んでいるようだつた・・・

（夜、勤務終了後）

いつもの様に佐藤と高木は2人で、車の傍でしゃべつていた。

「今日も1日お疲れ様でした。・・・・佐藤、さん

「うわ～、『美和子さん』って呼びたいのに呼べない～！

と高木が内心、頭を抱えていると

「なんか、今日は少し様子が変じやない？
それとも、私と話したくないのかしら・・・？」

佐藤の言葉がなげかけられる。

「そんなわけないじゃないですか！～～～～ 佐藤さん！」

慌てる高木の様子を見た佐藤はふと思つたつ。

もしかしたら、彼も私と同じこと考えてたりして、ね。

田の前にいる相手を名字ではなく、名前で呼びたい、呼んで欲しい

それは、由美の話を聞いてから佐藤がずっと思つていたことだ。

ちよつちよ、呼んでみるか

覚悟を決めた佐藤は、息を吸い込み、口を開く。

「涉」

「くつーー？」

田の前の先輩刑事の口からでた単語にキョトン、とする高木に佐藤はさうりて言つた。

「今日から私、貴方の事『涉』って呼ぶから。いいわよね？」

そんな佐藤の言葉に高木は顔を赤らめ、

「じゃあ僕も

「何？」

「僕も佐藤さんのこと、『美和子さん』って呼んでもいいですか？」

ああ、やっぱり彼も同じこと考えていたのね。

ふつ、と顔をほころばせた佐藤は、相手に告げる。

「ダメよ」

「えつ」

一瞬で悲しそうな顔になつた高木に更に言葉を重ねる。

「私を呼ぶなら『美和子』にしない。いいわね！？渉！」

今度は目をパチクリとさせた高木は、嬉しそうに言つ。

「はい。わかりました！美和子！」

そんな2人をまたもや柱の影から盗み見・・・いや、見守る人物が2人。

「いやあ～作戦大成功ね 千葉君！」

「つて、なんで俺がここまでつきあわなきゃいけないんですか～？」

由美ちゃん。」

由美に文句を言った千葉は心中で堅く誓う。

今度絶対、高木に夕飯おじいちゃんやるーーー。

なんか話べひやぐひやになひやつたなあ・・・

あ、由美さんの元カレの名前はトキトーにつけました。

ねがこじる（前書き）

リクで新一と蘭が娘の鈴と星を見に行く話。
ごめんなさい、ラブ要素少ないです。
鈴ちゃんは4~5歳くらいかな？

バタン

夜の闇に、車のドアを閉じる音が響く。

「着いたぞ。暗いから足下に気をつけろ」

「」は人口の明かりのない、暗い場所。ボーッとして歩くと転んでしまう。

車の助手席から降りた蘭が、後部座席にまわって娘の鈴を抱きあげる。

が、

「おかあさん、りん、1人で歩ける」

「でも暗いから危ないわよ。転んじゃつわよ？」

「だいじょうぶだもん！りん、そんなにドジじゃないからー。」

と、蘭の腕からぴょんっと飛び降りた。

「あ、ちよつと鈴ー。」

蘭が慌てるが、

「大丈夫さ、蘭。行こう！」

新一はあつせいと言ひ、蘭の手をとる。

それを見た鈴が、新一の手をつかむ。

「りんもおどりかと手、つなぐー。」

今日は親子三人で天体観測だ。

「あの赤い星が1等星のアンタレス。さそり座の心臓なんだ。アンタレスっていうのはアンチ・アレス、つまり“火星に対抗するもの”って言葉からきてるんだ。」

新一が、空を指さしながら蘭と鈴に講釈する。

「さそり座？」

鈴の言葉に新一はさらに言ひつ。

「そう、さそり座の神話って知ってるか？オリオンっていう乱暴者の巨人がいてな、それに困った大地の女神のガイアがオリオンの元にサソリを送りこんで・・・」

と、そこで新一は言葉をきつた。

蘭がものすごい形相でこちらをこちらに見ていたのだ。

「し・ん・い・ち？」

「はい？」

地獄の底から響くような低い声の蘭に新一は硬直しながら返事をする。

そんな新一にニシ「コリ笑つて蘭は言つ。

「鈴（玲）にセーゆー物騒な話はしなくていいからね？」

「ハイ・・・」

そこで新一は別の星座に話をきりかえる。

「よし、じゃあさそり座のすぐ傍のいて座だ。コレは北斗七星を小さくしたような“南斗六星”が田印なんだ。ホラ、あそこ」

わかるか?と指さしながら続ける。

「いて座はケンタウロスって言つて、半分馬で半分人間の生き物が、弓を引く姿だ。この星座の話も有名でな、このケンタウロス、ケイロンって名前なんだけど、そいつと師弟関係にあるヘラクレスが放つた毒矢が・・・・」

またもや新一の言葉が途切れる。

よくみると蘭が拳を握り締めている。

まるで、それ以上その話続けたら殴る、といつてゐるかのよつ。

「おとつせと?」

話の途中で口を閉じた父親に鈴が呼びかける。

ハツとした新一はまた慌てて、別の方向を指す。

「よし、じゃあ夏の大三角だ。コレはその名のとおり、一等星を3つ、つないだ大きな三角形で真ん中には天の川が流れてる」

アレとアレと、アレだよ。と新一はアルタイル、ベガ、デネブの順に指していく、蘭と鈴はその指先をおつ。

「アルタイルはわし座の一等星で、牽牛星、つまり七夕の彦星だな。そんで、ベガはこと座の零等星。これも七夕の星で、織姫星。最後は、はくちょう座のデネブ。丘鳥のシップに当たるんだ」

そこまで新一の説明が終わると鈴が口を開いた。

「知ってるよ、ソレ…おりひめさまとひしまが離れ離れになっちゃって、その時に鳥さんがツバサで橋をつくって会わせてくれたんだよね？」

「お、よく知ってるな！鈴は」

新一が褒めると鈴は嬉しそうに笑い

「だって、この間幼稚園でやったもん！毎にお願い事、ふりさげたの！」

「何をお願いしたんだ？」

新一の質問に蘭が口をひらく。

「それが鈴つたら『ヒミツだよー』って教えてくれなくて・・・」

「う～ん、おとうさんにも教えてくれないのか！？」

「だつてヒミツだもん！」

鈴の言葉に新一と蘭はむむむ、と顔を見合わせる。そんな2人の様子をみて鈴は言った。

「じゃあ、おとうさんとおかあさんのお話してー。」

「えつー？」

同時に声をあげた両親に、鈴はさりげに言へ。

「前に園子おばさんが言つてたの！『アンタの両親は高校生の時は七夕の織姫と彦星だったのよ～』って。それと『そんな状態でも2人はラツブラツだったわよ！』って。なにがあったの？」

その言葉に新一と蘭は顔を赤くする。

園子のヤロー！

園子つたらなんてこと言つのよー？

少し後に、ようやく落ち着きを取り戻した2人は鈴に“高校生の時のこと”を話した。

組織の事は除いて・・・

話を聞き終わった鈴は一言。

「ふーん。それじゃあおとうじさん達はおひめねひとりでしゃが
よりもアツいんだねー！」

「はーーー？」

「ちょっと待て、どうしてそんな感想になる? もそも『アツい』な
んでビリで覚えてきたー?」

そう新一が激しく考へていると鈴がまた言つ。

「だって、七夕みたいに“いつ会える”って決まってなかつたのに、
おかあさんはおとうさんをまつてたんでしょう? それで、おとうさん
もおかあさんが待つててくれるって信じてたんだ。だから園子おば
さんが『あの2人はいつまでたつてもおアツい』って言つたんだね
！」

「…………」

やつぱり園子か、『アツい』なんて言葉、鈴におしゃたのはー。

新一が無言で拳を固めていた、蘭が再び鈴にきいた。

「ねえ、鈴。七夕になんてお願いしたの?」

すると鈴は一ヶ口と笑つて言つた。

「おとうさんとおかあさんがいつまでもなかよしであつますよ
に”だよー。」

ねがい」と（後書き）

星座の神話って結構スゴイの多いですよね＾＾；

親友（前書き）

親友といつても、人間同士じゃありません！
今回の主役はあのヒト！
ややキャラ崩壊かも？

『警部さんもしかして、人間のお友達少ないの?』

ふと、幼い声が彼の頭に去来する。

その声の持ち主は、東京からやつてきた1人の少女だ。

ハアーッと彼は深いため息をつく。

あの少女が、悪意を持つて前のセリフを言ったのなら、まだいい。
ところが少女は大真面目な顔で彼の心配をしてきたのだ。

彼
京都府警の綾小路文磨警部は己の指先にいる小動物
を見る。

その小動物、シマリスが、綾小路警部の親友だ。

親友がリスじやアカンのか、そんな訳ないやろ、ほつと
いてくれ

リスに腕を走らせながらやけくそ気味に思ひ。

そこでふと、彼のライバルと言われている本庁の警部を思い出す。

白鳥だつて変わつてるやないか、なのに、なのになんでア
イツには・・・

恋人があるんや!

先日、京都府内を騒がせている連續強盗犯の件で、本庁を訪れた時
知つた。

白鳥警部に恋人ができたことを…

本人に確認したら、堂々とノロケてきた。

後輩の刑事に冷やかされながら…

その様子を見た、綾小路警部は恋人の件とで一重に負けた気がした。
そりや、自分だつて後輩には慕われている、と思う。
だけどあんな遠慮のない仲の良さは築けていない。

フン、と小さく鼻を鳴らす。

別にいいんや…僕にはこの子がいるんやし…

そう思いながら、肩にのつたシマリスをそつとポケットにしまう。

京都府警のエリート、綾小路文麿警部。

今日も手のひらサイズの親友との絆を深めている

親友（後書き）

「迷宮の十字路」での歩美ちゃんの一言、キツツイと思いませんか？

真顔あんなこと言つだなんて・・・

綾小路警部の口調、1人称がわかりません。
ちょっと、今回はおふざけな話でしたね^_^

服部平次の大捜査！（前書き）

一応平和かな？

服部平次の大捜査！

「ああああつ！」

学校から帰ってきた服部平次は冷蔵庫の前で、衝撃にかたまつていた。

「あんみつ堂のプリン、俺の抹茶黒蜜プリンが～！」

そう、彼が先日、京都に行つて買つてきた好物の抹茶黒蜜プリンが冷蔵庫から忽然と姿を消していたのだ。
ちなみにどれくらい好きなのかと言つと、平次はわざわざその為だけに京都にいつてきただけくらいである。

「なんでないんや、誰が食つたんや！」

食べ物の恨みは恐ろしい。ましてや、それが大の好物ならば、なあさらだ。

「絶対犯人つかまえたる」

そもそもって、新たに買わせる！と決意を胸に平次は捜査を開始する。

幸いここは自宅。

犯人は、身内の者に決まつていた。

「オカソー。」

「なんや、平次。落ち着きのない」

ドタバタと部屋に駆け込んできた息子に眉をひそめながら、平次の母、静華が返事をする。

そんな母親に、平次は尋問（？）を開始する。

「オカソ、しょーじきに言つてもらおーか？」

「何をや？」

「俺の大事なあんみつ堂のプリン、食べたのはオカソか？」

「あーあのプリンな・・・」

「なんやー!? 食つたんかー!?」

おのれオカソめ、と平次が鬼人の形相でせまると、

「いや、食べてもよかつたんか?なら貰えればよかつたなあ」

なんや誰か先に食べてしもうたんか、とのんびりした返事がかえつてきた。

容疑者1、服部静華、無罪。

「くつ、なら犯人はオトンか！」

寝屋川の自宅に住んでいるのは、平次と両親である。
さつきの様子からして、母はプリンのことを知らない。
ならば犯人は、父、服部平蔵しか考えられない。

今、父は仕事中でいない。

本人に直接聞いて確かめることはできない。

ならば証拠を探してやろう、と捜査を再開する。

1時間後・・・

「あ～どこにもない！オトンめ、証拠を隠滅しよったな！」

父の部屋を中心に、家中を探し回ったが、空のプリン容器はどこにもなかった。

「くそ、あんのキツネ目クソ親父、帰ってきたら耳の奥に指突っ込んで奥歯カタカタ言わせたる！」

父への復讐を決意した平次はそれまで部屋で寝てよつ、と自室にあがる。

そこで平次が曰いたものは・・・

自分のベッドで気持ちよさそうに寝ている幼馴染の姿だった。

「なにしてんや?」トイツ・・・

そう言えど、帰ってきてすぐにキッチンの冷蔵庫に向かつたから、一度もこの部屋みていなかつた。

そんな事実に思い当つた平次は、ベッドのふたりに腰を掛けた。

「なんつーか、無防備なやつちやな~」

普通、主が不在とはいえ、男の部屋でこんなのんきに寝られるか?と首をかしげた平次は、その瞬間、あるものを視界にいれる。

ベッドのわきの、「ミニ箱の中。

そこには、平次が何よりも楽しみにしていたあんみつ堂のプリンの空容器。

「・・・・・・・

まさか、と平次はすぐそばで寝息を立てている幼馴染をみや。

そのかわいらしい寝顔、の口元には黒っぽいモノ。

そう、それは、間違いなく平次の大好物、あんみつ堂の黒蜜抹茶プリンの黒蜜だつた。

「~~~~~」

平次はその場で脱力した。

まさか和葉^{ハヤシ}が犯人やつただなんて・・・

これじゃ、怒るに怒れないやないか・・・

こんな可愛い寝顔をみたら怒れない、と平次はあきらめる。

けれど、そのままじや自分がかわいそうじやないか。

そう思つた平次は、ならばせめて、と

チユツ・・・

自分の唇で、和葉の口元に残る黒蜜をぬぐつた。

ソレは、いつもより、甘い気がした。

服部平次の大捜査！（後書き）

多分次回も平和です！

冬のダイヤ（前書き）

「めんなさい

平和から予定変更、恋人快晴でいきます^ ^ (ーー) ^v
夏に冬の話かくつてどりよ・・・

「ねえ快斗ーーアレがオリオン座だよねーー?」

「ん? ああ、良くわかつたな、アホ子」

「何よーー青子だつてオリオン座くらいしつてるもんバ快斗ーー!」

「あんだとアホ子ーー!」

2人の元気のよい声が辺りに響く。

普通ならこれだけ大声を出すと近所迷惑なのだが、2人は全く気にしているない。

それもそのはず、口々は自然豊かな山の中なのだから。

今日は快斗が急に「星でも見に行くか」と言いだしたため、口々まで来た。

「じゃあ快斗、青子の事バカにするなら星の事詳しいの?」

「は?」

「『は?』じゃないわよーー『良くわかつたな』なんて言ひくらいいなら、星の説明ぐらいでみなさいよーーそれともできないの?」

「ンな訳ねーだろーーいいぜ、教えてやるーー!」

そつまうと快斗はビシイツと夜空を指をして話しだす。

「いいか？まあ、オリオン座だろ？そんでもってアレがおおこぬ座

アレだ、アレ。と夜空の方を指す快斗。しかし青子は、

「で？」

「『で？』ってなあ・・・」

「だつて快斗、ただ星座を指してるだけじゃない。上藤君と星見に行くと詳しく述べて教えてくれるって蘭ちゃんが言つてたよ。」

チクシコウ、名探偵め。と快斗は内心小走りをする。

「俺だつてそそぐりに出来ねー。教えてやるから黙つて聞けよ。」

「うそ」

「まず、オリオン座。左上方の明るくて赤っぽい星が1等星のベテルギウス。コレとおおこぬ座のシリウス、こいぬ座のプロキオンでできた三角形が“冬の大三角”だ」

「ふーん、きれいな三角形だね」

「ああ。あと冬の空にはダイヤモンドもあるんだぜ？」

「えー？ダイヤ？星の事？」

でも星1個だけならわざわざ冬の限定じゃなくとも・・・といふやくへざらひと青子に快斗は言つ。

「星を一つ指して言つたじやねーよ。冬は1等星が多いんだ。それを6個、つなげる」

いいか?と青子に聞くと、快斗は再び夜空を指す。

「オリオン座の右下、足の部分だな・・・あの青白い明るい星がオリオン座のもう一つの1等星、リゲル。そんでもってあそこにある双子座、あの橙色の星がポルツクス。あっちにある黄色い星がぎょしゃ座のカペラ。・・・ここまでいいか?」

「ええっと、アレがリゲルであっちがポ・・・ポルツクス?それでそっちがカペラだよね?」

自信なさげな青子に快斗は笑つてうなずき、解説を再開する。

「あそこにあるのがおうし座、おうし座にはV字型のヒヤデス星団とフレアデス星団・・・日本では“すばる”の方が有名だな。があるんだけど、ヒヤデス星団にある橙色の1等星が、アルデバラン。それで、今言った、リゲル・シリウス・プロキオン・ポルツクス・カペラ・アルデバランの6つの1等星をつなげてできた六角形が“冬のダイヤモンド”ってわけさ!」

「へーっ、スゴイねー冬つて明るい星がいっぱいあつて綺麗!夜空つて星がいーっぱいつまつた宝箱みたい!」

そう無邪気に声をあげる青子に快斗が両手を広げて見せる。

「ハイ、じこでーつ、マジックをおみせしましょ!」

そう言つと、右手を開いて青子の顔の前にかざし、

「『』覧の通り、『』の右手はただの右手です。ですが、魔法を使って『』の右手で夜空の星をつかんで見せましょう。1・2・3…はいっ」

ポンッとこう軽い音がすると、快斗の手のひらには本物のダイヤ、の指輪。

そして、ソレは次の瞬間、青子の左手の薬指にはまっていた。

「快斗…」

驚いた青子が快斗を見ると、彼は照れ臭そうに頭を搔きながら言った。

「なあ、青子。指輪受け取つてくれないか？」

「ええええっ…快斗…ちよ…・・・それつて…・・・けつ…・・・」

驚きのあまりまともにしゃべれなくなつた青子に快斗はまづさき、

「青子、オレ、黒羽快斗と結婚してくだせー」

青子はこれ以上ないほど赤くなると、やがてうなずいた。

「はい」

と、その時、青子の視界を何かが走つた。

「あつ、見て快斗ー流れ星ー」

「お、ほんとだー」

「お願い事しなきやーーー。」

真夜中過ぎの2人の恋人たちの頭上では、流れ星のショーが繰り広げられていた。
まるで、これから2人の幸せを予感させるかのように

最後のは双子座流星群です。

海賊キッドのお魚遭遇記（前書き）

今回はキッドです。

キッドファンの皆様は読まない方がいいかも・・・

夜、米花美術館

「へつへん、相変わらず甘いなあ中森警部も。毎回毎回あんな偽物にひつかかって・・・名探偵の姿も見えないし、この分じゃ、今日も楽勝だな！」

「いつもの『』とく中森警部を出し抜いたキッドは上機嫌で田的池にたどり着いた。

今日の標的はビッグジュエル
“湖の光”。

名前の由来は色々と言われているらしいが、ナッシュはそんなモノ

が、その黒幕に盤かげば一一のビ。

“湖の光”を展示している部屋まで着いたキッドは上機嫌のまま、宝石に近づく。

「よし、じゃ あ頂くとしますか

そう言つと、ガラスケースに手をかけ、“湖の光”に手を伸ばし、
持ちあげる。
と、次の瞬間、

静かな部屋に、キッドの悲鳴が響き渡った。

暗くてよく見えなかつたが、宝石の下にひいてある布にはある絵が描いてあつたのだ。

怪盗キッドの最も苦手とするもの、すなわち、魚

そつ、この宝石“湖の光”には、キッドが氣にも留めていなかつた名前の由来があるので。

一つは、宝石の輝きが湖の水面に反射する、太陽の光の様だから。そしてもう一つは、湖を泳ぐ魚の鱗の輝きに似ているから。

なので美術館は、この宝石を展示するにあたつて、名前の由来にふさわしく、魚の泳ぐ柄の布を宝石の下にひいたのだった。
そんなことは露も知らず、無防備にヒョイと宝石を掴んだキッドは、魚の絵を直視してしまつた。

常に冷静な平成のアルセーヌ・ルパン、怪盗キッドもこの時はばかりは冷静ではいられなかつた。

『ポーカーフェイスを忘れるな』と語つ父の言葉も忘れた怪盗は、悲鳴を上げ、宝石も放り出してその場から逃げだした。
彼は逃げたかつた。一刻も早く、魚の絵から

その後、逃げ出した怪盗キッドは、偽物^{ダミー}に気がついて引き返してきました中森警部と鉢合わせして、いつもより辛い鬼^{ゴースト}をするはめとなつた。

「どうしたんだ? アイツ・・・」

キッドがいなくなつた後の部屋に、小さな子どもの声が響く。

キッドキラー、江戸川コナンだ。

彼はキッドがダミー人形を使うことを見越し、警察の様に騙されることなく、先にこの部屋でキッドを待ち伏せしていたのだ。
コナンは今まで身を潜めていた柱の影から出でてみると、辺りをキヨロキヨロと見まわす。

そこには別になにもない。

キッドの放り投げていったビッグジュエル以外は。

「ヤバイ奴でもいたのかと思つたけど、そーゆー訳でもないみたいだし・・・」

コナンは首をかしげる。

「なんだつたんだ?」

彼はこれから1週間ほど、頭を悩ませることになる。

ああ、キッドファンの方、すみません^__^

小五郎犬

「も～、お父さん～ちやんと野菜も食べなきゃダメでしょー？」

「ううせーな、蘭。野菜なら食つてるじゃねーか！・・・つたく、英理みたいな」と皿にやがつて

「そんな切れ端が“食べる”に入るわけないでしょー？ ロナン君を見習いなさいよー好き嫌いせずにおやんと食つてるわよー。」

夕飯時、毛利家の食卓。

肉ばかりで野菜を食べよつとしない父に蘭は注意するが、小五郎はのりつくれつとかわしていく。

「お～ロナン、おめー玉ねぎ好きだろ？俺のやるから食べていいぞ

」

小五郎はさう言いながら自分の皿のカラダから、玉ねぎだけを箸でとつ、ロナンの皿にじりりと移す。

蘭がすかさず雷を落とす。

「もうー、ロナン君に押し付けないで自分で食べなさいー子供じゃないんだから」

すると小五郎はわざとらしくシナを作る。

「え～、小五郎ちゃん、中毒おひすから、玉ねぎ食べられな～い？」

「何バカなこと言つてんのよー？玉ねぎで中毒なんておひすわけな

いじょー。」

「蘭は平氣でも、小五郎ちゃんはおしゃべりが上手です～」

「んもうー、知らないー、勝手に言つてればー。？」

あくまでもふざけ続ける小五郎に蘭は怒りを爆発させ、夕食の時間が終わった。

「まつたくもひ、お父さんたら、子供みたいに好き嫌いするんだから。。」

「蘭ねえちゃん」

夕食後、小五郎は風呂に入り、蘭がふりふりしながら食器を洗つていると後ろから声がかけられた。

「コナン君」

「おじさんつてば、大変だね」

苦笑いしながら風呂の少年に蘭は詫びる。

「いめんね、口ナン君。結局お父さんの野菜食べてもひりひりやつて。
・
・
・」

そつ、小五郎が押し付けた野菜を結局口ナンは全て食べたのだ。

「まつたく、な～にが『小五郎ちゃん、玉ねぎ中毒なの～』よーお父さんたらバカじやないの？」

そこで蘭はエプロンを引っ張られる感覚に視線を下に向ける。すると口ナンが蘭のエプロンを軽く引っ張っていた。

「どうしたの？」口ナン君

「蘭ねえちゃん、あのね・・・」

口ナンはたぐらみを含んだ笑顔で蘭に何事かをややく。

そして、口ナンの口元から耳をはなした蘭の顔にも、同じ笑みが広がつた。

深夜の毛利家の1室で、1つの大きな影と、小さな影が「いめぐ。
彼らは、己の企み事を実行している。

「なんじゅうじゅうせん！」

驚きに満ちた小五郎の悲鳴が毛利家に響く。

小五郎が目覚めると、彼はベッドの上に置かれた床のなし段ボール製の犬小屋にいたのである。

おまには前に運転感を思はると思つたから、運転らしさの心地は思つてゐる。

と、部屋のドアが開き、蘭とコナンが顔をのぞかせる。

その顔を見た瞬間、小五郎は悟った。

「おー。 パト-パト世ねーいの仕業だなー!? なんて」 いやがん

だが2人とも意に介しない。

「あ、いや、うつたのワンちゃん。」

「ずいぶん大きな犬だね」

「そうね、コナン君。危ないかもしだいから、近寄っちゃダメよ？」

?

「蘭ねえちゃんもだよ」

そんな2人の会話に小五郎はキレる。

「誰が犬だつてえ！？だ・れ・が！！」

しかし蘭はビシイツと小五郎に指を突きつけ言い放つ。

「お父さんがよ。決まってるでしょ？」

続いて、小五郎が口を開く前にコナンが言つ。

「おじさん、知つてるとと思うけど、玉ねぎ中毒を起こすのは犬や猫だよ。玉ねぎに含まれている成分が赤血球を壊しちゃうんだ。当然だけど、人間ではそんなこと起きないよね？だから昨日自分で『玉ねぎ中毒だー』って言つたおじさんは、人間じゃなくて犬か猫つてことだよね？」

またこのガキ、どこで仕入れたか知れない知識を・・・と、小五郎はコナンに食つてかかるうとしたが、間に蘭がいるためそれが出来ない。

仕方なく、小五郎はフンと鼻を鳴らすかわりに天井にむかって1声鳴いた。

「ワンー。」

小五郎犬（後書き）

普通、寝てる間に首輪付けられたら起きますよね・・・
まあ小五郎だから起きなかつた、つてことで！

実は「玉ねぎ中毒」発言は私の身内のものです。
しおりちゃん押し付けられました（・”・）
好きだからいいんですけどね

となり（前書き）

今回はシンゴ様のリクエストで、「今はまだ遠い、背中」の続きです。

大変長らくお待たせしました^__^

となり

「きやあ～～～！！」

幼い少女の悲鳴があたりにこだまする。

少女と、その連れの目の前に横たわっているのは、ぐつたりと四肢を床に投げだしている、体。

うつろに見開かれた瞳には、一切の光も感じられない。

悲鳴をあげたのは、吉田歩美。

そしてその連れはお馴染みの少年探偵団と阿笠博士だ。

事の始まりは、連休の始めに「どつか連れてって」と少年探偵団の面々が博士に頼んだことだ。

それじゃあ、と博士が選んだのは、山奥にあるバンガローだった。

そして今日、博士の運転で目的地までやってきた。

もつとも、車で来れたのは、ここから一キロほど離れた管理人の小屋までなのが。

管理人の小屋から歩いてきて、さあやっと着いた。とかなり息切れしている阿笠博士を最後尾に、借りたバンガローのドアの前に立つた時、コナンが気付いた。

鍵が、こじ開けられている、と

コナンが警戒しながらドアを開くと、真っ先に視界に飛び込んだのが、先の光景だ。

「おめー、うせ下がつてうー入つてくんよー。」

思わぬ事態に腰を抜かしている歩美・元太・光彦に叫ぶと、コナンは田の前に横たわる人間に近づく。

そつとその手首に手を当て、首をふる。

「ダメだ。もう」くなつてゐる・・・

「そんな・・・」

「とにかく、警察をよばねーと」

コナンはバンガローから外に出ると、未だへばつている博士に声をかける。

「なあ博士、うーひて電話あるか?見当たらねーんだけど」

「いや、なこやひじやよ。それにうーは携帯電話も圈外じやし」

その答えにコナンは少し考えて言つ。

「なら警察を呼ぶにはさつきの管理人の小屋まで行くしかねーか・・

・

そこでコナンは振り返ると、腰を抜かしたままの歩美たちに声をかける。

「なあ、おめー。わーいーなどちよつと博士とアトに行つて警察を呼んできてくれーか?」

「お、おひ」

「ええ、まあ。いいですけど」

元太と光彦は、突然のショックがまだ覚めないのか、すぐに承知した。

博士はと黙つと、

「そんな、わし、また歩くのか～？」

しかし、コナンはそれを無視して、

「歩美ちゃんは？」

先ほどから黙つたままの歩美に問いかける。
やつぱショックが大きかったのか、とコナンが考えていくと、

「コナン君は？いかないの？」

「え？ まあな。ここに誰もいなくなるわけにもいかねーし、現場も保存とかねーと」

予想外の質問に驚きながらも答える。
と、灰原が

「そうね、全員がここを離れるのは良くないわ。じゃあ私も残るう
かしら？ 1人になると誰かさんがまたムチャしかねないし、ねえ？」

「おまえなあ」

「じゃあ私も！」と残る。」

「えつー？」

いきなりの歩美の言葉にコナンと灰原が声をあげる。

「コナン君と哀ちゃんは、警察くるまでに調べ物するんでしょ？歩美もこじで、哀ちゃんと一緒にコナン君の手伝こする。」

「歩美、でも……」

先ほど、ショックを受けたはずの少女を心配して、コナンが止めようとする。
だが、

「やべ、それじゃあ畠田さんにも残つてもうこましうが、私とあなただけじゃ手が足りないかもしれないもの」

「灰原ー。」

OKサインを出した灰原にコナンが驚く。

「あー、いいじゃない？畠田さんがやつしたいって言つてだから」

「哀ちゃんー。」

ありがとー、と歩美が灰原に抱きつぐ。

それを見たコナンはしおりがない、とこつた感じで認める。

「あの～、僕たちは・・・」

おれおれおれ、と囁いた風に聞いてくる光彦に灰原が答える。

「あなたたちは、江戸川君が言つたよつて、博士と一緒に警察を呼んできちゃうだい」

「あ、はい」

わしも残る～といつ叫び声とともに博士たちが消えた後、コナン達は調査を開始した。

コナンは死体に触れ、硬直の度合を確かめる。

「もひ、全身が硬直してゐから、死後、半日はたつてゐな・・・」

「外傷は？」

「特にないな。ちょっと、俺、この辺を探して、この人がだれか、手掛かりになるよつたな物がないか探してくる」

そう言つと、コナンはその場をはなれる。

「ねえ、哀ちゃん」

「どうしたの、吉田さん？」

「ナン」と死体を見ながら会話を進めていた、灰原に歩美が聞く。

「硬直って、死後硬直のことだよね？歩美、この前本で読んだんだけど、どうしてそれで死んでからの時間がわかるの？」

『本で読んだ』、その発言に田を見張りながらも、灰原は答える。

「あのね、生き物は死んでしまつと、グリコーゲンが分解されて、乳酸をつくるの。そして汗が下がる。そしてそれに伴い筋源纖維タンパク質であるミオシンとアクチンが強く結合してアクトミオシンを生成し、筋肉は硬い状態になる。これが“死後硬直”ね。死後硬直は普通、死後2時間程度で、脳や内臓、頸や首から始まって、約半日で全身に広がるのよ。

江戸川君はそれを元に判断しているの

「なんか、難しい言葉がいっぱいだね。歩美、全然分かんないよ」

「やうね、吉田さんにはまだ難しいかもしれないわ。でも、時間を積めばきっとわかるようになるわよ」

「ホント？歩美でも、哀ちゃんみたいになれる？」

「・・・私みたいに、じゃなくて、江戸川君を目標にした方がいいわよ」

自嘲気味に答える灰原に、歩美が反発する。

「どうしてー？歩美はナン君も憧れだけど、哀ちゃんみたいになりたいのー」

「な、んで・・・・・？」

驚く灰原に、歩美はなおも叫ぶ。

「歩美は「コナン君の隣に立ちたいのーいつも背中に守られてばかり
だけどそれじゃ嫌なの。・・・」の間だつて、結局、コナン君に守
られただけだし。だから、歩美、哀ちゃんみたいにいつもコナン君
の隣で役に立ちたい！」

「・・・・・・・・・・」

数秒、灰原は沈黙すると、ゆっくつと一回、瞬きをし、口を開く。

「私は、別に、彼の隣に立つてゐわけじゃないわ・・・」

「えー？」

「傍から見ると、そう見えるのかも知れない。だけど、危ない場面
になると、彼はいつだつて私をその背中で守るつとする。だから私
は、いつも彼の隣にいるわけじゃないのよ」

けどね、と灰原は続ける。

「もし、吉田さんが彼の隣に立ちたいなら、立てばいいのよ。今は
そうでなくとも、いつか立てる日が来るわ。私も手伝つわよ？その
ために頑張つてゐんでしょう？」

「哀ちゃん・・・」

頑張ってるの、わかつてくれたんだ。と歩美は思つた。
やつぱり、哀ちゃんは私の事、わかつてくれるんだね、と。

そこへ、コナンが戻つてきた。

その手には、さつきまでなかつた赤いリュックが一つ。

「おい、その人、誰かわかつたぞ」

そこの林の中にあつたこのリュックに免許証が入つてたんだ、とコナンが告げる。

「そう、よかつたわね」

「あとは警察だな」

「元太君たち、まだかな?」

そう3人が話していると、

「おーい、警察呼んできたぞー！」

「元太君だ！」

その声に3人がバンガローから飛び出すと、

元太・光彦、それに管理人のおじさん、警官らしき人物。

そしてヘロヘロになつた阿笠博士がこちらに向かつてくるのが見えた。

事件終了まで、あともう少し

約束（前書き）

久方ぶりの更新。

今回は72巻、252の話のあと、コナンが帰宅してからの話

阿笠博士を誘拐した犯人が捕まり、事情聴取はまた後日、と云ひて、
ヒロコナン達はすぐに帰宅した。

「ただいま～」

もうすっかり日も暮れ、遅くなってしまった帰りにあせるあせるドアを開けたコナンは言ひ。すると奥から心配顔の蘭が出てきた。

「コナン君！ おそかつたじゃない！ こんな時間までいつたい何してたのよー？」

「う、ゴメンなさい。元太達と缶けりしてたらつい……」

馬鹿正直に『廃ビルの中で解体業者を装つた誘拐犯に遭遇しました』なんて言つと蘭が心配するとわかつたので、コナンはソソをついた。

すると蘭はやや呆れたような表情になり、

「も～、遊ぶのはいいけど、あんまり帰りが遅くなっちゃダメよ～。」

心配するでしょ～と云つ蘭にコナンは素直にい、と返事をする。
ヒロコと、蘭がコナンの頬に手をとめる。

「あら？ ロナン君、ビーフしたの？ ほつぺた」

ああそりだつた、とロナンは思ひ出す。
犯人目がけて蹴つたサッカーボールが、急に開いたドアに反射され
て自分に戻つてきたんだ、と。
これまた正直に言えないので、誤魔化す。

「ちよつとボールぶつけちゃつて……」

「ロナン君つて結構ドジよね。氣をつけのよ？」

蘭はそつまつと、救急箱をとつてきて、ロナンの手筋を始め。
そんな蘭に「ロナンはわざから氣になつていた」とを呟ねる。

「ねえ、オジサンは？」

てつくり帰つたら、腹を空かせた小五郎から拳骨を食ひつ、と思つ
ていたのに、小五郎の姿が見えない。

「お父さんなら出かけてるわよ。

・・・・ぞうせせづマ雀でしょつたど」

そつまつてゐる間に、蘭は鮮やかな手つきでロナンの手筋を洗つてゐ
る。

「そ、ロナン君、晩御飯にしましょ！
準備してくるから、手、洗つてきてねー。」

「はーー」

台所に向かいながら言ひ蘭に返事をしたコナンは、洗面所に向かつ。

手を洗つていると、電話の音が聞こえてきたが、すぐに止まつた。これからして、蘭が受話器をとつたのだろう。

手を洗い終えたコナンがちやぶ台の前に座り、蘭を待つていると、電話を終えた蘭がやつてくる。

その顔を見たコナンはギョシとする。

蘭の顔は、静かな迫力をたたえていた。

蘭はだれがどう見ても不機嫌だった。

そりやもう、台風並みの低気圧である。

そしてその怒りは、その田からしてコナンに向けられている。

「ら、蘭ねえちゃん……？」

「聞いたわよ……」

恐る恐る声をかけたコナンに、低い声で蘭は言ひ。

「な、何を……？」

まさか自分の正体ではないだろ？、と思いながらも、ビクビク訊ねるコナン。

そんなコナンに蘭は大きな声を出す。

「さつき高木刑事から電話できいたのよ！

「ナン君、今日廃ビルで缶けりしてて阿笠博士を誘拐した人に捕まつたんですつて！？」

「えつと、あの、その……」

「うう」とせそのまつべただって、その時怪我したんでしょ！？

「なんでウソなんかつくなー？」

だいたいどうして廃ビルなんかで遊ぶのよー。」

蘭のあまりの剣幕に、おどおどしながら答える。

「いや、ほつべきはボールがつけたのは本当だよ？
あのビルだって、まさかそんな、悪い人がいるなんて思つてなくて。
・
・
・

「じゃあ、なんでウソなんかついたのよ？」

冷ややかな声にびっくりとしながらも、コナンは口を開く。

「や・・・やの・・・」

「やのー。」

「ホントの事言つたら、蘭ねえちゃん心配すると思つて」

その瞬間、蘭のカミナリが落ちる。

「心配するに決まつてるでしょー？何考へてるのよー。」

ビクッと肩をすくめたコナンは、蘭の顔をみて言葉を失う。
たつた今コナンにカミナリを落とした蘭は、両目に涙をためていた。

「心配、するわよ・・・

でもね、本当の事言つてくれない方が、ずっと心配なのよ。

「アイツみたいに急にいなくなっちゃうんじゃないのかって」

「蘭、ねえちゃん」

「アイツがだれを指すかなんて、聞かなくても分かつた。コナンは情けなさに歯を食いしばる。」

「なにやつてんだ、俺……」

「新一^{アイツ}は心配をかけてばかりだから、せめてコナンだけでも心配をかけさせなこようとするべきだったのに……」

「それすら出来てないじゃないか、ヒコナンは自嘲する。」

「それでも、今、新一には出来なくても、コナンになら出来ること[…]が一つだけある。」

「コナンは自分の手を伸ばすと、ソレを実行する。」

「その小さな手で、蘭の涙をぬぐう。」

「コナン君……」

「わざかに驚き、じつらを見る蘭に、コナンは必死に伝える。」

「蘭ねえちゃん、大丈夫だから……」
「僕は新一にいちゃんみたいに、急に消えたりしないから……だから……だから……」

「心配しないで?と蘭を見上げる。」

「本当に？」

疑わしそうな眼差しで問つてくる蘭に、コナンはうなずく。

「うそ、本当に？」

「……約束してくれる？」

「うん、約束する」

それじゃ、指きりしましょ、と蘭が小指を差し出す。
コナンはその小指に自分のそれを絡ませる。

あとの文句は2人でそろえて言った。

「「ゆーび切りゲーんまん、ウソついたら針千本の一ますー・指切つたー！」

文句を言つ終えると、絡ませていた指を放し、そつと笑つた。

「じゃあコナン君、晩御飯にしようか？」

「うそー。」

そして2人は、いつもより遅い夕食を開始したのだった。

それは、2人だけの約束
守られるかどうか、それがわかるのは、まだ先の事

今夜は眠れない ～いびき～（前書き）

短い！

眠れないコナン君のお話

今夜は眠れない ～いびき～

午前2時、

グゴオ～、ゴオ～、と言つ音が部屋中に鳴り響いている。部屋、と言つ事は、家の中である。

強い風が洞窟に響いているわけではない。

音の出所は、この部屋の主、毛利小五郎である。

このビル風のような音の正体は、小五郎のイビキである。午前2時とは、どうがんばっても早朝とは言えない。深夜である。

世の中にはそんな時間でも起きている人はいるだろう。

追い詰められた受験生や、レポートの〆切間近の大学生、昼夜の逆

転した人間etc・・・

だが受験生もいない健康的な毛利家には、そんな時間に起きている人物はない。

ただ1人を除いては・・・

「・・・つづるせえ」

そのただ1人の人物、江戸川コナンは耳をふさぎながらぼやいた。彼は先ほどから一睡も出来ていない。

原因は、この部屋に響く猛獸・・・いや、小五郎のイビキ。この家に居候するようになつて数か月、

当初コナンは、毎日の様にこのイビキに悩まされていた。流石に最近は慣れてきたのだが、今夜のは特にヒドイ。

「・・・・・」

とうとう耐え切れなくなったコナンは、むくりと起き上るとタオルケット一枚を持って部屋をでる。

そして居間に行くと、そこにあつた座布団を3枚縦に並べ、自分はその上に横になる。

あとは持参したタオルケットを上からかければ、寝心地は良くないが、布団の完成だ。

幸い、今夜はどちらかと言えば暑い。

タオルケット一枚だからといって風邪をひくような事はないだろう。重要なのはここが魔の部屋じやないことだ。

これでやっと眠れる、とコナンが上機嫌で口を閉じたとき、彼の耳にはあの音が聞こえてきた。

グゴオ～、ガ～・・・

慌てて起き上がったコナンは、小五郎の部屋のドアを確認する。ドアは、しつかり閉まっていた・・・

それなのに、ここまで聞こえてくる、この音

「カンベンしてくれ・・・」

コナンは頭を抱えて、タオルケットをかぶる。

ふと時計をみると、午前3時。

どうやら今夜は、眠れそうにない

今夜は眠れない～抱き枕～（前書き）

眠れないコナン君のお話、第2弾
今回はどうして眠れないのでしょうか？

今夜は眠れない～抱き枕～

草木も眠る、丑三つ時、コナンは布団の中でそっと寝返りを打った。視線を真つすぐになると、正面にくるのは、少女の寝顔。

スースー・・・

眠れねえ・・・

かわいらしげ寝息の主を起しきなこようひ、コナンは小さくため息をつく。

少女は熟睡していて、ちょっととやせつとでは起きやつこもなかつた。

なぜ普段は別室で眠っている2人が、今日に限りてこんなに近くで横になつてゐるか、
それは、夕方にまで遡る・・・

昨日から休日であり、毛利家の面々は小五郎の運転するレンタカーで少し遠くの山まで出かけた。

そこまでは良かったのだ。

まだ暑さの残る最近でも、山の中は幾分涼しく、過ごしました。

「暑いことは海ってイメージだけじ、山も結構いいわねー。」

「うん、そうだね！」

蘭ねえちゃん、そこの川、水が冷たくて気持ちいいよ

「わ～、ホントだー気持ちいわねえコナン君ー。」

「・・・おめでり、ここ連れてきてやつた俺への感謝はどーした

ー。」

「はーはー、ちやんと感謝してますよ」

そんな風に3人で楽しく過ごして、夕方になつて『さあ帰らつか』と
帰路についた。

その途中で問題が発生したのだ。

「ねえ、お父さん、わざわざ走つてるの?。」

「なんか行きと景色がちがくない?。」

「ううせえー横と後ろからゴチャヤゴチャ言つてごじやねえー。」

焦つた顔で悪態をつぶ小五郎は、蘭と口ナンは疑わしげな視線を向ける。

「……もしかして、おじさん道分かんなくなりやつたんじゃない？」

「ちよつとお父さん…? おむかにんなどいか分かんこと」ハリで、迷つちやつたの!」

事実を指摘する口ナンと、聞いて詰める蘭に、小五郎は悲い顔をむける。

「だへ、お前らがゴチャヤゴチャ言つのが悪いんだよ。」

「私たちのせいじゃないでくれるー?」

と、親子喧嘩が始まつになつた瞬間、車がガクンと止まる。

「まさか……」

口ナンが車を降つて確認すると、案の定タイヤがパンクしていた。慌てた小五郎が携帯を確認すると、圏外であった。しかも、スペアのタイヤがない。

「しょーがねえな、今日は車で野宿するしかねえな

「えへ、嫌よー」こんな山中で野宿だなんて、お化けでもできたらどうするの?」

「そん時は空手でどうにかしら」

「お化け相手に空手が通じるわけないでしょー。」

「ねえ」

小五郎と蘭のやり取りに、コナンが口をはさむ。どうしたのか、と親子2人がコナンを見ると、

「あそこには明かりが見えるよ? 行つてみない?」

と、コナンが指さした先には確かに明かりが一つ。それなりに大きいから、街灯がポツンとある、というわけでもなさそうだ。

そこにあるのは、古びた、しかし大きな和風の家だった。

毛利家の3人はすぐさまその家にむかい、家の住人になんとか泊めてくれるよう頼みこんだ。

幸い、相手は“眠りの小五郎”を知っていて、快く承諾してくれたのだが、

夜、眠る前に家政婦が余計なことを言つてきた。

「本当に大変でしたね、道に迷った挙句、パンクまでしちゃうなんて」

氣さくに行つてくる若い家政婦に、蘭とコナンが答える。

「はい、ありがとうございます。」

もう一時はどうなるかと思つて・・・」

「ううに泊めてもらえなかつたら、野宿だつたもんね」

コナンの口から出た『野宿』の言葉に家政婦は眉をひそめる。

「まあ、それはいけませんよ。

このあたりで野宿だなんて・・・」

「クマでもでるんですか?」

「いいえ、クマなんて可愛いものじゃありません。実は・・・」

と、その先、家政婦が語った話に蘭がおびえる。

その話とはこうだ。

このあたりには昔、人食い鬼が住んでいて、山中を通る人間をよく襲つていた。

人食い鬼は特に若い女人の肉じょにんが大好物で、それは酷い食べられ方をしていた。

そしてある時、その話を耳にした高名な僧が、その鬼を退治した。だが、その後も時々、山中で人が行方不明になり、無残な姿で発見される。

ソレを見た人々は、こう噂した。

『僧の退治した鬼が幽靈になつてもなお、人を襲つているのではないか』と。

だからこの辺には、住む人があまりいないし、この辺の家の門には鬼除けのお札が貼つてあるのだ、と。

「でもまあ、昔話ですから・・・

気にせずゆつくりお休みになつて下さいね」

そつ言い残し、家政婦は去つて行つたのだが、蘭の齎え様はすさまじかつた。

「び、び、び、よ、鬼が来たら……」

「おこおこ、本当にこの世に鬼なんているわけねーだろ?」

「大丈夫だよ、蘭ねえちゃん」

しかし齎えきつた蘭は、何を考えたか、いきなりコナンの布団にもぐりこんできた。

「え、ちゅうと、蘭ねえちゃん!-?」

「コナン君、さっきの話怖かつたでしょ?」

怖いわよな、だからお姉ちゃんが一緒に寝てあげる

それじゃあおやすみー、と自分のすぐ横で眠つてしまつた蘭を、コナンは驚きの目で見ると、布団からはいだして、隣の、本来は蘭が寝るはずだった布団まで行こうとする。

が・・・

すでに熟睡モードに入った蘭の手は、コナンのパジャマ(家の人に借りた)の裾をしっかりと握つている。

観念したコナンはそのまま自分も眠らうとした。だが、

寝れねえ・・・

なんせ、1つの布団を2人で使つてゐるのだ。

当然、2人の距離も力ナリ近い。

好きな女の子の寝顔が間近にある、というのは健全な高校生男子には刺激的なもので、ドキドキして眠れないのである。

いや、とにかくなんとか寝るんだ

もう「コナンが寝ようとした時、

「ん、い、ん、・、・、・、」

小さな声をあげた蘭が、コナンの体を、その両腕で抱き寄せた。

111

驚きのあまり、ロカシは舌を出せずにいる。

心拍数もエントリー上がり物である。

だが、蘭はぐっすりと眠っていて、田を覚ます気配がない。

それどころか「ナン」という抱き枕を得て、ますます快眠状態である。

それと正反対に、コナンの目は余計に冴えてしまつた。

「ナナ、今夜、一睡もできなさそうだ。」

今夜は眠れない ～小説～（前書き）

眠れないコナン君のお話 part 3

今回は“眠れない”というより、“眠らない”ですが・・・

パラリ、

深夜、毛利探偵事務所の1室、家主である小五郎の寝室に響いた軽い音は、その部屋の主がたてた音ではない。

探偵事務所に居候している、小さな少年のだしたものだ。

その居候の少年 江戸川コナンは、もう日付もかわり、夜も深まつたというのに、パチチリと目を覚ましていた。

普通の子供が起きている時間ではない。

そして今回は、小五郎のイビキがつるさくて眠れていない、と言つて訳でもない。

にも関わらず、コナンが起きている理由はただ一つ。

本日、いや、もう昨日のことだ。

昨日発売された推理小説、新名香保里の新作、『探偵左文字』の犯行～』。

その本を早速買ったコナンは、すぐにでも読もうとしたのだが、帰宅後、読み始める前に急に事務所に依頼が舞い込み、『家族全員で来て下さい』と言つ依頼人の要望のため、読み損ねた。

依頼人の家から帰るともう11時を回つており、入浴を済ませると同時に蘭に早く寝るよう促された。

もちろんコナンは、買つたばかりの小説を読まずして眠る、なんて気は毛頭なかつたので、ひとまず寝たふりをしその場をしのぎ、家の者全員が寝入つたころ、布団から起き上がった。

起き上がったその後は、卓上ライトを小五郎の机から押借すると、

その明かりの下、読書を開始した。

読書好きとはたいていそういうものだが、小説をいつたん読み始めると止まらなくなるのは口ナンも同じだった。

あつという間に小説の内容にはまり、時間が経つのも気にならなかつた。

そして、新刊を読み終えると、それだけでは止まらず、以前買った本も読み返しだした。

いつもなると、いつも止まらない。
口ナン自身にも止められない。

いつも今晩は、口ナンは眠らない。

(「口ナン」とひいて) あつという間に一夜が過ぎ、気がつくと、朝の爽やかな日差しが部屋に差し込んでいた。

寝不足の1日が始まる。

チヨ パルマー・ラッセル（繪書家）

またもや季節感マル無視な話。
ホワイトラーの前日、ロナンがお返しのチヨ パ作りに挑戦。

3月1-3日の毎過ぎ、江戸川コナンは居候している毛利家の台所に立っていた。

小五郎は仕事で夜遅くまで帰つてこない。

蘭は夕方まで部活の練習だ。

つまり、今の毛利家にはコナン以外の人物はない。

コナンが自らの計画を実行するにはちょうど良かつた。

「コナンの計画 それは明日のホワイトデーにバレンタインのお返しとしてチョコレートを作り、蘭に渡すといつもの。」

“新一”としてはもうすでにお返しの準備は終わっていたが、“コナン”が新一と同じように大そうな物をあげるわけにはいかない。

小学生が贈るものとして、不自然でないものを選ばなければならぬ。

考え抜いた末、決めたのが『手作りチョコレート』である。

と言つても、料理が苦手なコナンにはトリュフや生チョコ、フォンダンショコラといった洒落たモノは作れない。

作るのは、板チョコを溶かしてハート型に固める、といふいたつてシンプルなものだ。

材料も買ひこんだし、さあ、開始しよう、とコナンは腕まくりをした。

（数時間後）

コナンは困り顔で台所に立っていた。
チョコを溶かす、という簡単な作業のはずなのに、上手くいかない
のだ。
何が起きたかと言えば、何回挑戦してもチョコレートが焦げてしま
つた。

チラ、と材料の入ったビニール袋に視線を向ける。
あんなにあつた板チョコはあと2・3枚しか残っていなかつた。

じつじよづか・・・

台所じこりか、家中に漂う甘い香りの中、コナンが思案していくと、
その耳に玄関のドアが開く音が届いた。

「ただいまー！コナン君」

明るい声は蘭のものだ。

「コナン君、お腹空いたでしょ？
待つててね、今ご飯作るから・・・つてあらー？」

強く香る甘さに気がついた蘭が怪訝な顔をしながらコナンのところ
までやって来た。

コナンは慌ててチョコレートの残骸入りの鍋を隠そうとしたが、一

足遅く、蘭に見つかってしまった。

「コナン君につけたい何やつてるの？」

鍋に焦げ付いたチョコレートにやや顔をしかめながら蘭が聞く。
言い訳の使用がないので、コナンは仕方がなく白状する。

「えっとね、明日、ホワイトデーでしょ？
だから・・・僕・・・」

「歩美ちゃん」と哀れちゃんにでも體るの？

チョコを體る相手が自分だとは思っていらない蘭にたずねられて
首をふる。

「ひりん。蘭ねえちゃんにあげたかったんだ」

「え？」

「こないだのバレンタイン、蘭ねえちゃん、僕にもチョコレートく
れただしょ？
すっじくおじしかったから、だから僕も蘭ねえちゃんに作つてあげ
たかったんだけど、うまくいかなくって・・・」

と、指で鍋を指したコナンは少しだけうなだれていた。
蘭はそんなコナンを見て優しく微笑む。

「なんだ、そうだったの。ありがと、コナン君！
コナン君の気持ち、嬉しいな」

そう言いながら鍋をつかむと、背を曲げて目線をコナンに合わせた。

「でもね、コナン君。これだけは知ってなきや。

チョコレートは湯煎しないと！直接火にかけたら「ジギチャウのよ？」

そう、なぜコナンが何回も失敗したか、それはチョコレートを直接鍋に放り込み、そのまま火にかけたからだった。

「へ？」

一瞬、キotronとしたコナンは次の瞬間赤くなる。
己の失敗の理由を悟ったのである。

真っ赤になつたコナンに明るく笑いかけた蘭は、シンクの下からもう一つ鍋をとり出し、

「じゃあ一緒に作ろつか！」

それから一時間後、毛利家のテーブルには綺麗なハート型のチョコレートと、ちょっとといびつなハート型のチョコレートが仲良くなっていた。

シャワー（前書き）

試験前最後の投稿

次回はおそらく来週の金曜日の夜、または土曜日になるかと・・・

蘭は窓の外を見てわずかに顔をしかめた。

外はものすごい雨と風である。

おまけに今日は傘を持ってきていなかつた。

朝は晴れていて、雨が降る気配など微塵もなかつたのだ。

学校の玄関口でしばらく様子を見てみたが、雨がやむ様子はない。父、小五郎は今日は友人と麻雀をすると言つていたので迎えは期待できない。

最も、あの小五郎に迎えを期待すること自体が間違いなのだが・・・

仕方がないので濡れて帰るか、と決意して歩きだそつとしたその瞬間。

「蘭ねえちゃん」

聞きたなれだ、幼い声が蘭の耳に届いた。

その声のした方へ顔を向けるとそこには

「コナン君! どうして高校に?」

弟のように可愛がつている少年が立っていた。

小さな子ども用の青い傘をさしたその反対の手には大きな赤い傘。いつも蘭が使つているものだ。

それを見た蘭は悟る。

コナンが高校まで来た訳を。

傘を忘れた自分の為にわざわざ来ててくれたのだと。

この強い雨と風の中、小さな体では大変だったろうに・・・。もつ薄暗いのでわかり辛いが、よく見ると体のほととぎがぬれている。

小さな体では強風にあおられるままで、傘もあまり役に立たなかつたのだろう。それでも自分の為に来てくれた、と喜びながら蘭は「ココと笑うと手を差し伸べる。

「ありがと、コナン君ーそれじゃあ一緒に帰ろつかー！」

「うんー。」

元気よく返事をしたコナンと手をつなぎ、2人仲良く帰路についたのだが、その道のりはやさしいものではなかつた。道全体が川の様になつており、どんなに注意して歩いても結局靴の中まで濡れていつた。

大粒の雨は横殴りで、頑張つてさしている傘も甲斐なく体も濡れた。特に強い風は傘をひっくり返し、コナンに至つては蘭と手をつないでいなければそのままどこかへ飛ばされただろう。

苦労しながら探偵事務所に帰りついた蘭とコナンだが、その頃にはすっかり濡れてしまつていた。

まさに濡れ鼠とはこのこと。

頭のてっぺんから足のつま先までびしょぬれである。

「じめんね蘭ねえちゃん。傘持つてきたのに結局濡れちゃつて」

「うん。コナン君こそわざわざ来てありがとね」

申し訳なさそうに謝るコナンに蘭は首をふると靴を脱いで立ち上がる。

「よし、コナン君。シャワー浴びるわよ

「えー？」

「『えー?』じゃなくて、シャワーよシャワー！

お風呂入れてたらその間に体冷えちゃうし、コナン君、風邪治つたばかりじゃない！」

「ほ、僕はあとでいいよー蘭ねえちゃん、先に入ってきなよ

「ダメよーほら、入るわよー！」

真っ赤になつてじたばたもがくコナンを捕まえた蘭は、手早く着替えやバスタオルを準備すると風呂場へ直行した。

その後、

「ほりコナン君ー風邪ひくから大人しく浴びなさいー。」

そんな蘭の声とコナンの声が毛利家の風呂場に響いていた。

シャワー（後書き）

台風、すこし雨と風でしたね

あの中をバイトに（歩いて）出かけたため、傘が壊れました。

高1の時から使っていたものだったのですが・・・

見事に骨が折れまくりまして・・・

実際にずぶ濡れになつたのは私です（^v^）

スーツも靴も完全に濡れました。

寮母さんもびっくりな濡れ具合でした。

お陰で風邪ひいた氣がするのですが、あと1週間は気が抜けません

ね。

それではまた来週

ウーラと馬のしつぽ（前書き）

天国へのカウントダウンの後、大阪で

ウエーブと馬のしつぽ

「なあ、平次、コレ見てみ！」

和葉はそう言つと田の前にいる男に携帯をつきだした。
画面に映つているのは、東京にいる2人の友人だ。
いつもよりお洒落な格好をした彼女たちは仲良く肩を並べて笑いあ
つてゐる。

1人はお馴染みの少女。

黒いロングヘアが特徴の蘭。

そしてもう一人は、

「ん？なんや、コレ、鈴木のねーちゃんか？」

蘭と一緒にいる茶髪の少女といえど、園子だろ。

が、いつもの彼女とは少し、いや、かなり違つた。

いつもはヘアバンドでおでこをむき出しにしたヘアスタイルなのだが、この写真はそうしていない。
その代りに、

「園子ちゃん、ウエーブかけたんやつて！
パーティの間だけで、またもとに戻しちゃつたらしいんやけど」

「へー、それで？それがどうしたんや？」

この変化が蘭のものだつたら、ソレをネタに彼女の傍にいる新一をからかえるのだが、そうでないのなら別に興味がない、と言つた風に反応する平次に和葉が頬を膨らませる。

「なんやもー、他に言つてないん？」

つまらない、と机に向かって机に向いた和葉は平次を放置しありためて携帯の画面を見やる。

「」の写真の園子ちゃんかわええな
いいな、アタシもウーホーブ、かけてみよかなー」

そう和葉が独り言を言つた時、

「やめや」

「はー？」

平次の唐突な言葉に和葉が聞き返す。

「和葉、おまえはウーホーブなんてかけんくていいや」

「な、なんでや？」

「別になんでもやー」

とにかくダメだ、と言い張る平次。

もしかして、今の髪形の方が平次の好みなんやうつか、と思い、

「平次、アタシ、今のまんまの方がええ？」

少し期待しながら聞くと、返ってきたのは

「ああそうや。お前みたいなじやじや馬は馬のしつぽのがいいやん！」

その言葉に、

和葉はやや頬をそめたまま一瞬かたまり、次の瞬間

パツチーンッと乾いた音と、

「平次のアホ！」

そんな声が服部家の1室から飛び出していく。

ウエーブと馬のしつぽ（後書き）

和葉はポニー・テールが似合いますよね

朝起きると、どうにも体の調子が悪かった。

頭が重く、ボーッとするし、時折、目まいの様なものもある。

良く考えてみれば、昨日の夜からその前兆はあった。

それでもまあ、少し頭痛がするかな、と言った具合だったのだが・・・

それでもコナンは布団から起き上がるともぞもぞと着替えをし、顔を洗うと蘭のいる居間へとむかう。朝の早い蘭はもつすでに朝食を作り終え、ちやぶ台に並べていろとこなだつた。

蘭は起きてきたコナンに気づくと、

「あら、おはよう。コナン君」

「おはよー蘭ねえちゃん」

「ねえ、お父さん起きていてくれる?」飯冷めちゃうから

「うん、いいよ。今日は焼き魚なんだね

今朝の朝食のメニューは雑穀を混ぜたご飯、豆腐と葱の味噌汁、そしてサバの切り身という和風なものだった。ちやぶ台の中央には昨夜出たほうれん草のお浸しの残りもある。

「やつよ、コナン君、サバ嫌いだつたっけ?」

「ううん。僕、サバ好きだよ。じゃあおじさん起^{ハシ}してくるね」

ボーッとしたコナンの表情が、気乗りしない様に見えたのか、少し悲しげに聞く蘭に慌てて否定すると先ほどまで自分も寝ていた寝室へと入つていく。

そこで『ヨーロちゅわ~ん』など言いながら鼻の下を伸ばし、涎を垂らして眠る小五郎を揺り起こすとまた居間へと戻る。夢から覚まされてふて腐れている小五郎が身支度を整えて席に着けば朝食の始まりだ。

だが、コナンの箸は一向に進まなかつた。段々と頭の重みが増してきて、グラグラする。いつもはおいしく食べられる蘭の手料理なのに、今日は味が全く分からぬ。それどころが油断すると込み上げてくる吐き気^{トキ}に負けてしまいそうだ。

「お父さん、今日は何か依頼はあるの?」

「ああ昨日の夕方きた依頼人の家に行つてくる。どうも遅くなりそつだから夕飯は勝手に食つてていいぞ!」

「そんな事言つてまだどこかに飲みに行くんじゃないでしょ?」

「?」

「今日はちばーよー少^シは父親を信用しろつてんだ!」

蘭と小五郎のしているそんな会話も理解することが出来ない。周波数の合わないラジオの様に音が聞こえなくなつたり、大きくなつたりする。

(やべ、耳鳴つまでしてやがる……)

キ ンといつ甲高い音に顔をしかめていると蘭の顔が田の前に現れた。

「コナン君どうしたの？あんまり食べてないみたいだけど、やつぱりサバ、いやだつた？それともおいしくなかつた？」

「い、いや、そんな事ないよ、おいしいよ」

「ふん！居候のガキが、好き嫌いなんて言つんじゃねえ！」

否定したコナンに、それでもまだ何か聞きたそうな顔をしていた蘭だつたが、食事を終えて出かけるために準備を始めた小五郎の言葉に鬼の形相になる。

「ちょっとーお父さん！何よその言い方、コナン君がかわいそうでしょー？」

「つむせえな、ガキが好き嫌いなんてしてたらテカくなれないんだからいいだろー！」

父娘でギャアギャアといながら居間を出していく。

小五郎が出かけるので、蘭は見送りにたつたのだ。

いつもは蘭やコナンの方が先にでかけるのだが、今日の依頼はかなり早いらしい。

しかし、今のコナンにはそんな事を気にする余裕はなかつた。先ほどの2人の声が大きすぎて、頭にガンガンと響く。

「・・・つづく・・」

内側から突き破るような頭の痛みに加え、吐き気がまた酷くなり、うめき声をあげたコナンは箸をとり落とす。と、そこへ蘭が戻ってきた。

「またくもー。『めんねコナン君。あんなお父さんで

まだ小五郎に対してもやさながらコナンの方を見た。コナンのわきに落ちてこむ箸に氣がつくとそれを拾い上げる。

「あらコナン君、お箸落してるわよ・・・」と「コナン君ー?」

箸を手に取りコナンに話しかけた蘭はやがて異変に気がつく。

顔色が、悪い。やつれまだよりもっと蘭はとつとコナンの額に手をあてる。気持ちの悪い汗でぬれたそれは

「やだ、すごい熱ー調子悪かったのー?」

そう言しながら蘭は急いで体温計を取りに走る。

その様子をぼやけた視界にとらえながら、コナンは意識を失った。

体が、熱い。

気分が悪くて、何も食べてないのに吐いてしまいそうだ。

一体、自分はどうしたのか。

ひつきりなしにする耳鳴りのせいで思考がまとめられない。

熱のせいか、体の節々が痛む。

そんな、激しい苦しみの中、

額にヒヤリ、とした感覚が訪れる。

ひんやりと冷たくて気持ちがいいのに、どこか温かくて落ち着くソレに苦痛が少し和らぐ。

そのわずかな安らぎをきっかけに、ようやく落ち着いた眠りへと入る。

数時間後

再び、遠慮がちに触れられたあの落ち着く感覚にコナンは目を開けた。

「・・・・？」

目を開いて、まず映つたのは、

「コナン君と一緒にしゃべった? どう、体は? 大丈夫?」

その手を自分の額に近づけて心配そうにのぞき込む蘭の姿だった。
ところがこの感覚の正体は、蘭だったのだ。

「へ、んねえ・・・ちやん」

声がかすれて上手く出ない。

一体何があったのだ? とコナンが疑問に思つてるとそれが顔に
でたのか蘭が答える。

「覚えてない? コナン君、朝ごはんの後倒れたの。
すごい熱なんだもん。びっくりしちやつた。
いつから具合悪かったの? 我慢しちやつためよ?」

言いながら、コナンに体温計を渡し、検温させる。
コナンが体温計を脇に挟んだのを確認すると今度は冷えピタを準備
する。

そんな蘭の様子を見ながらコナンは訊ねる。

「蘭ねえちゃん・・・今日、学校は?」

時計を見ると、今は毎の1時過ぎ。通常は学校にいる時間だ。
なのに家にいる、ところがこのまま・・・

「今日はお休みしたのよ。あ、小学校にもちやんと連絡したから大
丈夫よ、気にしないで」

ピピピピッといつ電子音とともに検温を終えた体温計をコナンから
受け取りながら事もなげに蘭が言う。しかし、コナンとしては

「僕のことじやないよ！蘭ねえちゃん、僕のせいでお休みしたの！？」

自分のせいで高校を休ませてしまふなんて、と悔しい気持ちだつた。コナンのそんな気持ちを解しないのか、蘭は体温計の示した体温を見て眉をひそめる。

「39・3・・・少し下がつたけどまだまだ高いわね。病院行つた方がいいかな？」

「そんなのどうでもいいよ！ねえ、蘭ねえちゃ・・・つゲホッゲホッ・・！」

無理に声を上げてせき込むコナンを見て、蘭がコナンと視線を合わせる。

「コナン君。コナン君は学校か、私が、つていつたら迷わず私の事を優先してくれるでしょ？」

私だつて同じなんだよ。私はコナン君が大事。だからコナン君は『僕のせい』なんて気にしないで早く元気になつてくれればいいの

「でも・・・・」

「でも、じゃないの！ほら、病人は大人しく寝なさい！あ、そうだ、ご飯、食べられる？お粥、作つたんだけど」

ついにコナンは抵抗を諦めて大人しく布団に横たわる。

そして最後の質問の答えにはゆっくつと首をふる。まだ、何かを食べることはできそうもない。

「そつか・・・それじゃあまだお薬は飲めないね。ポカリは?飲める?せめて水分補給しなくちゃ」

そう蘭が差し出したペットボトルを受け取ると、コナンは少しだけ身を起してそれを口へ運ぶ。

高熱で汗を流し、失った水分を体が求めている。飲み終えると、また横になる。

蘭はそんなコナンの様子を確認するとコナンのおでこに冷えピタを貼ると、安心させるように優しく微笑んだ。

「おやすみ、コナン君。いっぱい休んで早く良くなつてね」

そう言つと最後にコナンの頬をそつとひとなでした。その手の感覚の心地よさにコナンは再び安らかな眠りへと落ちていった。

次に目覚めた時は、熱ももつと下がっているだひつ。

優しい手（後書き）

10月1日は手負いの日ーだそうで・・・
それに合わせて書こうとしたら間に合いませんでした oren
風邪ひき口ナランと看病する蘭。

でも、私は手負い大好きなのですが、自分じゃまともに書けないの
で難しかつたです ^ ^ <

遊園地ー 1 (前書き)

あ～ネズミーランド行きたいかも・・・

10月のある秋晴れの日のこと

蘭とコナンは鳥矢町に新しくできたアミューズメントパーク『鳥矢ドリー・ミーランド』に来ていた。この間の日曜日に、蘭が持ち前の強運を發揮して、福引きで特賞の『鳥矢ドリー・ミーランドペアチケット』を当てたのだ。

蘭は最初、園子と行こうと考えたらしいのだが、園子と蘭、2人の都合がなかなか合わず、2人の予定の合つ日にはチケットの有効期限が切れてしまう、と言つことだつたので、園子を誘うのを諦めた。

『じめん、蘭。じゃあ今日はバス。あの遊園地、ウチも少しは建設に手を貸してるからいつでも行けるからまた今度いこうね』

諦めたのはいいのだが、そこからが問題で、それじゃあ今度はだれを誘おうか、となつた。

そう、それこそが大問題だつたのだ。

蘭は当初、真っ先に園子を誘つた。

鈴木財閥の令嬢なら、このようなチケットなどなくとも、いつでも好きな時に行けると分かつていながら。

なぜなら蘭の本当に誘いたい人は・・・新一は、いないから。

“厄介な事件”に関わっていると言い、たまにふらつと姿を見せるだけであとは電話だけ。

そんな相手など、誘えるわけがない。

誘つても、「行けない」と言う人間など・・・

(だから、園子に声をかけたのに……)

園子との電話を切った後、蘭は夕日の差し込む自室で深いため息をついた。

なんだか悲しくなってきて、涙が出てきそうだった。

「バカだな……こんなことくらいで泣くなんて」

そつと言った独り言が、蘭以外誰もいない部屋におちる。蘭は、その独り言は誰も聞いてないと思つていた。

しかし、聞いている者がいた。

聞いた人物はわずかに開いたドアの向こう側で物憂げな顔をしていた。

コナンだ。

コナンは蘭と園子の電話を聞いていたわけではない。だが、先日の福引き、その後の蘭が園子と何回か電話をしてしたり、朝、登校中にも何か話している様子。また、先ほどの蘭の咳きから何があつたのかは安易に想像できた。

悲しい思いをさせているのが新一^{じぶん}であるといつことも。

(結局俺はアイツのこと、泣かせてばっかだな)

最低だな……そう自嘲しながらドアの前で佇んでいると、唐突にそのドアが開かれた。

「あら？ コナン君。 どうしたの？ 私の部屋の前で。 何か用？」

「わー、蘭ねえちゃん、え・・・いや、その・・・何でもないよ」

いきなり蘭が現れたので、慌てまくつたコナンは意味もなく両手をバタバタさせ、あやふやなことを囁く。しかし蘭はそんなコナンの不審な挙動には気にも留めずに、

「あ、そうだ！ コナン君。 よかつたら今度私と一緒にドリーミーランドに行かない？」

「へ？」

「ほら、私、この間の福引きであそこのペアチケットあてたでしょ？ 園子と行こうかな、とも思つたんだけど予定合わなくてね。それでコナン君が一緒に行ってくれたら嬉しいなあって」

「あ、あの新一にいちゃんは？」

そう言つた瞬間コナンは内心で口を毒づき、激しく後悔した。 よりにもよつて自分がその名前をだすなんてどれだけバカなんだ、 と。

案の定、蘭の顔が曇る。 だがそれは一瞬の事ですぐに明るさを取り戻すと言つた。

「いいのよ！ あんな大バカ推理ノ介なんて！ 遊園地よりも事件が好きなヤツと行つたつて面白くないものー！ アイツなんかよりもコナン君と行つた方が断然楽しいわよ。 ね、ダメかなあ？」

随分と言えば随分な言われよう。コナンは瞬間、絶句するも最後の方の蘭の甘えたような、おねだりする時の顔と声にやられてしまう。

「ダメじゃないよー。僕も蘭ねえちゃんと行きたいなー。」

「ホントに? コナン君はここの子ね。あつがとー。」

「僕と蘭ねえちゃんとデートだね」

最後にコナンがいたずらっぽく言ひ加えると、蘭も心底楽しそうな顔に変わった。

「もう、コナン君ったら、マセてるんだから」

こつして2人の遊園地行きが決まった。

遊園地！ 1（後書き）

遊園地編は次回にします。

遊園地ー 2 (前書き)

わ〜、すみません！
ものすごい聞が空きました！

ドリー／＼一回三度に着くと、蘭とコナンはペアチケットをホントラ
ンスで提示し、中に入る。
ここから、2人のデートの始まりだ。

「コナン君ー! まやは何にする?」

「うーんとねえ・・・あ、ジェットコースターに乗りたいな!」

「ジェットコースターか。結構たくさんあるね。じゃあコレコレ
よつかな」

蘭は入り口で渡されたマップを見ながら歩きだす。
が・・・

「よし、コレだよー!」

「・・・蘭ねえちゃん、これはヴァイキングだよ?」

巨大な船のアトラクションの前でビービービーと叫ぶ蘭にコナンが
冷静に告げる。

呆れているのか、コナンの額には汗が流れている。

「えつ、あれ! ?」

ちやんと地図通りに来たはずなのに、と慌てふためいている蘭に手

を伸ばす。

「蘭ねえちゃん、地図貸して。僕が見るから」

「・・・コナン君、私の事方向音痴だと思つてるでしょ？」

「そんな事ないよ。ほら、どのジエジットコースターに行いつつと思つたの？」

内心ではあたりめえだろ？等と思いながらもそんなことは顔に出さずに受け取ったマップを見ると、蘭の指した指先を見て言葉に詰まることになる。

そこに書かれていたのは、

『夢と希望の力エルさん「コーラスター』

小さなお子様でも乗れる安心設計！と書かれているそれは、明らかに子供むけのものだった。

また、蘭がコナンを子供扱いしたのだ。

（なんで高2にもなってこんなガキっぽいのに乗んなきやなんねー
んだよ・・・
つーか、夢と希望のカエルさんってなんだよー）のネーミングセンス
は！？）

遊園地の名前がドリー＝リー、だからだろ？
か。 ただしも、やはり意味がわからない。

「ね、ねえ。ホントにこれに乗るの？」

他にもなんかいいのがあるだろ？、そんな想いをこめて訊ねると蘭はそれを知つてか知らずか、あっさりと肯定してくる。しかも、満面の笑みで。

「うんー、うんよ。コナン君ー、うの、好きでしょ、う。」

好きなわけねーだろ、とこの時コナンはびんにしついたかつたことか、だが彼はそれを我慢して、蘭と共に『カエルさんコースター』の所まで歩を進める。

「着いたよ」

「わー、可愛いね！」のジヒットコースター。
じゃあコナン君乗つておいでー。」

かわいらしい、いかにも子供向けに作られた外見のジヒットコースターを見て歓声をあげた蘭はコナンに手をふる。慌てたのはコナンだ。

「えつ、蘭ねえちゃんは乗らないの？」

「うん。だつて高校生わたしが乗つたらちょっと恥ずかしいかなって」

「・・・・・」

もはや反論を頭の中でだけ言つのすら諦めたコナンは黙つて列に並ぶ。

本当に小さい子ばかりで、小学一年生のコナンですら大きい方の列

だつた。

幸い、待ち時間は短くすぐに順番が来る。

「どう? 楽しかった?」

「……うん。 楽しかったよ」

「コニコ」と聞いてくる蘭に抑揚のない声で答えると、今度は「ナン」が次のアトラクションを決める。
さあ、どれにしようかな、とマップを見ると、ソレを見つけた。ニヤツとあやしい笑みを浮かべた「ナン」は

「蘭ねえちゃん! 次はココに行こう!」

子供らしく、無邪気に言いながら蘭の手を引っ張つて目的地に向かう。

10分後、

「ちよっと「ナン君」にお化け屋敷じゃない!」

「ちうだよ。 蘭ねえちゃん好きでしょ? ほり、並ぼうよ!」

逃がすものかとばかりにがつちつと蘭の手を掴み、列に並ぶ。

数十分後、蘭の悲鳴が遊園地全体に轟いた。

「もへ、コナン君のいじわる~」

その後も2人は田一杯、ドリームーランドを楽しんだ。
コナンでも乗れるようなジロットコースター（カエルさんコースターではない）に乗ったり、コーリーカップでぐるぐる回ったり。
蘭がお化け屋敷の仕返し、と恥ずかしがるコナンと一緒にメリー「ランドにも乗った。

楽しい時間とはあつとこゝ間に過ぎてしまつもので、気がつけばもう閉園間際だった。

「コナン君急げー。閉まつねやつー。」

お土産屋さんで園子や小五郎へのお土産を買つた蘭は、同じく灰原や少年探偵団のお土産を買つたコナンを引っ張る。
周囲の人々も出口へと向かっていく。

園内を出る際、蘭が今日、入る時に見せたペアチケットを係に渡す。
実は、このペアチケット、出る時に見せると限定アイテムがもらえるのだ。

「ペアチケットご利用のお客様ですね。本田は鳥矢ドリームーランドにお越し下わつ、誠にありがとうございます！それでは、じゅうが限定アイテム、『星の夢』でござります」

そつ渡されたのは、2つ繋べと墨が出来る、銀色のストラップだった。

蘭は外に出ると、嬉しそうに早く携帯につけてくる。

「はい、これは「ナン君の分ね」

自分の分をつけ終えると、墨の切割れを「ナン」に差し出す。しかし、「ナン」は中々受け取らな。

「「ナン君? いらないの?」

不思議に思つた蘭が「ナン」の顔をのぞき込む。目が合つて、「ナン」が口を開いた。

「・・・つていいの?」

「え?」

何を言つたのか、よく聞こえなかつた蘭がもう一度聞き返す。

「僕が「」をつけてやつてもいいの?」

予想外の言葉に蘭が目を丸くする。

「どうして? つかちやいけない訳ないじやない

何故、そんなことを「ナン」が言つのか心底理解できず、蘭は不思議顔だ。

「ナン」が小さく囁く。

「だつて・・・蘭ねえちゃん、ホントは僕より別の人とこのストラップ付けたかつたんじやないかなつて・・・新一兄ちゃんとか」

それを聞いた途端、蘭が笑いだす。

あんまり大笑いするので、前を歩く人が何事かと振り返る。

「なんだ、コナン君たらそんなこと気にしてたの？ほら、言つたじやない！私は新一より、コナン君とココに行きたつて！ね？だから新一のことなんて気にしないで、それ付けよつよ。私とコナン君とでお揃い！」

今日2人だけで出かけた記念だよ、と蘭はコナンに微笑みかける。それを見たコナンもようやく笑顔になり、ストラップを自分の携帯に付ける。

その日から2人の携帯で揺れている銀の輝きは、2人が一緒に楽しい時を過ごした証だ。

アンドレ・キャメルの苦労日記

彼、アンドレ・キャメルFBI捜査官は公園のベンチに腰をかけていた。

その手には「コーヒー」の缶。

ただ今、ジョギングの休憩中だ。

FBIという職業柄、日々の鍛練は欠かせない。
毎日、時間を見つけてトレーニングをしている。

それには「こ」、米花中央公園はうつてつけの場所だった。

ただ、難点が一つ。

この公園には階段がほとんどと言つていいくほどない。
あっても、子供やお年寄りを考慮してか1段1段が低く、短い。
その為、階段を使ったトレーニングが出来ないのだ。

以前なら、ヒキヤメルはふと考へる。

以前なら、二コ一米花ホテルでトレーニングが出来たのに、ヒ。
あそここの階段は高さも長さも理想にかなつており、トレーニングには最適だった。

が、あそこで会社社長の殺人事件が起きた時に、運悪くその場にはち合わせて犯人と疑われた。

『お前のその顔が殺し屋だつていつてんだよー』

『国際指名手配犯とか?』

『FBI！？人相の悪いその男がかね！？』

あの時に言われた言葉を思い出す。

自分の顔が優しい顔ではないのは分かる。

だがいくらなんでもアレはあまりにも酷くはないだろうか？

とどめはコナン君の言つた一言。

『キャメルさんが実はFBIだったように、見た目で決めちゃダメってことだよ！』

フォローしているようで、その実、フォローになつていないので、言。

つまり、『FBIには見えない』ってことだよな・・・とショックを受けた。

あれ以来、あのホテルはトラウマとなつて行つていない。
だからこゝして公園でトレーニングをしているのだ。

と、物思いに耽つていたキャメルの足下にコロコロとボールが転がつてくる。

視線をあげたその先には、就学前くらいの小さな子どもがいた。
ああ、あの子のボールか、とキャメルはそのボールを手に取り子供の方へ転がしてやる。

するとそれまで警戒心に満ちた眼で自分の方を見ていた子供は笑顔になり、

「ありがとう、おじさん！怖い人がいるからどうしようって思つちやつた！」

最後の方は余計だと思わなくもなかつたが、なんとか笑顔をつくり、

その子に向かつて手をふる。

その子も手を振りながら、来た道をもどつて、若い女性の元へむかう。

おそらく母親だらう。

次の瞬間、金切り声が耳に届いた。

「ナオ君！知らない人とお話しちゃダメっていつも言つているでしょう！？」

「でも、あのおじさん、ボールとつてくれたんだよ？」

「だからなんだって言つの？見てみなさい！あんなゴリラみたいな顔の人、悪い人に決まってるじゃないの！」

そつ言いながら、手を引いて子供を連れ帰る母親。
キャメルはその背中を呆然と見送ることしか出来なかつた。

なぜ、人は見た目で人を判断するのだろう？

そんな事を思いながら、帰るために腰を上げる。

今日はもう、トレーニングをする気にはなれなかつた。

とぼとぼと歩き、公園出口に差し掛かつたころ、ふいに呼び止められる。

なんだらうと、振り返るとそこには制服を着た警官。

その警官は猜疑心のこもつた眼でキャメルを見、言った。

「すみません。ここ最近、この公園周辺で不審者が多発していまして、申し訳ありませんが、身分を証明できるような物を見せていただけないでしょうか？」

言葉こそ丁寧だったが、顔には“お前が不審者だろ”と書かれている。

しかも、トレーニング中だったのでキャメルは手ぶらだ。

その後、キャメルは疑いを晴らすのに一時間かかったとか・・・

流れ星（前書き）

「蘭。

少年探偵団 + 蘭、園子で泊まりがけで出かけた設定。

日が落ちるのが今までと比べ圧倒的に早くなり、朝夕の寒さが身にしみるようになつてきたある日、コナン達は腰を痛めた博士の為に温泉に来ていた。

当初、メンバーは少年探偵団と博士だけだったのだが、直前になつて蘭が博士を心配して同行を申し出た。すると今度は『蘭がいくら私も混ぜなさい!』と園子も付いてきて、賑やかな一行の出来上がりとなつた。

深夜、

隣の部屋から誰かが出た気配を感じたコナンは寝間着の上から薄いカーティガンをはおり、そつと部屋を抜け出した。音をたてないように静かに部屋のドアを閉じると、旅館の中庭へと向かう。

温泉が売りの宿とはいえ、流石にこの時間は温泉も閉めていると見え、辺りは暗かつた。

顔を上に上げてみれば満天の星。

一晩中明るい東京の空と違い、ここでは星がよく見える。輝く星々を目を細めてみた後、今度は視線を庭先にむける。思つた通り、そこには見慣れた人影がある。

「蘭ねえちゃん」

1人、庭で佇む愛しい少女に声をかける。

その少女は一瞬、ビクッと肩をふるわせた後、コナンの方を見、ふつと笑う。

「もお～、コナン君。おじかさないでよ。いきなり人の声がしたからお化けかと思つちやつた」

「どうやら肩が上下したのは、誰もいない庭で人の声 = お化け、と思つたかららしい。」

安心したような笑みを見せた後、蘭はふと気が付く。

「コナン君、ダメじゃない！子供がこんな遅くまで起きてちやー！」

今は一度12時を過ぎたらしい、確かに小学生の子供が活動している時間ではない。

だが、中身高校生のコナンは内心、そう言われるのが面白くない。

（俺は17だぜ？・・・つたぐ、蘭のヤツ、ガキ扱いしやがつて）

それでもコナンは内心の不満を隠して逆に蘭に言ひつ。

「蘭ねえちゃんこりゃ、こんな時間にこんな所でなにやつてるの？」

「星を見てたのよ」

「星？」

確かにきれいだが、何故、このような時間に見ようとしたのか、その疑問を口にすると蘭は懐かしそうな顔になつて語り始めた。

「昔ね、やつ、今のコナン君くらいの頃、だつたつけな？」

「ハラベラこの時期に新一と、新一の両親と温泉旅行に来たの

「新一にこちやんたちと？」

はて、そんなことあつただのつか、とハナンは記憶の糸を手繰り寄せる。

「そう、あのころ、お母さんが出て行つちやつたばつかで私寂しくてね。

それでよく泣いてたんだけど、そしたらおばあちゃん・・・新一のお母さんが連れてつてくれたの

そこでやつと思ひ出す。

父、優作が原稿（と担当編集者）に追わされていて、息抜き兼、逃亡に小旅行に出かけたのだ。

すると有希子が『どうせなら蘭ちゃんも連れてこきましょ』と出發直前に蘭を連れて來たのだ。

確かあの時、自分は珍しく父親の仕掛けてきた我慢比べにのつて、のぼせて夕方から寝込んでいた。蘭は話し続ける。

「新一ったら、お風呂のへりすきでのぼせちやつて夜まで寝てたの
よね・・・」

クスクス笑いながら言う蘭に、余計なことまで覚えてやがる、と思ひながらも、同調して笑い、先の言葉を待つ。

「寝ようとしたら、元気になつた新一が突然やつて来て、その時泊まつたホテルの方まで私を引っ張つてね、どうしたのかと思つたら『空を見てみる』つて

セヒド一度、言葉をくさると蘭は頭上に広がる夜空を仰ぐ。
セヒドは、あの田と同じように星空がキラキラと輝いている。

「凄くキレイだったなあ。今日みたいに、雲一つなくて、ホントに
綺麗だつた。

それで夢中になつて見てたら、流れ星がたくさん見えたの」

思えばあれが初めて見た流れ星だつた。
だけど、それよりも嬉しかつたことは

「でね、新一が『あんだけ流れ星があれば、1個ぐらい願い事は言
えるだろ? お前の今の1番の願いを頼めよ』って。・・・私がお母
さんに帰つてきて欲しいって思つてること、分かつてたのね」

七夕の籠に短冊をぶら下げた時は、母は少しだけ戻つてきた。
ならたくさん星に願いを込めれば、今度は前よりずっと長くいて
くれるのでは、と思つた。

「それで? 英理おばさんは帰つて来たの?」

「ほんのちょっとだけ、ね。私の学芸会の田にだけ」

そこでもう一度空を見上げると、ため息をつく。

「でも、今日は見えないわね。流れ星。

・・・あの時は結構見えたのに」

それを聞いたコナンは頭の中のカレンダーを確認する。

あの日はたしか、オリオン座流星群が極大だった。

だが、今日はまだ、流星群は見えない。

あきらめて部屋に帰ろうとする蘭にコナンは慌てて呼びかける。

「待って、蘭ねえちゃんー流れ星ってね、普通の日でも探せば見えるんだよ。

諦めないで、待ってみよう?」

コナンの必死な声に、蘭は感じるものがあったのか、足を止めて、そこにとどまる。

1時間後、

上を見続けるのに疲れたころ、蘭が小さな声をあげる。

「あー、見えた!」

「えー? ホントに?」

「うん。」

「お願こいとは？」

「じゃあよ、わやんと」

ほんの一瞬の間によく願えたな、と口ナンが感心してこると、蘭が手を差し伸べてくる。

部屋に戻ろうと促しているのだ。

大人しくその手をつないだ口ナンは、歩きながら訊ねる。

「蘭ねえちゃん」

「ん？ なに、口ナン君？」

「やつやのお願こいって、英理おばやんの」とへ。」

あれだけ粘つたなら、母親のことだらうと考えた。だ、

「うん。わがつよ、新一の」とへ

「・・・新一にこちやんの？」

一体自分の何を願つたのだらう。

まさか今度会つたら胴回し回転蹴りを喰らわせることが出来ます様に、とかか？

等考えたが、違つた。

「早く、新一が無事に帰つてきまよつて、お願いしたの」

蘭は笑いながら、あの時のお母さんみたいにまたすぐに「いなくなつちやうかもしれないけどね、と小さく付け加える。

「どうして？すぐにはいなくなつちやうてもいいの？」

いつも、新一^{じぶん}が戻つても、すぐに消えると涙していたのに、と疑問を抱く。

だが蘭はあつさつと頷いた。

「うん。どうせアイツを引きとめておくなんて無理だもの。事件があれば、ボールを追う犬みたいにすつ飛んでつちやうわよ。それでもいいから、できるだけ早く会いたいの」

いなくなつてもいいから、早く会いたい？

不可解な発言にコナンがますます混乱していると、それが顔に表れたのか、蘭が言った。

「直接会つて、言つてやりたいのよ。アイツに。
・・・・・ロンドンでの、返事」

ロンドンでの返事、すなわち告白の返事。

それを解したコナンは赤くなるが、辺りが暗いため、蘭は『気がつかない』。

そこで丁度、それぞの部屋の前に着く。

「じゃあおやすみ、コナン君。遅くまで付き合つてくれてありがと
う」

「うん。おやすみなさい、蘭ねえちゃん」

パタン

各自の部屋で床に就いた2人は間もなく安らかな眠りに着く。

そんな2人ははるか頭上では相変わらず、星たちがキラキラ瞬いていた。

恋は・・・（前書き）

流れ星の裏話

コナンと蘭が2人でいる時、あの2人は・・・

パタン、と夜中に響いた軽い音に哀はむくと起き上がった。

先ほど、人の動く気配のした隣の布団に目をやると案の定、そこには誰もいなかつた。

隣にいたはずの彼、コナンがどこに、何の為に行つたかなんて、想像するまでもなくわかつた。

コナンが動き出す数秒前に隣の部屋から誰かが出てくのよつた気配があつた。

きっと彼はその“誰か”を追いかけて行つたのだろう。

そう、「コナンが彼女を追いかけるなんて、よくあること。だから、気にする必要はないのに・・・

気がつくと哀はコナンを追つて部屋から抜け出していた。

そしてその先で見たものは

仲良く星空を見上げる2人の姿。

何を話しているのか、とても楽しそうに見えた。

『昔ね・・・』

『新一と・・・』

時折聞こえてくる単語からして毛利蘭と工藤新一の思い出話らしい。それを話す蘭は懐かしさでいっぴいの笑顔で、聞いているコナンも同じような表情をしていて、どう頑張っても自分にはあの2人の間に入れないのだな、と哀に思い知らせた。

こんな気持ちになると分かつてコナンを追いかけるだなんてバカだな、と自嘲気味にため息をつくと哀は部屋に戻ろうとコナン達に背を向けた。

その瞬間、驚きで息が止まる。

コナン達に背を向けた哀の真正面に園子が立っていたのだ。

突然の出来事と、自分が園子の存在に気がつかなかつたことに驚いている哀に園子は人差し指を己の口にあてて、

「シ　　ツ、氣づかれちゃうでしょ？」

そう言つと、哀をコナンや蘭からは見えない木陰に連れていぐ。園子の出現に戸惑いながらも哀は田下、一番の疑問を口にする。

「ちょっと貴女、いつからいたのよ？」

「1分くらい前からかな。蘭がいないから探しに来たの。そしたら蘭のヤツ、あのガキンチョと楽しそうに話してたからね、そつとしどいてあげようかなって」

「やつ・・・」

言いながら哀は隠れている木陰から顔だけをのぞかせて、「ナン達を見る。

相変わらず、2人は楽しそうに話している。と、そんな哀の様子を見た園子が口を開いた。

「ねえ、アンタ、あのガキンチョの事好きでしょ？」

「なつ、もー」

不意をつかれて声をあげかけた哀の口を園子が慌ててふせぐ。

「ちよつと静かにしなさいよー。蘭たちが気付いたらどうするのー。？」

「貴女が変な」と聞くからでしょ? だいたいなんでそんなことを・

・

「だつて蘭と話してるガキンチョの事、じつと見てたじやない。悲しそうな顔で」

頭が軽そうに見えて、実はこの手のモノに関しては色々とみている園子はずばりと言う。

それに対し、やつ言つたモノに強くない哀がとつとて切り返せずにいふと、

「でもアンタにもチャンスは十分にあるでしょ」

「どうしてやつ悪つかしき?」

のんきな意見に切り返すと園子は彼女にとつては正論をだす。

「だつて蘭には新一君がいるのよ？」

あのガキンチヨの気持ちは所詮、一方通行で終わるわよ

江戸川コナン＝上藤新一の真実を知らない者にとつては止めに止め
い答えなのだつ。

だが、知つてゐる者にとつては・・・

「さあ・・・本当にそうちらね？」

冷たく言い捨てると、哀は園子を置いて立ち去つた。すると園子が小走りで追いかけてくる。

「あ、ちよつと待ちなつてば・・・」

「なによ？」

そう冷やかに見返す小さな少女に臆することなく園子は言つ。

「アンタさ、あのガキンチヨの事、そんなに気になるんなら、言つてみたら？」

ガキンチヨ本人に。

・・・蘭のこととか気にしないでね・・・

哀が蘭のことを口にする前に、それを防ぐように園子が付け加える。それを聞いた哀は口を開く。

「もし、仮に私が江戸川君を貴女の言つ様な意味で好きだとしても、私はそれを彼に伝えるつもりはないわ」

「どうしてよ？」

「私には、その権利がないから」

「はあっ！？」

園子としては小学1年生の口から“権利”などといふ言葉が出てきたのも驚きだったのだが、それよりも解せなかつたのは、

「それって権利とかいるもんなの？」

「え？」

「だからさあ、誰かを好きになつたり、その想いを伝えるのに権利なんていらないじゃない」

現在の恋人、京極真に会つまで、多くの恋を求めてきた園子はその中で思つたこと、感じたことをそのまま言葉にする。

「恋つてのはね、権利だのなんのだの、そんなもの関係ないの。頭で考えてするもんじゃないのよ。心がね、勝手にするの。だから難しいこととか考えなくてもいいのよ！」

学校の勉強とは違つてね、と最後に言い添えた園子を哀は黙つて見つめる。

明るく言い切つた園子の顔は、『恋の1つでもしき』といった時の姉と雰囲気が似ていた。

顔は似ても似つかないが・・・

ふつ、と笑うと哀は園子に言つた。

「ま、覚えておくわ

「つたく、アンタもあのガキンチョに似て生意氣ね」

今からそんなんじや、将来が不安だわ。

そう言つた園子と、哀はそれぞれの部屋に帰つて行つた。

恋は・・・(後書き)

ちゅうりと恋りやんがこつもと違こますね。
書くのが難しいんです。恋りやんつじよ。

お菓子ヒタズラ（前書き）

新蘭でハロウイン

西田の差し込む放課後の教室。
受験勉強の為、幼馴染の少女に数学を教えてた新一は田の前の彼女
に声をかける。

「なあ、蘭」

「ん？ 何？ どつか間違つてた！？」

今まで黙つて自分が問題を解く様子を見ていたのに、急に話しかけ
られた蘭は慌てた声を出す。
これはどこか間違いがあるので、と。

だが、

「レモンパイ食いたい」

返ってきた返事はどこまでも予想を裏切るもので、蘭は思わずイス
から転げ落ちた。

「おい、どうしたんだよ？ 大丈夫か？」

「大丈夫な訳ないでしょ！？ イキナリなんなのよ？
『レモンパイ食いたい』だなんて急に言われても出せるわけないじ
やない！」

教室の床に尻もちをついた自分に、心配そうに手を差しのべながら声をかけてくる新一に蘭は文句を言いつ。まったくも〜、と言いながら新一の手を掴み立ち上がると、蘭はスカートに付いた埃を払うと再び椅子に腰かける。そんな蘭に新一は猶も言い続ける。

「なあレモンパイ〜」

初めは無視してた蘭だがあまりにもしつこくレモンパイ、レモンパイと連呼されるので遂に怒りだす。

「んもう! 新一、いい加減にしてよね! ?
だいたい何でそんなにレモンパイなんか食べたいのよ?
それにさつきも言つたけど、急に出せる訳ないんだからレモンパイ
はあげられません! 」

怒り心頭、と言つた様子で立ち上がり、机に両掌を乗せ、言つくる。
すると、

「蘭、今日なんの日か知つてつか? 」

にやにやしながら新一が問いかけてくる。

今日は何の日か、と問われた蘭は顎に手を当てて今朝見たカレンダーの日付を思い出す。

今日は10月31日。
と言つ事は・・・

「ハロウインだぜ? 」

蘭が答える前に新一が先に解答を口にする。

そう、10月31日はハロウィン。

秋の収穫を祝い、悪霊を追い出す古代ケルト人の祭りが起源と言わ
れ、外国では仮装した子供たちが近所の家々からお菓子を貰つ。
だが、

「だからどうしたのよ？」

もう高3。

お化けの格好をして『trick or treat!』なんて言
う歳ではないだろう。

そういう意味を込めて聞き返すといつの間にか席を立ち、すぐ傍まで
来ていた新一が蘭の髪を手に取りながら言つ。

「ハロウインにお菓子をあげないとどうなるか、わかるか？」

その目はキラキラと、どこか妖しく光つていて

「や、そんなの知らないわよ！」

新一の目に押されながらも蘭は言い返す。

まさか本当に『Trick or Treat!』と言いだすんじ
や、と思いながら。

すると手にした蘭の髪にキスを落しながら新一は顔を上げ、そしてそのまま

「イタズラ、されんだよ」

「え？ ちよ、し、新一！」

間近に迫つてくる幼馴染の顔に蘭は赤くなしながらその名を叫ぶ。

数秒後、

夕日に赤く染まった教室に、1つに重なった2人分の影が確認された。

その影が離れた後には、顔を赤くした少女と、同じく赤くなりながらも満足そうに笑う少年の姿があった。

『Trick or Treat』

お菓子かイタズラか、

あなたはどうちがいいですか？

お菓子パーティタズラ（後書き）

ハロウインですね～

今日は授業が終わったら学校で学科の子たちとハロウインパーティ
してきます

参加資格はお菓子を作つて持つてくること…

と言う事で、昨日はクッキーを焼いてました。
材料を半分量で入れた超おおざっぱなスノーボールクッキー。

ちゃんとできたからよしとします（^-^）

仮装はしませんが、楽しみです～
コスプレ

ではまた今度！

candy kiss (前書き)

遅くなつたけど平和のハロウインネタ
一応2人は付き合つてる設定

・・・にしてもタイトルのセンスねえ！（笑）

10月31日の放課後、改方学園のある教室には甘い香りと少女たちの笑い声が満ちていた。

「あ～、おいしかった！」

「ホンマ、愛のケー キなんて最高やつたよ」

「梨花の生キャラメルもな～」

教室内の机をいくつか繋げたその上には少しずつ残った、さまざまなお菓子。

紅茶のパウンドケー キや生チョコ、秋らしくカボチャを使ったケー キもある。

クッキーも、チョコチップ入りのものや、市松模様のもの、スノーボールクッキー、アイシングクッキーと種類が豊富だ。

あめ玉や、ポッキーと言つた市販のお菓子もあつたが、そこに並んでいる多くは少女たちの手作りのものだ。

彼女たちは放課後、空き教室にてハロウィンパーティーを開いた。もちろん、学校にお菓子類は持つてきていけないのだが、見回りの先生に差し入れと称して賄賂のケー キをあげたので問題はない。小1時間ほどお菓子を食べ、おしゃべりをするとパーティーはお開きとなつた。

めいめいが残つた持参のお菓子を包み、帰り仕度をする。

「じゃあまた明日な～」

そう言つと既、教室を後にする。

といひが最後に1人だけ、なかなか出ようとしない少女がいた。

「あれ？ 和葉、帰らんの？」

「もつ外は真つ暗なんやし、はよ帰つたほうがええで？」

「せやせや。和葉はウチと家近いんやし、一緒に帰ろつや～」

鞄を机に置き、椅子に座つた和葉に友人たちが声をかける。それに対し、和葉は小さく笑いながら少し申し訳なさそうに答える。

「「」めんな～。平次のこと、待つとるんよ」

その答えに周りは『あ～』と納得したように頷く。

彼女の幼馴染にして恋人である服部平次は今日、数日前に事件の捜査で欠席した分の補習を受けているのだ。

「それじゃ邪魔しちゃ悪いから帰るわ」

「「」やつくつ～」

そう口々に言つと友人たちは帰つていった。

廊下の方からがやがやと話し声が聞こえてきたが、それも次第に聞こえなくなる。

話し声が聞こえなくなると和葉はふと息をついて頬杖をつく。

「平次にも、食べて貰いたかったなあ」

彼女の持参したチーズケーキは好評で、すっかりなくなってしまった。

一切れくらい残しておいて平次にあげようと考え、朝学校に行く時に平次にもそう言ったのだが、それはできなくなってしまった。しかし、ないものはしょうがない、と諦めると時計を見上げる。

教室の時計は午後6時を指していた。

もう少しで補習も終わって平次もくるだらう、と考えながら和葉は1つだけ貰った飴を口に入れると、

「お～、和葉！待たせたな～」

後方のドアが開き、待ち人が現れる。

和葉は振り返るとその待ち人に向かって口を開く。

「アンタを待つのなんともう慣れっこや！ しょっしうう人と約束忘れよつて。

で？もう終わつたん？」

いつぞや梅田にて延々と待たされたことをチクリと言いながら、内心で後悔する。

本当は待たされても、会えるだけで嬉しいのに、と。だが平次はそんな嫌味など微塵も気にせず、

「ああ、補修ならばつちり終わつたで！

・・・和葉、お前の作つたつちゅうチーズケーキはどこや？

今朝、食わしたる言うてたやろ？」

「どうや？ と和葉の鞄の中をのぞき込む平次。

申し訳なくなつてきた和葉は顔の前で手を合わせる。

「すまんな平次。皆なくなつてしまつたわ」

すると平次はつまらなそつな顔になる。

「なんや、お前、全部食つてしまつたんか。

そんなんやから無駄なとこばつか肉がつくんやわ」

「ぐらぐらに非があるとはいへ、余りな言ことよつこムツとして言い返そつとした瞬間。

「代わりのモノ、貰うで」

と平次が和葉の脣に自分のそれを重ねる。

丁度言い返そつと開いた口からコロン、とあめ玉が転がると平次の口へと入つていぐ。

「な、ちょおつ・・・!」

突然の出来事に困惑している和葉に平次はにやりと笑いかけると、
「あめ玉、貰つたで。・・・帰るぞ」

その後2人は仲良く並んで帰つたそうだ。

candy kiss (後書き)

飴はイチゴ味かな～？（ 勝手な想像です）

はい、突然ですが「バラエティギフト」のアクセス数がPVが10万越え、ユニークも1万越え（これはだいぶ前からなのですが）しました。

ということで感謝を込めてリクエストを受け付けます
本当は9円くらいにやろうとthoughtしてたのですが、なにやら忙しくて
機会を逃しておりまして・・・
詳しくは活動報告をご覧ください。

O・B・E・N・T・O (前書き)

田沢舞子さんのリクで高佐
高木刑事田線で。

「高木くーん」

お皿時、昨日の事件の書類をなんとかまとめ上げた時、佐藤さんの声が聞こえてきた。

振り返るとそこにはいつもの凜々しい彼女の姿。

「佐藤さん、どうかしましたか？」

「これからお皿だし、一緒に食べにいかないか、とまつり誘いだつたら、・・・と期待しながら訊き返す。

まあ、そんなことしたら後で他の刑事達に尋問を受けるハメになるが。

それでもその価値はあるよな、と考えてみると、

「お皿のお弁当を・・・つて・・・・ない？」

え？

今、佐藤さんは向て言つたんだろ？

佐藤さんが喋り始めた時に一課のドアが勢いよく閉じたからよく聞こえなかつたけど、もしかして

『お皿のお弁当を作つてきたから食べない？』

とかー？

以前、白鳥さんが小林先生にお弁当を作つてもらつてゐのを見て、佐藤さんにも『今度作つて下さー』と頼もうとしたら、聞き間違えた佐藤さんに『コンビニ弁当買つてきてー』なんて言われたけど、今日は作つて来てくれたとかー？

そう考へると頭の中は期待でこづぱこになつて、気がつくと答えていた。

「はーー！喜んで！」

そう言つた途端、佐藤さんの顔がパアーッと明るくなる。“刑事の顔”の時もいいけど、やつぱりこんな顔も可愛くていいなあ・・・なんて見とれていると。

「ホントー！？ありがとひ。やっぱ高木君は優しいわねー。」

「いえ、そんな・・・」

そんなことありません。貴女の手作り弁当を食べるこじが出来るなんてそんなの、誰だつて喜ぶに決まつてます。脳内だけで続きを言う。今の気分は天にも昇る気分だ。だが、そんな気分は次に放たれた佐藤さんのセリフで地に突き落とされる。

「今日はガツツリ食べたい気分だから、カツ弁当がいいなあ。あ、あとデザートにプリンもお願いね。はい、お金」

「え・・・？」

思わず間抜けな声をだし、呆けたように佐藤さんを見てしまった。
そんな俺の様子を見て佐藤さんは首を傾げる。

「あら、どうしたの？高木君」

「あ、いえ・・・その・・・何でもありません」

自分のした勘違いに呆れて上手く言葉を紡げず、有耶無耶に終わらせようとしたが、佐藤さんはそれを許してくれなかつた。

「なによ？何か言いたいんでしょう？男ならビジネスと聞こなさること」

すっかり刑事の顔になつて俺を睨みつけてくる。
その迫力に負けた俺は素直に白状した。

「えっと、佐藤さんが最初、お弁当作ってきたから食べないかつて、
そう言つたように聞こえて・・・すみません」

「・・・・」

案の定、返つて来たのは沈黙。

おまけにまだこの部屋に残つてた刑事達からの痛いほどの視線。

ああ、あとで彼らに何をされるか・・・

それに佐藤さんだって呆れてるだろ？な、と気が重く、顔があがられなかつた。

が、

「何？高木君、手作りのお弁当が食べたいの？」

なら今度由美に頼んであげようか? アイツ、ああ見えてお皿はこつ
もお弁当持参だし

ちがう、ちがうんですよ。

俺が食べたいのは、ただの手作り弁当じゃなくて

「佐藤さんが、いいです」

「え?」

「こんな」と言つたらあとでまた尋問受けるハメになるナビ、でも・・・

・
「佐藤さんが作った弁当が、食べたいです」

とうとう言つた、本音。
でも後悔はしていない。

あとは佐藤さんの反応を待つだけだ。

だがなかなか反応がない。

やつぱ、やつこつのは嫌なのか?とわずかに不安が出てきた時だつ
た。

「私、料理下手よ?」

だからお腹壊すかも知れないわよ?
そんな言葉と共に、返事がきた。

これはOKと取つていいんだよな!?

「大丈夫です！僕、お腹は丈夫なんで！」

周りからの視線がものすごく痛かつたけど、そんなのは気にならぬいほど嬉しかった。

高木目線つてなかなか難しい。

なんか変な文になっちゃいました。

後日、お弁当編も後で書こうと思います。

O・B・E・N・T・O ? (前書き)

O・B・E・N・T・Oの続きをです。

『佐藤さんの作った弁当が、食べたいです』

高木のそんな発言から数日後。

佐藤と高木、2人のデートの日。

「高木君」

2人で動物園に行き、さまざまな動物をたっぷり見た後の、昼。

佐藤は車の中から四角い包みを取り出した。

それを見た高木が一瞬、驚いた顔になり、その後には嬉しそうに微笑む。

その四角い包みの中身が、先日約束したお弁当だとわかつたから。

「コレ、そここの公園で食べない?」

嬉しそうな高木に、佐藤もどこか照れた様な微笑を浮かべながら提案する。

「はい。じゃあ、奥の方にベンチがあるからそこで」

僕が持ちますよ、と高木は佐藤の手から包みを受け取ると2人で公園の奥へと歩を進めた。

と、そんな2人を見つめる影が4つ。

毎度お馴染み、佐藤美和子絶対防衛線のメンバーだ。

だが流石に毎回毎回全員がそろつて活動できるわけもなく、今日はその中でも特に力を入れているメンバーだけが集まつた。

「高木のヤロー」

「白鳥が抜けたからつて調子にのりやがつて…」

「僕たちの美和子さんを…」

恨みの」もつた眼で高木の方をじつと睨みつけながら文句を言つ。そして、火にかけた油鍋のように熱くなつてゐる彼らの所へ、一石が投じられる。

「情報によりますと高木は佐藤さんに手作り弁当を頼求したとか…」

それが、点火のきっかけとなつた。

「なにいっ！それは本当か！？」

「はい！一課の田中がその現場に居合わせたそうです！」

その密告者（チクリ魔）であるといふの田中刑事は残念なことに今日はいっじこない。

「じやあ、高木の持つているアレはまさか・・・。」

「美和子さんの手作り弁当ー。」

「うらやましい。ついやましそぎる。」

佐藤の料理の腕前を知らない彼らは嫉妬の鬼と化する。彼らの脳内にはあるイメージが瞬間的に浮かぶ。

~~~~~

『はい、高木君。あーんつてして?』

優しく微笑んだ佐藤が高木の口に箸を運ぶ。箸につかまれたから揚げを口にした高木が幸せそうな顔になる。やがて「ゴクン」という音と共に唐揚げを嚥下した高木に佐藤が問いかける。

『おいしい?高木君』

『はい、もちろんですー。』

『よかつた。また作つてくれるからね』

~~~~~

「「「「うわああ~~~~~!..」」」

4人揃つて同じ想像をした彼らは頭を抱え、大絶叫する。

冷静になつて考えれば佐藤がそんなキャラではないとわかりそうなものなのだが・・・

今の彼らにはそんな事を考える余裕はなかつた。

周囲を歩く人々が突然絶叫しだした男4人組を氣味悪そうに避けて
一歩が、そんな二歩も気がつかないほどだ。

やがて4人はすっと背筋を伸ばすと、高木達の消えた方へ顔を向ける。

「阻止するぞ！ なにがなんでも！ ！」

「 」 「 」 「 」

そんな雄たけびを残し、その場からかけだした。

しかし、

「遅かつたかつ！」

時すでに遅し。

すでに高木と佐藤はお弁当を膝の上に広げ、ランチタイムに突入していた。

だが彼らは知らない。

あの弁護の中身が、どう言つものなかを・・・

時はほんの少し前、そう、4人の刑事が高木たちを発見する前に遡る。

お弁当の蓋を開けた瞬間、高木は言葉に詰まつた。

黄色い、けど形の崩れた卵焼き
バターを使い過ぎたとしか思えない、ホウレン草のバター炒め
真っ黒な塊は、から揚げ、だろつか？

「なによ？下手つて言いたいんでしょ？」

高木があんまり長いこと黙つているので佐藤が怒つた風に聞く。

「い、いえ！そんなことありません！いただきまー！」

慌てて返事をすると、高木は見た目の良い、口の中で一番まともらうなオーギリを口にすら。

そして、固まつた。

それを見て、

「もひ、高木君！そんな反応しなくてもいいじゃないー！」

眉を上げた佐藤が同じくオーギリを一口齧る。すると、佐藤もまた、固まつた。

「え、ヤダー甘いじゃない」

甘いオーギリほどマズイものはない。

高木の硬直の理由を悟った佐藤は彼の方を見る。

そこで見たのは

信じられないことに、甘いオーギリを黙々と食べ続ける高木の姿だった。

「ちよつと高木君、こんなのが食べなくていいわよー！」

流石に失敗作を無理に食べさせるわけにはいかない、と止めようとするが、

「大丈夫です！僕、おはぎ好きなのでー！」

そう言つと、高木はそのオーギリを完食した。

そしてその後、新たに発覚した事実。

見た目真っ黒ながら揚げは中身は生焼けだった、ということ。

その事実にひとしきり笑いあつた後、2人は約束を交わした。

「次はもつとまともなのを作つてくるわ。由美に聞いて」

「じゃあその時は僕も作つてきますよ、お弁当」

「ならそのお弁当、交換しましょ？」

「はい！」

結局、食べることができたのは不格好な卵焼きと、ホウレン草のバター炒めだけだった。

それでも、高木にとつては何よりの御馳走だった・・・ハズ。

その一言が（前書き）

新蘭コ
・・・かな？一応
リクはもうちょっと待つて下さいね。
必ず書くんで！

その一言が

それはある日の夕方の出来事だった。

遊びに行っていたコナンが毛利家に帰るとまず田に飛び込んだのは、幼馴染の、誰よりも大切な少女の後ろ姿だった。

「ひ、ん、ねえちゃん・・・？」

その背中が、あまりにも悲しげで、帰宅の挨拶を言つ事も忘れ、彼女の名前を呼んだ。

そして、己の名を呼ぶ声に反応して振り返った彼女の顔を見て、言葉を失つ。

いつもの明るく、優しい笑顔が微塵も感じられない疲れきった悲しい顔。

コナンはなんとか口を開くと、訊ねた。

「蘭ねえちゃん、どうしたの？何かあった？」

その問いに対し、蘭は一瞬、躊躇つような間を見せながら、ぽつりと言つた。

「ねえ、コナン君。新一はこいつになつたら帰つてくるのかなあ？」

「え・・・」

半分は予想していた、自分絡みのこと。
それでもどう答えていいのか分らずにいると蘭は一人で話し続ける。

「新一はさ、『必ず帰つてくるから待つてくれ』だなんて言つてたけど、私はいつまで待つてればいいのかな？」

今の蘭の中にいるのは、かの幼馴染。

『待つててくれ』その一言を残し、姿を消した彼。やつと会えたと思えば、すぐにいなくなつてしまつ。電話をしても『厄介な事件があるから帰れない』の一言。告白の様なものもされたけど、結局、その後一度も会つていない。蘭に残されたのは、未来の見えないまちぼうけ。

「待つてるだけってや・・・心配することだけしか出来ないのって結構ツライんだよ？」

新一は、わかつてゐのかな？もつ、疲れちやつたよ・・・

「えつと・・・」

悲しそうに喋り続ける蘭にコナンは何も言えない。

蘭を苦しめている工藤新一はコナンなのだから、言える筈がない。黙つたまま聞いていると不意に蘭の声が明るくなつた。

「な～んてね、コナン君に言つてもしようがないよね、こんな事。変なこと言つちやつてごめんね。忘れて！」
さあ～て、晩御飯の支度しようかな。コナン君、今晚は何がいい？」

先ほどと打つて変わつて、からりとした明るい声。
だけどその明るさは無理だと分かる。

ウソだと分かるから、コナンは余計言葉に詰まつて。

出てきたのは、

「ぼ、ボク、ハンバーグがいいな」

いつもの子供っぽさを意識した返事だった。

「また?」ナン君はハンバーグが好きよねえ」

「うん!蘭ねえちゃんが作ったのは特別おいしいから」

その会話を期に、2人はいつもの2人に戻っていく

その日の夜、

宿題も済ませ、明日の準備も全て終わらせた蘭は、居間の電気を消すと自室に入つていつた。

隣の部屋からはづるといへりのイビキが聞こえてくるから、父も、それよりも早く床に就いた少年ももう眠りについているだろう。今日は彼に変なことを言つてしまつたな、とあの少年のことを考えながら少し反省する。

あの子に、コナンにあんな話をするべきではなかつた。

きっと誰よりも優しいあの少年は、蘭がした話を、蘭の痛みを、まるで自分の痛みのように苦しむだらうから。

あの話は、蘭にですらどうする事も出来ないものだから。自分の力でどうする事も出来ないのに、それを年下の彼に背負わせるようなことはしたくなかった。

あまり、気にしないでいてくれるといいのだが、と思いながら部屋の明かりを消すと、布団にもぐりこみ目をつぶる。

いつもはすぐに睡魔がやってきて、心地よい眠りへと入ることが出来るのに、今日はなかなかそれが出来なかつた。

何とか眠りうつと布団の中で寝返りを一つ打つたその時、

Tr Tr Tr Tr Tr Tr Tr Tr Tr

突如、耳に届いた電子音。

慌てて音のした方向見ると、携帯がチカチカと点滅しながら着信を告げていた。

「もしもし?」

『あ、わらい。寝てたか?』

「ううん。平気。まだ寝てない」

携帯の画面を見るまでもなくわかった。

こんな時に電話をしてくるのは“彼”だとうなづいた。

きっと夕方の事をコナンから聞いたのだろう。

それで、電話をしてきた。

だが、今度は彼は何を言つもりなのだろうか

また、『待つてて欲しい』と言つのか、
それとも、いつ帰るかを言つのか

それとも

『あのそ、蘭』

「何?」

彼が言つのは

『もしも、お前が』

『言つのは、

『待つのがつらくなら、苦しきなら』

その先は、

『お前が苦しかつたら、もつ』

次にくるのは、

『もつ、待たなくていいんだぜ?』

やつぱり、ソレだった。

そう。新一も優しい。

蘭の事を苦しめると分かっていて、それを強いるようなことは決してしない。

でも、それは優しい拒絕。

“シライなら、苦しいだけなら、待たなくていい”

その言葉は、どこまでも優しく、相手の事を突き放す。

そんなのは嫌だった。

自分でシライだの苦しいだと聞いておきながら、それは嫌だった。だから蘭はその想いを口にする。

「・・・そんな事いわれて『ハイテーですか、じゃあもう待ちません』なんて言つ訳ないでしょ!?」

『や、蘭?』

「何よ！一人で格好つけちゃって！」

「そつやつて私のこと傷つけないよう気遣つてるんでしょ」けだ
きなお世話よ！

私はねえ、新一のこと待つって決めたの！だから待つの！
見ぐびらないでよね、私は一度決めたことは簡単には覆さないんだ
から！」

待つ、と決めた。

だからどんなに辛くても、苦しくても、疲れても待つ。

「・・・私は新一がいつか必ず帰つてくるって、その事を支えに待つ
の！」

だから『待たなくていい』なんて言わないでよー！

それと、それと・・・

感情が高ぶりすぎで、言葉が途切れる。

「それと新一だって私が待つてること、支えにできるでしょ？
それを頼りに帰つて来てくれるんでしょう？
だから待つよ、私は。いつまでだって・・・」

そこままで言つと、一息つく。そして、

『蘭。お前は・・・それで辛くないのか？』

携帯の向こうから聞こえてきた声に、

「大丈夫よ。私、そんなにヤワじゃないもの。

だから言つて？『待つてくれ』って。

それさえあればいつまでだって待てるから

すると逡巡する様な間が空き、それから再び声が聞こえてきた。

『わかった。じゃあ蘭、俺は何があつても、絶対に帰つてくれる。今は無理でも、絶対にお前のところへ帰つてくる。だからそれまで待つてくれ』

それを聞いた蘭はふ、と微笑む。夕方に見せた疲れきった表情からは想像もつかないほど、満ち足りた笑顔で。

「うん。わかった。ずっと待つてる。
だから、帰つてきてね」

『ああ』

時計を見るともう一時を回っていた。
なので、もう少し話していたかったけど、ここまでにする。

「じゃあ、おやすみ。風邪ひかないようになれ」

『おひ。蘭もな』

それを最後にピッとは通話を切る。

先ほどまでと違い、今の蘭の表情は穏やかだった。

布団に身を沈めながら、蘭は思つ。

もう大丈夫だ、と。

どんな元気へても、やつへても、新一のことを待てる、と。

それから、西條のあの少年こもりの事をやさしく話してやる。

そんなことを思いながら、蘭は安らかな眠りに就いた。

やっぱ（前書き）

遅くなりました！

星野由香里さんからのリクで、
季節外れですが体育祭ネタで。

新
蘭

そばで

チヤラチヤラララララ

聞くも陽気な音楽が、校庭に設置されたスピーカーから流れている。それをBGMにして教師がマイク片手に蘭たちに指示を出す。

「はい、3年生、2クラス毎に男女別に並んで~！」

今は学年合同での体育祭の練習の真っ最中だ。流石に高3ともなれば何度も注意されることはなく、一度の指示で全員がキチンと並んでいく。

3年生だけの種目、フォーカクダンスの練習だ。つまり全体の人数が偶数、さらに言えば男女の人数が丁度揃っているのがベストだ。

だが中にはそう上手くいかないところもあり、

「あれつ? こいつて女子が2人多くない?」

「じゃあ1番後ろの子は男子の列に入るしかないね」

「え、じゃああたし、男役! ?」

都合上、女子が男子の列に並んだり、その逆もあつたりする。

「え~、やだあ。工藤君と踊りたかったのに~」

男子側で踊ることになつた少女のぼやきが耳に入り、蘭は複雑な思

いで隣を見る。

蘭の隣にいるのは、恋人の新一。

背の順に並んだ結果、隣同士になれたのだ。決して園子が仕組んだわけではない。

「それじゃあ、入場の音楽に合わせてグラウンドの真ん中まで入ってきて！」

男子は女子の手をとつて…」

そう言つた声を会図に再び音楽が流れだす。

手を差し伸べると、新一はしっかりと蘭の手をとる。

「ちょっと新一…手を握るんじゃなくて重ねるのよ…？」

こんな風に握つてるなんて私たちだけよ、恥ずかしいじゃない！」

軽く差し出した手がしっかりと握られ、周囲は冷やかし笑いをしてい

る。恥ずかしさに蘭が抗議すると、返つてきたのは不機嫌な声だった。

「別にいいじゃねえかよ…」

これから他の奴らとも踊ることになんだから」

「は？」

新一の言葉の意図が掴めず、蘭がポカンとしていると前を歩く女子と、その前を歩く女子が振り返る。

「もー蘭つてば鈍いんだから。

「藤君はね、蘭と踊る他の奴らに嫉妬してんのよ…」

「ま、うひせー、田代ー余計な」と皿ついでござねー。

「咲咲しなじつヒトヒとせ国語つヒトヒとドシよー。」

「田舎までくんな」と皿ついでんじやねえー。」

耳を赤くしてじる新一を見て、蘭はそつなのか、と思ひ。もし本当にやうだつたら嬉しいな、と。だが同時に、少し嫌なことも思い出す。

先ほど、先生の号令がかかつて並び始める前に耳にしてしまった余話を。

『もー、なんでフォークダンスなんてしなくちゃいけないわけ?』

不満げな声から始まつたのはA組の女子数人から成る余話。

『マコは男子が苦手だからね~』

『でもや、A組つてB組と一緒によねー?ならこいじやん!』

『何が?』

『まひあ、一藤君よー。』

“一藤”

その名前が出てきた瞬間、聞くとはなしに聞いていた蘭の心臓が跳

ね上がり、次の瞬間には意識して聞き耳をたてていた。

『工藤君に手をとられて踊るなんて最高じゃない!』

『えー、でも彼って彼女いたよね?毛利さん』

若干予想はしていたが、自分の名前が出てきて、ドキリとする。

『そんなの関係ないわよー・ビリセフォークダンスなんてすぐ相手が変わるんだしゃ。』

ほんの少しの間独り占め出来るだけなんだからー!』

いくら毛利さんが彼女でもそれを止める権利はないでしょ?』

『そーかもしけないけどさあ』

『つてか英恵、まだ工藤君の事好きなんだ?』

『しつこいね~』

『あいや、どう見ても彼女以外眼中にないわよ?工藤君』

『いいのよー・そんなの分かってるんだから』

ああ、この会話は最終的にどこまで行くんだろう、そう思いながら蘭が聞き続いていると、衝撃発言が1人の口から飛び出した。

『ならこの機会に自分を売り出してみたり?工藤君にー。』

蘭が聞いたのはここまでだつた。

驚いて思わず彼女たちの前に飛び出しかけた時、号令がかかったのだ。

「・・・い、おい蘭！？」

不意に声をかけられて顔をあげると新一が蘭の顔をのぞき込んでいた。
気がつけば入場は終わり、周囲はもう踊る姿勢になっている。
どうやら自分の世界に沈みこんでいたため、ボーッとしていたらしい。

「あ、ごめん」

軽く詫びると、蘭も新一に背を向け、手を後ろに出す。
途端にあの軽快な音楽が流れだす。
フォークダンスの始まりだ。

が、蘭は踊った相手の顔を、ほとんど覚えていなかつた。
最後に相手の顔を見てから変わるはずなのに、蘭は相手など見ていなかつた。

ずっとずっと新一の方を見ていた。

それこそ、穴があくほど。

蘭と一緒に踊った男子達が氣の毒なほど。

新一は大して面白くもなさそな顔で踊っていた。

しかし相手の女子は違ひ、わずかに頬を染めている。

B組の人間はそうでもないのだが、A組の方は違った。

そしてひとつ、先ほどのA組の少女、英恵の番となる。

英恵は始終、幸せそうな顔で新一にもたれかかるようにしながら踊っていた。

さらに、悪いことは重なるらしく、丁度そこで音楽が止んだ。

それが意味するのは、退場。

つまり英恵は新一と共に退場するといつことだ。

と、唐突に英恵と蘭は田があつた。

すると英恵は蘭の事を馬鹿にするかのような表情をすると新一の手をぎゅっと握る。

それだけ見ればもう、十分だつた。

蘭は新一たちから目をそらすと、戸惑つたように手を出す相手を見もせず、また、その手をとりもせずに退場した。

「あ、あの、毛利さん・・・」

哀れな男子の情けない声が秋風にさらわれていった。

「う~ん!」

放課後、まだ不機嫌な蘭の元に、園子がやつてくる。

「あ、園子・・・」

園子は蘭の顔を見るなり苦笑する。

「またそんな不機嫌な顔しちゃって。」

・・・どうせ今日のフォーアクダンスでしょ?」

「え、別に・・・」

「隠すなって!あの△組の子でしょ?」

やはり親友には誤魔化しがきかない。

「うん」

諦めて蘭は素直に認める。

「あの子、英恵さんってさ、新一のこと好きみたいなんだよね。
それであんなことしてたからちょっと、ね」

新一の彼女はまぎれもなく自分なのに・・・

他の女子に見せつけられるように、新一の手をとられた。

それが悔しいし、そんな事で簡単に怒る自分自身にも悔しかった。

その事をぽつり、ぽつりと園子に話す。

すると、

「バカね蘭は」

呆れたような苦笑とともに園子は叫ぶ。

「見てなかつたでしょ？あのA組の子が新一君の手を掴んだ時、彼がその手を振り払つたの」

「え・・・」

「『俺は蘭以外の女と手は繋がないから』ですって。言つわよね、アヤツも。だから安心しなつて！」

新一がそんなことを言つなんて、知らなかつた。それでも、

「それでも、さ、私、やつぱり面白くないんだよね。新一が私と離れた所で、私以外の誰かと手を取り合つなんて」いいながら、やつぱりバカだな、と蘭は思つたかが体育祭、学校行事の1つだ。そんなことでこんなにも妬くだなんて。と。

だが、蘭は決心する。

自分がこんなにも妬かなくてすむ方法を実行することを。

「園子！私、決めたよ！」

「へ、何を？」

そして、翌日からのフォークダンスの練習では、蘭が男子の列に並び踊っていた。

しかも、どうやったのか、新一のすぐ後ろで。

おかげで新一と踊る相手は彼女がすぐ傍にいるため、落ち着かなかつたそうな

やさで（後書き）

リクエストの内容は、新蘭でやさもむ、でしたが・・・
蘭が暴走した・・・！

お陰でめちゃくちゃな内容になってしましました。

では、遅くなりますが、次回もよろしくです！

敵わない（前書き）

鶴田さんのリクで、平次 vs 静華！
平次と和葉はつきあつてます。

おまたせしました^__^

敵わない

昼下がりの米花町。

2丁目にずつしりと濃厚な存在感と共に構える工藤邸に1人の来客があつた。

「くう～どお～～」

「服部！～どうしたんだよオマエ」

いつもの陽気な、陽気すぎる挨拶と打つて変わった陰気な、抑揚のない声に家主の新一が本を片手に玄関に飛び出すと、親友、服部平次がいた。

が、そこにいたのは先ほどの声と同じくいつもの平次ではなかつた。げつそりとやつれた頬。

ボサボサの髪。

元が黒いのでわかり辛いが、顔色もあまりよくない。

そしてなによりいつもの、进る様な生気が感じられない。

そんな親友の様子に戸惑いながら、新一は珍しく追い返すことなく平次を招き入れた。

「んで？何があつたんだよ、オマーがそんなにやつれるなんて」

熱い「一ヒー」を出しながら新一は訊く。

本音を訊けば、せつかくの休日、読書中だつたのを邪魔されてしま
り機嫌は良くない。

だが自己に押し掛けられて、おまけにこんな様子を見せられてはほ
つとく」ともできず平次の話を聞くことにした。

「いや、実はな・・・」

差し出された「一ヒー」に口をつけながら平次が語りだす。

「和葉のじとなんやけど」

「和葉ちゃん？何かあつたのか？」

平次の口から飛び出した名前に新一は意外そうに訊き返す。
遠山和葉と言えば服部平次の幼馴染の少女で、少し前から平次の彼
女となつた子だ。

平次がやつれたのは父親の平蔵が関係しているのだろう、とばかり
思つてたので、まさか彼女の名前が出てくるとは思つていなかつた。

「いや、和葉やないんやけど・・・」

「じゃあどりなんだよ」

人様の大事な休日を潰しておいてハツキリとしないとはなんだ、と
新一は問い詰める。

すると平次は渋々ながらも口を開いた。

「オカソがな、俺が和葉と出かけようとする

「出かけようとする？」

平次のやつれている原因が彼の母、静華だと知り、若干驚きながら
も訊ねる。

そして返つて来たのは、

「ついて来るんやーずうつとー

おまけにビデオカメラ持参でーおかしいやろー？」

「・・・・・」

ああ、そつと言えど、と新一は思い出す。

平次の母、静華は息子の成長記録をビデオに納めていたな、と。
自分の母、有希子も同じようなことをしていたので、彼の気持ちは
よく分かる。

流石に、蘭とのデートまでは撮られてはいけないが。

「それだけか？」

確かに、デートの度に尾行され、撮影までされるのは気持ちのいい
モノではないが、平次なら母を撒くことぐらい簡単にできるだろう、
そう考えて新一はそれだけと言つたのだが、それが平次の鼻息を荒
くした。

「それだけ、やとお？簡単に言ひよつてからこー！」

そりや俺やつて努力はしたんや！

人の多いところ通りに、和葉をバイクの後ろにのせたり！

それでも付いて来たんや、あのオバハンは！」

「え、いや待て、バイクについてきた？」

いくらなんでもそれは吃驚だ。

有希子だつてそんな事はしない・・・多分。

だいたい、どうやってバイクについて来ると言つのだ。

その疑問をぶつけると怒鳴のよつた声で答えがきた。

「タクシーつうて、じつちにカメラ向けてきたんや！
信じられるかー！～じつちがどんな道つうても必ず追いつくんやー！」

何と言つが、その尾行スキルには感心するな。とか、タクシーの運転手もよくそんな事できたな、とかいろいろと思つ事はあったが、

「他には？」

それだけの「」とをやつてのける人なら、まだ何かありそうだと思い、聞いてみる。

すると差し出されたのは、色黒の手が2本。

良く見ると、絆創膏が何枚か貼つてある。

これはどうしたのかと訊く前に平次から答えが来る。

「オカソがな、和葉と付き合つなら家事も出来んとあかんよつて。

料理の特訓させられたんやー！」

で、なれない包丁で指を切つたと。

そういうことか、と新一は苦笑いをする。

それなら自分も蘭と付き合い始めた頃に有希子と蘭に叩き込まれたなと思いだしながら。

お陰で今ではある程度の料理は自分で作れるし、蘭が来ないからと言つて飢え死にすることもない。

それはさておき、

「結局、オマーがそんなにやつれてんのはどれが原因なんだ？」

母の尾行か、料理や家事の特訓か、

「オカンの尾行や・・・」

流石の高校生探偵、服部平次でも母親には勝てないらしい。
だが、

「でもな、今日は行けるでえ！

和葉ももうすぐ東京に来るんや！

せやから、今日はオカンのカメラもなしゃ！」

平次はそう明るく言こきつた。

その時、

ピンポーン

玄関のチャイムが鳴つた。

「お、和葉のヤツ、早いやんか」

余程楽しみにしていたのか、つきつきと玄関に向かう親友の背中を見ながら新一はふと考へる。

彼女は工藤邸に来たことがあつただろうか、と。

それにつもは東京に来るとまず真つ先に毛利探偵事務所に行き、蘭と会つてなかつたか・・・

そこまで考へた時、平次の悲鳴が新一の元まで聞こえてきた。

敵わない（後書き）

チャイムを鳴らしたのはだれか、わかりますよね？

雪も溶けやうひ（前書き）

ちび新蘭

珍しく、東京の米花町にも大雪が降つた翌日のことだつた。雪に白く染められた庭には1人の大人と2人の子供。

泣いている少女。

תְּהִלָּה יְהוָה

その様子を見て怒つている女性。

「ちよこと新ちゃん！？」
蘭ちゃん泣いてるじゃない！何したのよこのバカ息子！」

そして、

女性に叱られているのは、ふて腐れた様子の少年。

• • • •

「新一！白状しなさい！一体、何しでかしたのよ！？」

むすつとしたまま、答えるつとしない息子に、有希子は声を張り上げる。

それでも頑固な子供は一向に口を割らない。

らと見て いる。

蘭の方をちらち

いつまでたつても新一が何も言わないので、とうとう堪忍袋の緒を切らした有希子の怒声が空を揺るがす。

「もういいわよ！

何があつたか知らないけど、蘭ちゃんに謝るまで家に入れてあげないんだからね！

そこで反省してなさい……！」

泣きべそをかいていた蘭がびっくりして泣きやむほどの大声でそう言つと、有希子は蘭の手をとり皿洗へと入つていった。

後に残されたのは静寂と、仏頂面の新一。

そして頭の取れた雪だるま

「やつしてこんなことになってしまったのだろう？

冷えていく空気に身を震わせながら新一はぽんやつと囁く。

その視線の先には、崩れた雪だるまの頭。

それは先ほどまで蘭と一緒に作っていたものだった。

そして、新一が壊したモノだった

そう、作っている時は良かつたのだ。

こんなにたくさんの中が積もるなんて、そう滅多になることないので
はしゃいでいた。

『ねえ、新一！ 雪だるま作りよー。』

蘭のそんな提案にのり、雪だるまを作る」とになった。

どうせ作るなら大きいのを2人で作ろう、と言つ事になり一緒に雪
玉を転がしていった。

そして完成したのが、ここにあつた雪だるまだ。

そこまでは良かつた。

出来あがつた雪だるまの大きさに満足さえ覚えていたし、母有希子
にも見せて驚かせようと考へていた。

『わあー、すいおい。おつきいね、新一！
ねえ、新一のお母さんと言つて『写真撮つてもいいよ』

写真を撮る。それもいいな、と考えていたのだが、次の瞬間、蘭の
した行為を見てそれは崩壊した。

『おつかれさまで、かわいいー！』

そつ言つと蘭は、完成したばかりの雪だるまにそつとキスをしたのだ。

気がついたら、蘭が泣いていて、雪だるまも壊れていた。

蘭が泣きながら途切れ途切れに言つ言葉から、自分が壊したんだな、と分かつた。

すると、蘭の泣き声を聞いて有希子が家から飛び出してきた。それで前の場面に至つた、と言つ訳だが・・・

自分が悪いのは十分に分かつている。

誰に非があつたか、と言えば間違ひなく、100%自分だ。

だから素直に蘭に謝ればいい。

なのに・・・

さつき蘭がしていた行為を思い出すとどうもなげイライラして、謝る気が起きなくなつてしまつ。

かといつて謝らないままでは家にも入れて貰えないし、蘭とも会えない。

どうしよう、と考えた末、彼は隣家へと足を運んだ。

1時間後、疲れたのか舟を漕ぎだした蘭に毛布を掛けてやりながら有希子は微苦笑した。

先ほど、庭で何が起きたかは蘭から聞いた。
そして分かったのだ。

どうして普段は物わかりのいい息子が蘭を泣かせ、だんまりを決め込んでいたのか。

「まあーったく、自分で作つた雪だるまに嫉妬するなんて・・・
まだまだ子供ね、と小さく呟く。
と、そこへ足音も荒く駆け込んできたのが1人。

「蘭ー！」

「しー、今寝てるわよ。
で？家に入つてきたつてことは蘭ちゃんに謝る気になつたの？ヤキモチわん？」

「バ、バーローー母さんには関係ねーだろー！」

有希子のからかい交じりの問いに、新一が顔を赤らめながら反駁する、

「う、ううん・・・」

小さな声をあげて蘭が目を覚ました。

「あー、新ちゃんがつむぐへんから起きたじゃない」

「・・・俺のせいかよ」

目を覚ました蘭は、田の前で繰り広げられる親子のやり取りを田をパチクリさせながら見、次にはあっと顔を明るくする。

「良かった、新一、家に入れて貰えたんだあ」

一寝入りしてスッキリしたのか、先ほどのことなど忘れて様子だった。

そんな蘭に新一は躊躇しながらも隠し持っていた1枚の紙を渡す。

「え、何? くれるの? 見てもいい?」

瞳を輝かせながら蘭は受け取った紙を開く。と同時に有希子もそれをのぞき込む。

そこに描かれていたのは

「あー雪だるまー・・と私?」

描かれていたのは、どう見ても雪だるまにしか見えない物体と、女の子が1人。

なるほど、絵の中で笑っている少女の服装は確かに今日の蘭のものと同じだった。

「あらホントだわ。新ちゃんが描いたの?」

有希子の問いに、新一は未だ少し気まずそうにしながら答える。

「ま、その・・蘭は雪だるまと『真撮り』たがってたし、俺が壊しちまつたし

だから代わりに。その・・悪かつたよ」

最初、新一は阿笠博士に頼んで蘭と雪だるまの合成写真でも作って貰おうかと考えていたのだが、わけを聞いた博士に『本当に悪かつたと思ってるなら今的新一が、自分で出来ることで詫びてみたらどうじや?』と諭され、結局思いついたのがコレだった。

急いで描いたので新一としては満足の行く出来ではなかつたのだが、蘭は嬉しそうだった。

「ありがと!新一!大事にするよ!」

そう笑つて大切そうに絵を抱き込む。

と、唐突に何か思い出したような顔になり、有希子に色鉛筆を要求した。

渡された色鉛筆で蘭は何やら夢中になつて新一の描いた絵に描きだす。

「できたあ!」

10分ほどした後、満面の笑みと共に蘭が描き上げたのは

「オレ?」

新一の絵だった。

心底意外そうに蘭を見やる新一に蘭は花が綻ぶような笑みを見せ、言ひ。

「うん。だつて新一と一緒にじゃなきや、つまんないんだもん!」

雪の積もったある冬の日、雪も溶けそつたほど熱い、小さなカップルに起きた小さな大事件。

雪も溶けぢやう（後書き）

実はこれ、先日の黒野由香里さんのリクを受けた時に考えたネタでした。

書くときにはじつにしようかなーとか思つて、結局「そばで」の方を書いたのですが、やっぱりこっちも書いてみました（^_○^）

こつちはヤキモチ新ちゃんです

枯れないモノ（前書き）

リクがまだ思いつきませんので、その前にちび新蘭＆コ蘭

枯れないモノ

風呂上がり、コナンが蘭にお風呂が空いた事を知らせに言った時、蘭は何か大きな本を広げて懐かしそうに笑っていた。

「蘭ねえちゃん、どうしたの？」

不思議に思つて声をかけると蘭は一瞬ビクリと肩を震わせてから振り返る。

そんな蘭の手にある本の正体はアルバムだった。
どうやら思い出に浸つていたため、コナンが部屋に入ってきたことに気がつかなかつたようだ。

「あ、コナン君……驚かさないでよ。
あのね、昔の写真を見てたのよ」

コナン君も見る?と蘭が手招きをしたので遠慮なく蘭に近寄る。
蘭が開いたページにあつたのは

「わあ、森の中だね! お花もいっぱいある!..」

「うん、幼稚園の遠足で行つたの」

幼いころの蘭や新一、園子や他の園児たちが先生たちに見守られて、
楽しそうに自然を満喫する姿だった。
園子などはこっこに咲く花を冠にして「満悦だ」。

その周囲にも、同じようなことをしている女児たちがいた。

だが、

「あれ？ 蘭ねえちゃんは作らなかつたの？」

「え、何を？」

「お花で「冠」とか、指輪とか」

そう、多くの女児が花を摘んでいるのに対し、写真の中の蘭は花を見ているだけだったのだ。

珍しいと思って訊くと、蘭はふと小さな笑みを零し、語り始めた。

遠いあの日の出来事を

「はい、みんな、ここで自由時間になります。

ただし先生の用意つく所にこること一・勝手に遠くへ行っちゃダメよ！

そんな先生の注意を合図に園児たちはわざと好きな所へ散つて行つ

た。

今日は遠足。少しばかりはしゃいでしまつても仕方がない。
もちろん、蘭や園子、そして新一も同じだった。

新一は普段、蘭と共に行動することが多いのだが、今日は他の男児達と一緒になつてはしゃいでいる。

いたずら盛りの少年たちは木の上に登つたりして、先生たちを責くさせている。

そんな彼らとは反対に、少女たちは満開の花畠に夢中だった。
器用な子は花冠などを作り始めている。

それを見た園子は田を輝かせると蘭の手を引っ張つた。

「らん！わたしたちもお花のとーこーひー。」

「うんー。」

花畠に着くと園子は早速花摘みを始めた。

蘭はと詰つと、園子や、周りの女の子達の勢いに押されてなかなか摘みだせないでいる。

と、園子が急に夢見る瞳になつてしゃべりだした。

「ねえ、らん。こんな王子さまじゃないかなあ？」

「どたな？」

園子の憧れの王子様話はよくあることだが、今回はどんな王子様なのだろ？、と蘭は耳を傾ける。

「あのね、2人でお出かけするでしょ？」

それでここにみたまにいーつぱーの花畠があるといひつての

「うそ」

それで?と先を促すと園子は再び話し始める。

「それでね、わたしが『このお花キレイ!すてき!』って言つたら、彼は手早くそのお花で王冠と指輪を作ってくれるの。でね、いつもお姉さまはキミだけだ!『さすがにこのお姫さまは』って!

「いいと思わない?キレイなお花ももつてかえるるし!」

園子にしてはずいぶんと規模のかわいらしいものだったが、

「うん!ステキ!」

それは少し憧れてしまつロマンチックなシチュエーションだな、と思つた。

「王子さま、かあ・・・」

小さく言つと、蘭はチラリとほしゃいでいる少年たちに目を向ける。

視線の先にいるのはいつも一緒にいる彼の姿。

そして園子がそんな蘭の様子を見逃すわけがない。

「あ~、らん、今、しんいち君の方見たでしょ?しんいち君にやつてほしいんだ!?」

「う、ちがうよ。」

慌てて否定したが、園子は聞く耳持たない、

「じゃあしここで蘭に会ってもらひませこ、じやんーすーい、しんい
ち君ー。」

と、勝手に新一を呼んでしまった。

「どうしたんだよ、何か用か？」

園子は新一を呼ぶとわざと姿を消し、新一は蘭に質問をしてきた。

「え、えっとその、用ひてこつか

どうして、ここまで来たらいちひまわやおつかな、なんて考えた
蘭は思ひ切つて言つ。

「あ、あのお花！かわいいよな、すいこキレイ

園子の妄想とは少し違つた言い方だが、もしかしたら、自分の為に
お花を採つてくれるかもしれない、と期待を込めていた。

「え？あ、あ、キレイだな」

「ねーきれいでこよねー。」

新一が同意してくれたので蘭は嬉しくてたまらない。

「なんだよ？欲しいのか？」

「う、うんー。」

口には出れない気持を読み取ってくれた、と蘭の期待はどんどん増していく。

もしかしたら、本当に採ってくれるかも、と。

だが、新一が次の瞬間放った言葉は予想の正反対を行くものだった。

「やめとけよ」

「え？」

「どうしてそんな事を言われたのか分らず、聞き返すと新一は続けた。

「どうせ摘んでもすぐに枯れちゃうんだぜ？花が可哀そっだら」

ズキッと来た。

そのまま蘭が何も言えないでいると新一は言い続ける。

「キレイだからとが欲しいからとか、そんな理由でこんなにキレイに咲いてる花を摘むなんてただのわがままじゃねえか」

新一は、正しい。

正しきて、反論ができない。

新一が正しい事は十分に分かつていたし、だからこそ花のことまで考えなかつた自分が情けなくなつて思わず泣きだつた時だつた。

「だから、・・・・・」

その時、新一が言った言葉は何よりも嬉かつた。

新一は、あの日、花はくれなかつたが、代わりにある約束をくれた

のだ。

「新一はね、『花が見たかったら俺がまた連れて来てやる』って約束してくれたの。

お花は枯れちゃうけど、約束なら枯れないだろ? ってね。だから私はお花は摘まなかつたんだ」

「そうなんだ」

言いながら、コナンは本当に途中で思い出していた。自分がした“約束”的ことを。

(やつと言えば、そんなこともあつたな)

そう思いながら、コナンは蘭にある提案をする。

「ねえ、蘭ねえちゃん

「何、コナン君?」

首をかしげて、ひざを見下ろしてくる幼馴染に声。つ。

「今度、僕と行かない? その森に」

「え?」

「だからさ、新一にいちゃん、最近いないから、代わりに僕が連

れてつてあげる」

「ナンの言葉の意味を解すると、蘭はふつと微笑むと

「うん、私も「ナン君と行きたいな」

きっと、それは2人にとって楽しい思い出になるだろ？

復つ活()!

コナンのまま10年が過ぎた話。

蘭 口 哀 みたいな?

元ネタは某少女漫画から

ネガティブコナン注意

seventeen o'clock

People in the world sometimes compare life to 24 hours . . .

世の中には、人生を24時間に例える人がいるらしい・・・

哀はほんやりとしながら、そんな事をふと思い出した。

一生を1日に例えると、生まれた時が0時丁度で、1時間はだいたい
13～4歳。

その計算でいくと、今、哀がいるこの教室の皆は17歳、つまり朝の4時とか5時くらいで、これから夜明けを迎える、希望に満ちた時間、なのだそうだ。

だけど、

（もつとも、実年齢の違う私には当てはまらないけどね・・・）

実際は20代後半である自分は違う、と哀は考える。

今の自分は、夜明け前の希望にあふれる人間ではない、と。

8年前、FBIの手によって、組織は壊滅。コナンと哀の生活にも平和が訪れた。

だが、薬のデータが失われたため、2人は一度と元に戻れなくなってしまった。

コナンは『お前は悪くないから気にするな』などと黙ってくれたが、罪の意識は消えることなく、哀の心の中で渦巻いていく。こんな状態で、希望を抱け、と言う方が無理なのだ。

しかし、それは本当に自分だけなのか

『あー、ヤバイって！彼氏に振られそー』

『部活で1年生に負けた～』

『いやだあ、また太つた！』

『この間の試験が悪くて・・・』

『聞いてよ～江戸川君に告つたけど、ダメだったあ・・・』

ある人は彼氏との関係を
ある人は部活のレギュラーの座を
ある人は己の体型を
ある人は試験結果を
ある人は失恋を

様々な17歳の集つこの空間は、同じくいろいろの憂いで満ちている。

こんな、憂鬱に満ちたこの教室は、夜明け前と言つより、1時間1歳進む方式で、17時の方がふさわしい気がする。

これから夜の闇に呑まれる、夕刻に

「工藤君」

放課後、哀は人気のなくなった教室でぼんやりと佇むコナンに声をかけた。

コナンは呼びかけに応じてゆっくりと振り向く。その顔は、他の皆と同じ様に、憂いを湛えていた。

「聞いたわよ？ また、告白されたんですってね」

何か用か？ と言いたげなコナンにそう言つと、コナンの顔が少し曇る。

別に、それは哀の質問を疎んでいる訳ではない。

コナンはいつも、告白を断り、その度にこんな顔をする。

「あ、ああ。まあ・・・」

コナンがなんともあいまいな返事をした瞬間、コナンの携帯が鳴りだす。

どこか悲しげな短調のメロディは、メール受信時のことだ。携帯を開くと、その顔が一層、翳りを帯びる。

その表情で、哀は誰からのメールかを悟る。

「蘭さんね？」

今度はコナンは返事をしない。

返事をしない代わりに、すっと携帯を差し出してくる。

画面に映るのは、誕生ケーキを前に笑う、幼子。

蘭の、子供だ。

工藤新一の想い人、毛利蘭は待ち続けた幼馴染への想いを断ち切つて、4年前に別の男性と結婚した。子供はもう3歳になるはずだ。

「なんて言つたか、さ」

幸せそうな幼子と対極の表情を見せるコナンはぽつり、と語りだす。

「俺みたいなのに、告白するのだつてすつげー勇気いたんだろうな、とかそう言つて、わかつてんんだよ」

自分が、蘭に対してそうだつたから。

「わかつてんのに、踏みにじるしかない俺が嫌になる」

まだ、彼女が好きだから、少女達の想いは、受け取ることが出来ない。

終わった事、なのに未練がましく彼女を想う自分も、彼女の幸福を嬉しいと思いながらも、どこかで哀しんでいる自分も、その苦しみや悲しみを知つていながら、他人に同じ思いをさせてしもう自分も、

全て嫌いだ、とコナンは言つ。

だから、告白を断つた後に、相手の気持ちを考えるとそれだけで頭がいっぱいになつてしまつ、と。

「別にそんなことまで聞いてないわよ」

「悪かったな」

冷たく切り捨てるふりをしながら、涙は止まない。

もしも、もしも自分が、他の少女たちと回りぶらついて彼に想いを告げたりひとつなるのだろう、と。

あつと、結果は変わらない。

驚きはするかもしれないが、後は嘘と回りぶらついて断るのだろう。

でも、そんなことまでつでもいい。

振られたその後は、普段は推理しかない彼の頭の中は、自分で一つ
袁

自分でも、あんな瞳をして、思つてもうらえるのだろうか？

それは、強く、甘く、哀の心を惹きつけた。

「俺、田畠警部に呼ばれてるから。じゃあな、灰原」

そう言って、コナンは教室を後にした。

1人教室に残つた哀は窓から空を見上げる。

時刻は17時。

明るかつた空は、宵闇に呑まれ始めていた。

seventeen o'clock s (後書き)

久しぶりに書いたらなんか訳わからんのが出来ましたね・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3204v/>

バラエティギフト

2011年12月16日22時51分発行